

靈界物語 第一九卷 如意寶珠 午の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第一九卷』愛善世界社

1997(平成9)年02月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序じよ

凡例はんれい

總説そうせつ

三十三魂みづみたま

第一篇

神慮洪遠しんりよかうゑん

第一章 高たかくま熊山やま（謠曲調）〔六四六〕

第二章 鴉いすかの嘴はし〔六四七〕

第三章 千騎せんき一騎いつき〔六四八〕

第四章 善ぜんか惡あくか〔六四九〕

第二篇 意外いぐわいの意外いぐわい

第五章 零敗ゼロはいの苦く〔六五〇〕

第六章 和合わがふと謝罪しゃざい〔六五一〕

第七章 牛飲ぎういん馬食ばしょく〔六五二〕

第八章 大悟たいご徹底てつてい〔六五三〕

第三篇 至誠しせい通神つうしん

第九章 身魂みたまの淨化じやうくわ〔六五四〕

第一〇章 馬鹿正直ばかしやうぢき〔六五五〕

第十一章 變態動物へんたいどうぶつ〔六五六〕

第十二章 言照姫ことてるひめ〔六五七〕

第四篇 地異天變ちいてんぺん

第十三章 混線こんせん〔六五八〕

第十四章 聲こゑの在所ありか〔六五九〕

第十五章 山神やまがみの瀧たき〔六六〇〕

第十六章 玉照彦たまてるひこ〔六六一〕

第十七章 言靈車ことたまぐるま〔六六二〕

靈たまの礎いしづゑ（五）

一、本卷には、主として玉照彦の御因縁に就て物語られてありますが、玉照彦は第十八巻の玉照姫と相並びて五六七神政の生御魂となられます。その意味に於て第十八巻と本巻は姉妹巻を成すものといえます。

一、本巻の第一章「高熊山」は謡曲の形式に作られたものです。

大正十二年二月

編者識

總説 三十三魂

内【外】の【山】に塞がる醜雲を

【豊】な空【二】に晴らすこの物語

（外山豊二）

皇神の教の花も【櫻井】の

瑞を【重】ねて【雄】々しきこの物語

（櫻井重雄）

【谷】波なる出【口】の神の言靈に

【正】しく【治】まる神國の空

（谷口正治）

曇る【加藤】見えし綾部の大元も

晴れ【明】しけりこの物語（加藤明子）

【松】ぶさに四方の【村】雲吹き散らし

【眞澄】の空に鳴るはこの物語（松村眞澄）

【谷】波なる神住む【村】に【眞】誠の

【友】を集めて物語するも（谷村眞友）

【近】き世も【藤】き神代も隔てなく

【貞】か【二】明かす靈界物語（近藤貞二）

【藤】かづら【津】留を手繰りて【久】方の

遠き昔の物語せむ（藤津久子）

いと【高木】神の教を金【鐵】の

魂【男】力に明かし行くかも（高木鐵男）

【井】す細し【上】つ代の事悉に

聞き洩らさじと【留五郎】の筆（井上留五郎）

【上】つ代の道【西】あれば洩らさじと

心【眞澄】の筆に寫しつ (上西眞澄)

よしや【吉】高天【原】は曇るとも

晴らして【亨】るこの靈界物語 (吉原亨)

いと清き奇き靈界物語

一筆記すと【湯淺仁齋】 (湯淺仁齋)

【石】の上神代の戸張【破】られて

四方の國々【馨】るこの物語 (石破馨)

【藤原】の家の流れの瑞月が

【勇】みて【造】る靈界物語 (藤原勇造)

【藤】榮え【松】茂るなる神の教

【良】く【寛】かに傳ふこの物語 (藤松良寛)

【嵯峨根】ぢにかへりし【民藏】よろこびて

心を直す靈界物語 (嵯峨根民藏)

いや【廣】き河【瀨】の波の音も【義】

【邦】人さます靈界物語 (廣瀨義邦)

【奥】深く包む【村】雲かきわけて

神代の【芳夫】あかす靈界物語 (奥村芳夫)

【谷川】の流れの【常】に【清】き如

湧きて出口のこの物語 (谷川常清)

【東】の空【尾】照して世を救ふ

教の【吉雄】示すこの物語 (東尾吉雄)

皇神の深き眞【森】に心地【良】く

至【仁】至愛の教明かすこの物語 (森良仁)

空【高】き黄金【橋】や【常】立の

【祥】たき道を渡るこの物語 (高橋常祥)

和知【河】のその中【津】瀨に下り立ち

靈魂の垢【雄】流すこの物語 (河津雄)

久く【土井とみ】とていやがる靈界物語れいかいものがたり

浦うら【靖都やすくと】の杖つゑと知らずに（土井靖都）

【有田ありた】けの夢ゆめ打ち明あけて【九臯くこう】の

空そらかがやかすこの物語ものがたり（有田九臯）

語かたるべき時は漸やうやく【北村きたむら】の

【隆たか】く【光てる】らむこの物語ものがたり（北村隆光）

【大おほ】神かみの神ほ【賀ご】言ことつばらに萬代よろづよの

【龜かめ】のよはひの物ものが【太郎たろう】なり（大賀龜太郎）

【吉よし】凶あしを【見み】極はめ述のぶるこの物語ものがたりに

心こころ【清よ】めよ神かみの生宮いきみや（吉見清子）

今迄いままでは深ふかく包つつみて【岩田いはた】帶おび

【久ひさ】か【太た】ぶりに解とき初そめにけり（岩田久太郎）

【池澤いけさ】に浮うかべる月つきの影かげ清よく

【原二もとに】納をさめし光ひかり出いでけり（池澤原二郎）

丹波【栗】【原】を開いて打明かす

(栗原七藏)

五六【七】の教【藏】この靈界物語

(出口王仁三郎)

千早振神の【出口】の物語

【王仁】口開けて能くも【三郎】

(出口宇知麿)

天地の神の出口の大本は

【宇知】と外とを【麿】め行くな里

神界出口の瑞月が

苦集滅道の眞諦を

雲の間に間に出没し

三十三相の木花の

咲耶の姫の三十四相

具足し玉ふ妙音菩薩

言依別の後援に

夢物語としるしおく。

大正十一年舊四月十四日

於松雲閣

著者ちよしやを除のぞき筆録者ひつろくしや三十三名さんじふさんめい、其中そのうち 印九名じゅうきゅうめいは上天者しやうてんしやにして 印四名じゅうよんめいは脱退者だつたいしやなり。

昭和十年五月二十八日現在

第一篇 神慮洪遠

第一章 高熊山（謠曲調）（六四六）

梅咲き匂ふ春の夜半、牛飼ふ男子の枕邊に、忽然として現はれ出でたる異様の
輝き、眼を睜り眺むれば、世人の無情残酷を、うら紫や青黄色、神の大道も白玉
や、赤き心の五色の玉は、賤が伏屋の室内を、右往左往に飛び交ひて、何時とは
なしに男子の身體目蒐けて、或は胸に、或は腹に、肩に背中せなかに滲み込み、男子は
たちまたちま心機一轉して、三十路みそぢに近き現身うつそみの、命毛いのちげの筆執ふでとるより早く、苦勞くらうする墨硯すみすずり
の海うみに、うつす誠まことの月照つきてるの、神かみの御靈みたまに照てらされて、床とこの間ま近く立寄たちよりつ、壁かべに
さらさら書き下ろす、天地あめつち大本おほもと大御神おほみかみ、今日けふは昨日きのふに引替ひきかへて、此世このよに神かみなきも
のをぞと、思おもひ詰つめたる青年わかものが、恭敬きやうけい禮拜らいはい神號しんがうを唱となへつつ、吾身わがみの罪つみを詫わぶる折をり
しも、門かどの戸とを叩たたき訪おもつる者ものあり。

神使「吾こそは、天教山に現はれ給ふ木の花姫の御使、彌勒の御代を松岡の、梅花も開く蓮葉の、臺の國に導かむ。早く此門あけさせ給へ」

若男「あら訝かしや、此眞夜中に金門を敲く人の有りとは。風も静まり水さへも、子の正刻に候へば、夜の明くるを待つて訪れ給へ」

松岡神使は詞も終らぬに、戸をさらりと引き開け、悠悠として入り來り、

神使「吾は天教山の皇大神の御使なり。抑も木花咲耶姫命、蓮華の山に立たせ給ひて、西の空高く望ませ給へば、瑞雲棚引き、星の光奇く照させ給へば、神の仕組の眞人の現はれ給ふ瑞祥ならむ。汝迅く迅く我神言を奉じ、雲井の空を翔つて、天の八重雲押開き、心の空も丹波の、青垣山を繞らせる、穴太の郷に出立ちて、我神言を宣り傳へ、迎へ歸れとの御神勅なり。早々吾に續かせ、天教山に參上り給へ」

男子は益々訝かりつ、松岡神使の顔を打眺め、暫し茫然として居たりけり。時しもあれや一陣の春風烈しく、梅の花片を撒いて、家の外面を亘りゆく。忽ち屋内に美妙の音楽聞え、梅の花片チラチラと、男子が頭に降かかるよと見る間に、

紫の被衣に包まれ、あと白雲となりにける。

若男「嗚呼吾は空行く鳥なれや。遙に高き雲に乗り、地上の人が各自に、喜怒哀樂に捉はれて、手振り足振りする様を、吾を忘れて眺むなり。實に面白の人の世や。然れども餘り興に乗り、地上に落つる事もがな。嗟、大神よ大神よ、千代に

八千代に永久に吾身を守らせ給へかし」

と唯一筆の落し書、賤が伏家に遺し置き、松樹茂れる山の口、洋服姿の松岡神使、俄に白髪異様の神人と變化し、男子が手を把り、林の茂みをイソイソと、進むで此處に如月の、九日の月西山に傾きて、再び閉ざす闇の幕、千丈の岩窟の前に着きにけり。

松岡神使は男子に一禮し、

神使「此處は名におふ、高天原の移寫と聞えたる高熊山の岩窟にて候、天地百の神たちの、時有つて神集ひに集ひ給ふ、四十八個の寶座あり。吾はこれにて袂を別たむ。汝は此處に現世の粗き衣を脱ぎ、瑞の御靈の眞人として、五六七の神業に奉仕せよ。さらばさらば」

と云ふかと思れば、姿は消えて白雲の、彼方の空に幽かに響く訝かしさ。男子は忽ち身體硬化し、時間空間を超越し、寒暑の外に立ちて、何時とはなしに身變定の、今の姿と白装束、黄金の翼身に備へ、一道の空に輝く光の架橋、矢を射る如く天の八重雲切り抜けて、須彌仙山の頂上に、早くも其身は立ちにける。白馬に跨り、白雲別けて驅來る一人の神人、男子の前に立ち現はれ、馬を乗り棄てツカと立寄り、男子の左手をシツカと握り、

明神「われは小幡大明神なり。此度五六七の神世出現に際し、天津神國津神の依さしのままに、暫時丹州と現はれ給ふ汝が御靈、現幽神三界の探險を命じ、神業に参加せしめよとの神勅なれば、三十五年の昔より、木の花姫と語らひて、汝が御靈を拜領し、我が氏の子として生れ出でしめたり。ゆめゆめ疑ふ事勿れ」

男子は驚き「ハイ」と一聲、さし俯き、涙に暮るる折しもあれ、松吹く風に覺されて、四邊を見れば此は如何に、處はシカと分らねど、何處とはなしに見覚えの、有難や、清き岩窟の前に端坐し居るこそ不思議なれ。男子は首を傾け、

若男「人里離れし此深山の奥、何處の山かは知らねども、何とはなしに、心勇ま

しき所かな。牛飼ふ男子の昨日まで、賤の職業に勵精みし身の、四邊に輝く吾身の服装、紫青赤白黄色、白地に梅の花は散り、裳裾に松葉の模様、何時の間には更衣や、忽ち變る女神の姿、心も凧ぎて春風の、木々の木の花撫で渡る、いとも長閑な思ひなり」

忽ち虚空に音樂聞え、今迄岩窟と見えしは、夢か現か幻か、際限もなく四方に展開せる、莊嚴無比の大宮殿、黄金の薨旭に輝き、眼下の溪間を眺むれば、緑漂ふ池の面に、鴛鴦の比翼の此處彼處、時ならぬ菖蒲の花も咲きみだれ、百鳥の唄ふ聲、天國淨土も斯くやあらむと思はる許りなり。嗚呼訝かしや訝かしやと、首を傾げ思案に暮るる時しもあれ、宮殿の彼方に聲ありて、

瑞月、瑞月

と呼ばせ給ふ。男子は此聲に耳を澄ませ、

若男「瑞月とは誰人なるか、われより外に人も無し。怪しき事よ」

と佇む折しも、黄金の翼を翻し、此場に向つて現はれ来る、黄金の鷄を先頭に、孔雀、鳳凰、迦陵頻伽、八咫鳥、何時とはなしに王仁の身は、又もや月の付近ま

で進み居るよと見る中に、黄金の扉は開かれて、中より現はれ給ふ梅花の如き女神の姿、二人の侍女に松梅の小枝を持たせ、御手に玉を携へて、言葉静かに宣り給ふ。

女神「われこそは三千年の其昔、國治立の大神と共に、中津御國の聖地を後にして、根底の國に到りしが、一度に開く梅花の時を得て、再び天に舞ひ昇り、今は西王母が園の桃、花散り實のる時ぞ来て、皇大神に奉らむ。時遅れては一大事、小幡明神の承諾に依りて、今より汝が命の體を借らむ」
と言ふかと思れば、姿は消えて白煙、忽ち其身は天馬に跨り、小幡明神に送られて、宇宙の外の世界を眺め、地上を指して降り來る。此處は何處ぞ、以前の寶座の前、不思議なりける次第なり。

(大正一一・五・六 舊四・一〇 松村眞澄録)

本章は、謠曲まがひに口述してありますから、専門の方々は言葉の長短を補ひ又は削り謠ひよく直して見て下さい。

第二章 鴉の嘴〔六四七〕

足踏む隙も夏草の、生茂りたる魔窟ヶ原、山時鳥悲しげに、血を吐く思ひの岩窟の中、高姫、高山彦、黒姫の三人は、奥の一室に鼎坐して、紫姫や青彦の、消息如何にと待ち居たる。頃しもあれや梅公は、辰、鶯二人を従へて、息せき切つて馳せ歸りきぬ。

寅若「ヨオ、梅公ぢやないか、何處へ行つて居たのだ。甚う顔の色が晴れ晴れして居ないぢやないか、何時も快活なお前に似合はず、どこともなく影が薄う見えて仕方がないワ」

梅公「エ、何でもない、お前が出る幕ぢやないから柔順しく待つて居る」

寅若は「ニタリ」と笑ひ、

寅若「ヘン、やられよつたな、鼈に尻をやられたと云はうか、嘘を月夜に釜を抜かれたと云ふ爲體、又も違つたら梟鳥が夜食に外れたと云ふ鹽梅式だな、黒姫さまもよい家來をお持ちになつて仕合せだワイ、イヒ、イヒ、」

梅公「エ、喧敷う云ふな、其處退け、ソナ狭い入口に貴様が立つて居ては這入る事も出来やしないワ」

寅若「ハ、ハ、ハ、可成這入らぬが好からうぜ、御注進申上げるや否や形勢不穩、大地震でも勃發してみよ、此岩窟はガタガタだ。此寅若は御信任が無いから駄目だが、併し紫姫さまや、青彦さま、それに次で梅公と來たら豪いものだよ。一回今回の失敗、否、お手柄話を聞かして貰はうかい、何時も黒姫は目が黒いと仰有る、間違ひはあるまい、此眼で一目睨みたら些とも違はぬと仰せられるのだからなア、アハ、ハ、ハ、」

と頤をしゃくつて入口に立ち塞がり、「きよく」つたやうな笑ひをする。奥の一室には高姫、高山彦、黒姫三人、鳩首謀議の眞最中なりける。

高姫「これ黒姫さま、紫姫や青彦が立出してから、もう一週間にものなるぢやありませんか、それに今になつて、猫が嚏をしたとも、膿んだ鼻が潰れたとも云ふ便りが無いぢやありませんか、貴女のお眼識に叶つた許りか、選抜してお遣りになつたのだから、如才はありますまいが、萬一あつては大變だと氣に懸つてなりま

せぬワ」

黒姫は稍不安の面持にて、

「何分突飛な談判に遣つたものだから、摺つた揉んだと、毎日問題が次から次へと提出され、家庭會議でも開いて連日連夜小田原評定に時を費やして居るのでせう。早く成るものは破れ易く、遅く成るものは破れ難し、大器晩成と云つて暇の要る程脈があるのですよ、一年にすつと伸びて花の咲く草木は秋が来れば萎れて仕舞ひます。梅櫻、桃椿などの喬木になると、二年や三年に花は咲かない代りに、天を衝くやうに其幹は成長し、毎年々々花も咲く、私の眼識に叶つた紫姫、青彦の事ですから、よもや寝返りを打つと云ふ事はありますまい、ナア高山彦さま」

高山彦「サア、何とも保證の限りではないなア」

黒姫、目に角を立て、

「エ、何と仰有る、高山彦さま、餘り紫姫や、青彦を見損つてはいけませぬよ。

お前さまの身魂は昔鬼城山にあつて木常姫さまに悪い事を教へ、今度は南高山の寶取りには道彦の爲に大失敗を演じ、今又ウライナイ教へ歸つてくると云ふ身魂だ

から、ソナナ考へが出るのだよ、自分の心を標準として青彦や紫姫の心を測量な
さるとは、些と残酷と云ふものだワ」

高山彦は少し聲を高うして、

「昔は昔今は今ぢや、身魂に経験を積み来て居るから、大概の人の心の底はよ
く分つて居る。何時も俺は柔順しくして不言實行主義を採つて居れば、貴様は何
時も先に出て何から何迄、搔いて搔いて搔き廻し、一言云へば直ちに眉を逆立て
鼻息を荒くし、口から泡を飛ばすぢやないか、俺は五月蠅いから何時も黙つて居
るのだ。今日は幸ひ高姫様の前だから、俺の思つて居る事を忌憚なく吐露したの
だ」

黒姫「そりや何を云ひなさる、貴方は此家の主人ぢやないか、私の云ふ事を聞く
やうな素直な身魂ですかいな、何でも彼でも一つ一つ【ケチ】をつけねば置かぬ
因果な身魂だから」

高山彦「今度の青彦、紫姫を派遣したのはお前の發案だらう、其時俺は貴様に劍
呑だからそつと寅若でもつけてやつたら何うだと云うたぢやないか、其時貴様は

首を振り、大變な荒びやうだつた、ア、又毎度の病氣が出た哩と思つて辛抱して居たのだ。此奴は屹度不成功、否不成功のみならず、青彦、紫姫は三五教の間謀だつたに違ひない」

黒姫「何を云ひなさるのだい、マア見て居なされ、屹度今に分る。玉照姫を連れて青彦が歸つて來ますよ。若し連れて歸つて來なかつたら、二度とお前さまにも高姫さまにもお目にかかりませぬ哩なア」

と頭をしやくり、上下の齒を「ぐつ」と噛みしめ、前に突き出して見せける。高山彦はムツとしたか蝶螺のやうな拳骨を固めて黒姫の横面を撲らむとする。スワ一大事と高姫は仲に割つて入り、

「ヤア待つた待つた、犬も食はぬ喧嘩をすると云ふ事がありますか、些と心得なさい。お前さま二人はウラナイ教の柱石たる重要人物ぢやないか、ソナ事で皆の者に教訓が出來ますか」

黒姫「ハイハイ、左様で御座います、何分宅のがヒヨットコですから」

高山彦「こりや黒、ヒヨットコとは何だ。俺がヒヨットコなら貴様はベツトコだ」

高姫「コレコレ、お二人とも詔直した詔直した、言靈をお愼みなさらぬか」

斯かる所へ寅若を先頭に、梅、辰、鳶の三人は現はれ来り、

寅若「黒姫様、三人の、私へ隠してお使が偉い勢なくして歸つて参りました、

何卒詳しくお聞き取り下さいませ」

黒姫「お前は梅公、辰公、鳶公、首尾は何うだつたな、紫姫、青彦を旨くやつた

らうなア？」

梅公「へエへエ、流石の青彦、紫姫で御座います、梅いことをやつて、此三人ぢ

やないが「鳶辰」やうに「トツト」と凱歌を奏して、何々の何へ向つて歸りまし

たワ」

黒姫「ア、さうかさうか、それは御苦勞であつた。サア早く玉照姫様のお居間

のお掃除を爲し、皆様の御飯やお酒の用意をして置きなさい」

梅公「ヘイ、根つから其必要は認めませぬがなア」

黒姫「そりや梅公、お前何と云ふ事を云ふのぢや、必要を認めるの認めないのと

何故私の云ふ事を聞かないのかい、これこれ辰公、鳶公、お前も御苦勞ぢやつた。

どうぞ詳しく高姫さまの前で、青彦や紫姫さまの天晴功名した事を聞かして下さい

鶯公「エー、もう餘りの事で申上げます事も出来ませぬ」

辰公「何と云つても六日の菖蒲、十日の菊、何が何んだやら薩張神様の御都合を頂いて来ました」

寅若「アハ、ハ、ハ、此奴餘程弱つて居やがるな、御都合と云ふのは卑怯者の適當

な遁辭だ。モシモシ黒姫さま、こいつは屹度【もの】にならなかつたのですよ、蛸の揚壺を食つて歸つたとより見えませぬな」

黒姫「これ寅若、お前に誰が物を尋ねたかい、彌仙山へ往つて失敗をして歸つて来たやうな男だから、今度の事は彼是云ふお前には資格がない、一段下りて庭へ下がつて其處の掃除でもしなさい。これこれ梅公早く云ひなさいよ」

梅公は左の手で頭を三遍ばかりも、つるつると撫でながら、

梅公「ハイ、私は紫姫、青彦その他一行の後を見え隠れに監視して参りました。

さうした處流石の青彦さま、綾彦お民の兩人を前に出して豊彦爺をアツと云はせ、

ヤアお前は綾彦であつたか、お民であつたか、ヤア父さまか、母さまか、妹か、兄さまかと一場の悲喜劇が現はれ、其處へ平和の女神然たる紫姫さまが、おちよボ口を「ぱつ」と開いて仰有るには、何事も皆神様のなさる事、豊彦さまも斯うして若夫婦が歸つて御座つた以上は、神様へ御恩返しにお玉さま始め、玉照姫様を神様に奉らねばなりませんまいと、さも流暢な辨で談判になりますと、豊彦爺は、喜ぶの喜ばないのつて、首を滅多矢鱈に振つて振つて振りさがし、千切れはせぬかと思ふ程首肯いて、仕舞の果にはドンと尻餅を搗き、眼を暈しかけました。マアさうして爺の云ふには、ア、結構な事だ、嬉しい時には欣喜雀躍、手の舞ひ足の踏む所を知らずと云ふ事だが、俺は餘り嬉しくて目のまひ、家のまひ、身體の居る所を知らずぢや、と云ひまして、それはそれは大變喜びましたよ。あれ位喜びた事は生れてから見た事も、聞いた事もありませぬワ」

黒姫「ア、さうだらうさうだらう、喜びたらうな、これ高山さまどうですか、これでも文句がありますかい、高姫さま、もうこれで、大きな顔で本山に歸つて貰はうと儘ですワイ、オホ、サア其次を梅公云ひなさい、瞬く間も待ち遠

しいやうな心持がする」

梅公「サア、これから先は時間の問題ですな、云はぬ方が却つて先樂しみて宜し

からう。オイ鳶、辰、貴様も些と云はぬかい」

辰公「ヘン、よい所ばかり食つて糟粕ばかり人に食はさうと思つたつて駄目

だよ、貴様が報告した後に……サアサア其次を諄々と掛け値の無い所を申上げて

お目玉を頂戴するのだな」

梅公「エ、何も彼も大將になると責任が重い、エイエイ仕方がない、ソンナラ私

が申上げます、黒姫さま喫驚なさいますな」

黒姫「何喫驚するものか、喫驚するのは高山さまぢや、餘り嬉しいて喫驚する者

と、餘り阿呆らしくて會はず顔がなくて喫驚する者と出来ませうぞい」

梅公「エ、紫姫、青彦はお玉、玉照姫様を連れて意氣揚々と、吾々を何々し、

何々の何々へ何々して仕舞ひました」

黒姫「これ梅公、アタもどかしい、早く云はぬかいナ、いつ迄私を焦らすのだい」

梅公「エイエイエ、決して焦らすのぢやありません、知らすのですよ、知らず識ら

ずの御無禮御氣障、知らぬ神に祟りなし、どうぞ私だけは今日の所は帳外れにし
て下さいませ」

黒姫「怪體な事を云ふぢやないか、さうして青彦の一行はいつ歸つて来るのだい
梅公「それは【いつ】になるとも判然お答へが出来ませぬなア、是も矢張時の力
でせう」

高姫「黒姫さま、青彦初め、紫姫は三五教へ歸つたのですよ」

梅公「マア マア、高姫さまの天眼力にて御觀察の通り、誠に以てお氣の毒千萬、
青彦、紫姫其他は共に「グレン」をやりました。今頃は世繼王山の麓で祝ひ酒で
も呑みて居るでせう」

と頭を抱へ小隅にすくみける。

黒姫「エ、ソナナ青彦ぢやない、又紫姫も紫姫ぢや、三五教へ行くなぞと、そり
や大方副守護神を放かしに往つたのだらう、屹度戻つて来る確信がある」

高姫「黒姫さま、もう駄目だ。高山彦さま、お前さまも立派な奥さまを持つて御
満足でせう、この忙しいのに永らく逗留してお邪魔をしました。エライ馬鹿を見

せて下さいましたナ、アーア、併しこれも何かの御都合だ。左様なら、歸ります」

高山彦「どうぞ私も連れて歸つて下さい」

高姫「お前さまの勝手になされ、黒姫さまを大切に御守りなさるが御徳だらう、

左様なら」

と、大勢の止むるをも聞かず、額に青筋を立て、偉い氣色で表へかけ出し、鶴、

龜來れと二人を伴ひ魔窟ヶ原を驀地に、由良の港を指して走り行く。

高山彦「こりや大變」

と捻鉢巻、七分三分に尻からげ、細長いコンパスに油をかけ、飛び出さうとする。

黒姫はグツと袂を握り、

黒姫「高山さま、血相變へて何處へお出るのでえ」

高山彦「定つた事だ。肝腎の玉照姫は申すに及ばず、青彦、紫姫迄三五教に取ら

れて、どうして高姫さまに申譯が立つか、是より此高山彦が世繼王山の悦子姫の

館にかけ込み、玉照姫を小脇にヒン抱き歸らで置かうか、愚圖々々致せば高姫さ

まは飛行機に乗つて「フサ」の國へお歸りだ、それ迄に玉照姫様を手に入れてお

詫をせにやならぬ、邪魔ひろぐな[□]
と蹶飛ばし、突飛ばし、一生懸命にかけ出したり。黒姫も聲を限りにオーイオー
イと髪振り亂し、帯を引きずり乍ら高山彦の後を追ひ、足に任せて走り行く。
(大正一一・五・六 舊四・一〇 加藤明子録)

第三章 千騎一騎(六四八)

高山彦は魔窟ヶ原の岩窟を後にし、一生懸命に聖地を指して進み行く。漸く白
瀬川の畔に着けば、降り続く五月雨に河水汎濫し、波堆く渡川は絶対に不可能と
なりぬ。

高山彦は川の岸を下りつ、上りつ、地團太踏みて口惜しがり、現在目の前に聖
地世繼王山を眺め、玉照姫の御座所は彼方かと憧憬の念に驅られて狂氣の如くな
り居たり。斯る處へ息せき切つて馳來りしは、妻の黒姫なりける。

「ヤーお前は黒姫か、何しに出て来たのだ」

高山さま、ソラ何を言はつしやる。此儘にして置く譯には行きませぬ。あれ

彼の向ふに見ゆるは世継王の神山、三五教の隠れ場所、玉照姫様は彼の森の「し

げみ」に御座るであらう。サアサア早く渡りなさい」

「流れと云つたつて此の激流が、どうして流れやうか」

「生命を的に渡るのだよ。それだから男は眞逆の時に間に合ぬと云ふのだ。お前

さまも鼻高の守護神の御厄介になつて中空高く渡りなさい」

「ソナナことを言つたつて、さう易々と元の體に還元することは出来ないよ」

「還元出来ないと云ふ道理があらうか、貴方の信仰が足らぬからだ。火になつて

も蛇になつても、此の川渡らな置くものか」

と云ふより早く、見るも恐ろしき大蛇の姿となり、激流怒濤の眞中を目標けて、

ザンブとばかり飛び込み、漸く對岸に渡り付きたり。

高山彦は此の氣色に恐れ戦き、ガタガタ慄ひの最中、蛇體の身體より黒雲起り

一團となりて、川の上空を此方に渡り高山彦の身體を包むよと見る間に、高山彦

は川の對岸にバタリと落ち來たりぬ。蛇體は忽ち元の黒姫と變じ、

「サア高山さま、コンナ放れ業は一生に一度より出來ないのだが、千騎一騎の此場合、黒姫が信念の力が現はれたのだ。サアサアこれに怖れず、今後は斯様なことは無い程に、妾に續いてお出でなさい」

高山彦は慄ひ聲で、

「ナント女と云ふ奴は恐ろしいものだなア」

「コレ高山さま、お前はモ一これで愛想がつきただらうな。愛想をつかさなら、

つかして見なさい、此方にも一つ考へがありますよ」

と冷やかに笑ふ。高山彦は眼を瞬たき、高き鼻を手の甲で擦り乍ら、

「イヤ何事も黒姫さまに御任せする、此後は一切構ひ事は致さぬ。貴女のお好き

の様に御使ひ下さいませ」

「大分改心が出來ましたナア、それでこそ妾の立派なハズバンドだ。サアサア往きませう、エ、なんとした足つきじやいな、確りしなさらぬか、此川を渡るが最

後、油斷のならぬ敵の繩張りだよ」

「さうだと云つて、ナンダか脚がワナワナして歩けないのだもの」

「エー何とした卑怯な人だらう。誰が恐いのだい。「たか」が知れた紫姫、青彦の連中ぢやないかいナ」

「青彦、紫姫も、ナンニも恐くはない。恐いのはお前の性念だよ」

「高山さま、斯う見えても矢張女は女だよ。御心配なさるな。これでも又大事にして可愛がつて上げますワ」

高山彦はブルブル慄ひ乍ら、

「ヤーもう可愛がつて貰はいつでも結構です。私の様なものは貴女のお側に寄るのは勿體ない。畏れ多い。どうぞ草履持になつとして下さいな」

「エー此人は又何とした卑怯なことを云ふのだらう。ア、もうすっかり愛想が盡きちやつた、嫌になつて了ふワ」

「どうぞ愛想をつかして下さいな。嫌になつて貰へば大變に好都合です」
黒姫は聲を尖らし、

「ソリヤ何を云ふのだい、嫌になつて呉れと言つたつて、今となつて誰がソリナ

輕擧なことをするものかいな。蛇に狙はれた蛙ぢやと思つて諦めなさいよ」

「ハイ諦めます。何事も因縁づくぢやと思つて、コンナ悪縁も辛抱致しませう。

前生の悪い因縁が報うて來たのだから」

「何が悪縁だへ。お前さまは男の心と秋の空、直に飽縁だらうが、妾は何處迄も

秋の空で、何處々々迄も好いて好いて好き透つてゐますよ、ホ、ホ、ホ、」

「モシモシ黒姫様、何卒人を一人助けると思つて私の罪を赦して下さいな」

「そりや又何を言ふのだえ、モ一斯うなる上は赦してたまるものか。龍宮の海の

底まで伴れて行つて呑みたり、噛みたり、舐つたり大事にして上げようぞへ」

「モ一大事にして貰はいでも結構です。何卒其の御心遣ひは御無用になさつて下

さいませ。返禮の仕方がありません」

「エーわからぬ男だ。話は後で悠くりして上げよう。サア一時も早く往かねばな

るまい。恰度日も暮れて來た」

と高山彦を先に立たせ、夏草茂る露野ヶ原を世繼王の山麓指して辿り行く。

五月十三夜の月は、橢圓形の鏡を空に照してゐる。馬公、鹿公は月の光を眺め、

ア、何といいい月ぢやないか、のう鹿公

ソリヤ馬公、きまつた事だ。五月五日の宵に玉照姫様がお越し遊ばし、記念す

べき月だもの。古往今來コンナよい月があるものかい。それに就ても可哀相なの

は黒姫ぢやないか。この通り御空に水晶の玉照姫様が輝き渡り、この又屋内にも

お玉さまに、玉照姫さまぢや、之を三つ合せて三つの御魂と云つても宜いわ。

ア、

濡れて出たやうに思ふや雨後の月

とは如何だ

ヤー鹿公、貴様俳句を知つて居るのか

ハイ句でも、歌でも、何でも知らぬものは無い。何なと言つて見よ。當意即妙、

直に作つて御目にかける鹿公だよ

ソナナラ今彼のお月さまに黒雲がさしかかり、今や隠さうとして居る。彼れを

「つやつて見よ」

「黒姫に玉照姫は包まれて 馬鹿を見むとす 青彦の空」

「何と云ふ縁起の悪い歌を詠むのだ。宣り直さぬかい、鹿公奴」

「大方馬公がさうお出ると思つて居た。今度が真劍だよ。」

青彦や紫姫の 大空に 月の玉照姫ぞ輝く

とは如何だ」

「ヨーシ モー 一つやれ」

「いくらでも、月を題にするのなら月は先祖よ。月の大神様が此世の御先祖様で

あるぞよ。馬公志つかり聞けよアーン、

月に叢雲花には嵐

東に旗雲笏星

天の河原は北南

星の流れは久方の

フサの御國に落ちて行く
高山彦や短山の

嶺より昇る月影も
今日は芽出度き十三夜

たとへ黒姫かかるとも
伊吹の狭霧に吹き散らし

忽ち變る大御空
紫姫や青彦の

清き姿となりにけり。

とは如何だ

随分長い歌だのう、鹿公

長いとも長いとも、今に長い奴が黒い顔してやつて來るのだ。横に長い奴と、

縦に長い高山彦の青瓢箪だ。うまくやらぬと馬鹿を見るぞよ。變性男子の申す事

は一分一厘違ひはないぞよ

何を吐すのだ、モ一好い加減に止めて貰はうかい。オイオイ彼れを見よ、二つ

の影が蠢いて居るぢやないか、鹿とは判らぬけれど

鹿公ヨ才來居つたぞ、太い短い奴と細い長い奴だ。ヤ一此奴は高山彦に黒姫だ。

愚圖々々して居ると空のお月さまの様に、黒姫に呑まれて了つちや、玉照姫様が
一大事だ、サアサア戸を締める」

と云ふより早く、鹿公は飛込みてピシヤリと錠を下ろしたり。

「オイ俺も入れて呉れないか」

「エー邪魔臭い。貴様は何處か叢の中へ潜伏して居れ、馬じゃないか。俺は中か
ら此の關所を死守するのだ」

二つの影は段々近寄つて来る。鹿公は何うしても開けぬ。馬公は已むを得ず茅
の「しげみ」に身を隠して慄ひ居る。

二人の影は戸口に現はれたり。一人は女、一人は男、

「モシモシ一寸此處を開けて下さいな」

「ナンダ、暮六つ下つてから他の家を訪れる奴があるかい。夜は魔の世界だ、用
があれば明日出て来い。此門口は鹿公は絶対に開けることは出来ないぞよ」

「左様で御座います。ホンのチヨイトで宜しい、一尺許り開けて下さい。申
し上げ度い一大事がございます」

鹿公、戸口に立つて、

「其方で一大事があつても此方も亦一大事だ。ナント言つても開けないよ。モシモシ青彦さま、貴方一寸来て下さいな。どうやら黒姫がやつて来たやうですワ」

青彦は奥の閒より、

「誰がなんと言つても開けられないぞ」

「さうだと言つて馬公が外に、這入り損ねて隠れて居ますがな」

黒姫は此の聲を聞き、邊りの叢を尋ね、

「ヤアお前は馬公ぢやな。サアもう大丈夫だ。コレコレ高山さま、用意の綱をお

出しなさい。エー何をビリビリ地震の様に慄ふて居なさる。氣の弱い獣だな」

と云ふより早く自分の細帯を解いて、馬公を縛つて了ひ、

「サア馬公、此方へ来るのだよ。此戸を開ける迄、お前は人質だ。若し開けな

つたら此黒姫が正體を現はして、一呑みに呑みて了はうか」

「エーコンナことだと思つて居つた。それだから神様が言靈を愼めと仰有るのに、鹿公の奴、黒姫が何うだの斯うだの言ひよるものだから、コンナ破目に陥るん

だ。オイ馬公は括られたよ、鹿公開けて呉れないか」

「貴様は括られる役だ、俺は中で長くなつてグツスリ休む役だ。マア夜が明ける迄、其處で立往生するがよいワ。お優しい黒姫さまと、色男の高山さまのお伴れだもの、あまり淋しくもあるまいがな」

「ソナ冷酷なことを言ふものぢやないよ、お前もちつとは朋友の道を辨へて居るだらう」

「マア待て、今これから紫姫様が十八番の言靈の發射を爲さるところだ。さうすれば黒姫だつて高山彦だつて風に木の葉の散る如く、悲惨な目に會つて滅て了ふのだ」

「さうしたら俺は何うなるのだ」

「貴様の事まで、未だ研究はして居らぬ哩。オイ黒姫の奴、誠に以てお氣の毒千萬、御心中御察し申す。高姫様に嘸お叱言を頂戴なさつたでせう。併し乍ら何程お前さまが玉照姫様をお迎へしようと思つてもモ一駄目だから足許の明るい間に、トツトと歸りなさい。其處に馬が一匹居るから、ソレに乗つてお歸りなさいよ」

「コラ鹿公、無茶ばかり言ふない、俺は決して黒姫さまの馬ではないぞ」

黒姫「どうしても開けませぬか、開けな宜しい。黒姫は道成寺の釣鐘ぢやないが此の家を大蛇となつて、十重二十重に取捲き、熱湯にして見せうか」

「モシモシ紫姫さま、青彦さま、確りして下さい。トツケもないことを言ひますぜ」

紫姫は言葉静に、

「ホ、ホ、御心配なさいますな。鹿さま、確かりと戸を締めて置きなさいや、モシモシ黒姫さま、誠に貴女には御氣の毒でございですが、神界の爲め、世の中の爲には貴女に對して不親切なことを致すのも已むを得ませぬ。どうぞ歸つて下さいませ」

「何と云つても歸らない。青彦と紫姫の素首を引抜いて、フサの國の高姫様にお目にかけて、玉照姫様を御迎へ申さねば置きませぬぞや」

青彦「何と執念深い婆アさまぢやな、青彦も呆れたよ。いい加減に執着心を放棄したらどうだい」

「執着心はお前のことだよ。お前から除つたがよからう。さうして玉照姫さまと、お玉さまを此方へ渡しなさい」

青彦「此の執着心だけは何處までも放されない。決して個人の私有すべきものでない、神政成就の大切な御寶だ。たとへ天地が覆へるとも、こればかりは承諾は出来ない、どうぞ早くお歸りになつて下さい」

「何と云つても黒姫は歸りませぬ」

紫姫「玉照姫様は三五教に於ても無くてはならぬ結構な神様でございます。又ウライナイ教にも必要な神様でございます。さうだと申して兩方の欲求を充すと云ふ事は、到底出来ませぬから、「いつそ」の事貴方が御改心をなさつて、三五教にお入り下さつたら如何ですか。貴方が御改心なさつた以上は、高姫さまも自然御改心になりませうから、紫がさう云つたと高姫さまに傳へて下さいませ」

「權謀術數を弄し折角妾が望みた玉照姫様を計略を以て、横領なさつたお前さまこそ改心を爲され。どちらが善か、悪か、心の鏡に照して御覽なさい。貴方の行り方は三五教の精神を破壊する行り方、つまり優勝劣敗利己主義ではありませんせぬ

か
』

鹿公「エー八釜敷い云ふない、黒姫の奴、貴様こそ利己主義ぢやないか。此の玉照姫様は三五教の神様が御経綸遊ばして悦子姫様を取り上げまでなさつた因縁があるのぢや。何と云つても正義だ、先取権があるのだ。他の寶に垂涎して要らぬ謀叛を起し煩悶をするよりも、すつかりと思ひ切つて氣樂になつたら如何だ、鹿公は腹が立つワイ」

黒姫「何と云つても是れ許りは貫徹させなくては置くものか。假令千年萬年かかつても祈つて祈つて祈り勝つて見せよう。ヤアコンナ馬公を人質に取つたところが、何の役にも立たない。サア馬公、世界中放し飼だ。何處なと勝手に出でなさい」

と縛を解けば、馬公は、
「ヤアヤア黒姫さま有難う。ヤアどつこい、お前に縛られて、お前に解かれたのだ、有難うと云ふ筋が無い。エー取返しのならぬ失策をやつたものだ。馬鹿々々しい」

此時紫姫の涼やかな聲にて、天の數歌が轟き渡りける。忽ち黒姫は頭部眞白と變じ、高山彦の手を引き雲を霞と西北指して逃て行く。

馬公「オイ鹿公、モ一黒姫夫婦は逃て了つたよ。どうぞ開けて呉れないか」

「ヨシヨシ」

と戸をガラリと引き開け、

「オイ馬公どうだつたい、貴様縛られて居つたぢやないか」

「ウン縛られたよ。併しチツトモ痛くはなかつた。黒姫の奴、俺を縛るときに一

生懸命に小聲になつて、「大神様濟みませぬ、赦して下さい。罪も無い馬公を縛

ります、これも御道の爲ですから、神直日、大直日に見直し、聞直して下さいま

せ」と念じて居つた。人の性は善なりとは、よく言つたものだなア」

青彦はこれを聞いて両手を組み、頭を首垂れ思案に沈む。紫姫は直に神前に感

謝の祝詞を奏上する。玉照姫は俄にヒシるが如く泣き出し給ひける。お玉は驚き

あはてて玉照姫の背を撫で擦り、慰め居たり。

空には白き魚鱗の波を湛へた雲の切れ目に月は朧に輝き、悲しげに山杜鵑の聲

峰みねの彼方かなたに聞え居きこる。

（大正一一・五・六 舊四・一〇 外山豊二録）

第四章 善ぜんか悪あくか〔六四九〕

瑞穂みづほの國くにの眞秀良場まほらばや 青垣山あながきやまを繞めぐらせる

下津岩根したついはねと聞えたる 要害堅固えうがいけんこの神策地しんさくち

小三災せうさんさいの饑病戰きびやうせん 大三災だいさんさいの風水火ふうすゐくわ

夢ゆめにも知らぬ世繼王よつわうの 山やまの麓ふもとに現あれませる

玉照姫たまてるひめの御稜威おんみいつ 光ひかりは四方よもに照妙てるたへの

衣きぬを纏まとひて經緯たてよこの 綾あやと錦にしきの機はたを織おる

棚機姫たなばたひめと現あらはれし 紫むらさき姫ひめに侍かしづかれ

月日を重ね年を越え

其名は四方に轟きぬ。

悦子姫は、夏彦、常彦、加米彦、瀧、板を伴ひ、我使命を明かさず、世繼王山麓の住家を後にして、何處ともなく神業の爲めに出發したり。音彦、五十子姫は別の使命を受け、是亦何處ともなく、行先を明かさず、惟神的に、世繼王の住家を後にして出發せり。

後には、紫姫、若彦、お節、お玉、馬公、鹿公の面々朝な夕なに、玉照姫の保育に全力を盡し居たりける。

夏も何時しか暮れ果て、天高く、風清く、野には稻穂が黄金の波を打ち、佐保姫の錦織なす紅葉の、愈秋の半となりぬ。

時しもあれ、眞夜中に戸を叩く一人の男あり。馬公、鹿公は此音に驚き目を醒

まし、

馬公「オイ鹿公、何だか表の戸を叩く音がするではないか、お前御苦勞だが一つ調べて見て呉れないか」

「何、あれは秋の夜の紅葉を散らす所の戸を叩く音だ。餘程お前も神經過敏になつたものだな、そりや無理もない、五六七神政の生御靈玉照姫様の御保護の任に當つて居るのだから、雨の音、風の響にも注意を拂ふのは當然だ。併し乍ら餘り思ひ過ぎると神経病を起す様になつては詰らないから、何事も神様にお任せして、吾々は能ふ限りのベストを盡し、忠實に務めさへすれば宜いのだよ」

「そりやお前の云ふ通りだが、併し今の音は決して雨や風の音ではない、何か訪るる人が門にありさうだよ」

鹿公「峰の嵐か松風か、一つ違へば狐狸の悪戯か、尻尾を以て雨戸を叩き、吾々を脅威さうとするのだ。此間から幾度となく、ウライナイ教の間者がやつて来て、玉照姫様を奪ひ返さうとかかつて居るらしい、迂闊り夜中に戸でも開け様ものなら大變だ、英子姫様、悦子姫様に申譯がない、先づ此處は、見ざる、聞かざる、言はざるの三猿主義を取る方が安全第一だ。俺の鹿とお前の馬とでシカリとウマウマ守るのだナア」

戸を叩く音益々烈しくなり来る。

「それでも益々烈しく叩くぢやないか、どうだ一つ紫姫様に伺つて見たら」

「それもさうだな、併し乍ら折角よくお寢みになつて居られるのだから、夜中に

お目を醒ませせるのもお氣の毒だ」

表を叩く音益々烈しい。鹿公はムツとした様な聲で、

「誰だい、人の寢しづまつた家を無闇に叩くものは」

「吾れは英子姫様の御命令によつて、江州竹生島よりはるばる單騎旅行でやつて

来た者だ。紫姫は在宅か、若彦は居るか」

鹿公「紫姫様や若彦様の名を知つて居るからには、何でも何だらう、さう考へる

と容易に開ける事は出来ない。吾々は晝は寢ね夜は不寢番をつとめて居るのだ。

夜の間は俺達の権限があるのだから誰が開けいと云つても、此鹿公の本守護神が

開けと命令を下す迄は開けられぬのだ。ママア暫く御苦勞だが正體が分らぬか

ら、自然に開ける迄待つて居たが宜からう。日光に照されて、モウモウした毛を

體一面に現はすのだらう。吾々は夜分は目の見えぬ人間だから、平にお斷り申す」

外より、

「さう云ふ聲は鹿公ぢやないか、今日参つたのは餘の儀ではない。神素盞鳴大神様の御心により、英子姫様の大命を奉じて御直使として出張致した、三五教の宣傳使龜彦であるぞよ」

「何、龜彦さまか、ソナナラ開けぬ事は無いが若しや作り聲ではあるまいかなア」

「何、作り聲する必要があるか、紫姫以下一同に申し渡す仔細がある。一時も早く開けたが宜からうぞ」

「何だか龜彦さま、今日に限つて言葉つき迄嚴肅に構へて御座る、何かこれに就ては善か悪か、吉か凶か、普通のお使ではあるまい、なア馬公、どうしたら宜からうなア」

「莊重な語氣だな、今日は大神様の代理權を以て來て居るのだと見えて、いつもとは言靈の響きが何處とは無しに森嚴だぞ」

「何、アンナ事を云つて洒落てるのだよ。大變な用向きがある様な語調で吾々を威喝しようと思つて居るのだ。何、心配する事はないさ、大山鳴動して鼠一匹位なものだ。アハ、ハ、ハ、」

龜彦「早く開けぬか、何をぐづぐづ致して居るぞ」

鹿公「ヨオ高壓的に大袈裟に出やがったな、これでは吾々兩人にては一寸解決が
つき難い、若彦の大將に一寸相談して見ようか」

馬公「それが宜からう」

と云ひ乍ら若彦の居間に立ち入り肩を揺つて、

「モシモシ若彦さまか、青彦さまか、どちらを云つて宜いのか知らぬが一寸起
て下さい。門口に大變な者が現はれました。サアサア早く起きたり起きたり」

「誰かと思へば馬公ぢやないか。夜の夜中に何を喧しう云ふのだい」

「イエイエ急な事件が突發しました。素盞鳴大神様の御心により英子姫様より御
直使として、龜彦の宣傳使が見えました」

若彦「何、龜彦の宣傳使が見えた、何と遅かつたな、もう英子姫様よりお褒め
の言葉が下るか下るか指折り數へて、紫姫を始め吾々一同は首を伸ばして待

て居ただ。馬公喜べ屹度御褒美を頂戴するのだらう」

「それは有難い、ソナラ開けませうか」

「一寸待つて呉れ、寢間を片付け、其處いらを掃除してそれから御這入りを願はないと、こう散けては御直使に對して御無禮だ。モシモシ紫姫さま、お玉さま、早く起きて下さい、英子姫様のお使として龜彦の宣傳使が只今見えました」

紫姫「ア、さうですか、そりや大變です、困つた事になりましたねエ」

「あれだけの吾々は苦心慘憺を重ね玉照姫様を三五教へお迎へ申したのだから、褒めて貰ふ事はあつてもお咎めを蒙る様な道理がない。御心配なさいますな、何程立派な神人ぢやと云つても、女は矢張り女だナア、そんな取越苦勞はするものぢやありませんぬよ」

「それでも何だか氣掛りでなりませぬワ。何は兔もあれ、早く室内を片づけて這入つて貰ひませう」

と一同は夜着を片付け、綺麗に掃除をなし終り、
若彦「サア準備は出來た、馬公、鹿公、表を開けて龜彦さまを御案内申したがよからう」

馬、鹿の兩人は畏まりましたと表戸をサラリと開け、驚いたのは兩人、龜彦の

宣傳使は威儀儼然として金色の冠を頂き、夜光の寶玉四邊を照らし、薄き絹の袖長き白衣を着し、入口狹しと悠々と進み入り、二人に一揖し、つかつかと奥の間に進み、玉照姫の御前に端坐し、拍手再拜、神言を奏し終り正座に着きける。

紫姫は手を突ひて、

「これはこれは龜彦の宣傳使様、否、英子姫様の御直使様、夜陰といひ遠方の處、ようこそ御入來下さいました。御用の趣仰せ聞けられ下さいませ」

龜彦は威儀を正し、

「今日只今此館に参りしは餘の儀ではムらぬ。此度其方紫姫を始め若彦の行爲に就いて神素盞鳴大神様、以ての外の御不興、英子姫様に御神示あらせられたれば、龜彦ここに英子姫の命の直使としてわざわざ参りたり」

紫姫、若彦はハツと兩手をつき、

「これはこれは御直使様御苦勞に存じます。御用の趣、速にお聞かせ下さいませ」
「其方事は神界經綸の玉照姫を天地の律法を忘却し、權謀術數の秘策を用ゐ、反間苦肉の策を以て目的を達したる事神意に叶はず、彼れ玉照姫の神は、一旦、ウ

ラナイ教の黒姫に與ふべきものなり。一時も早く玉照姫様及びお玉を黒姫の手許に送り、汝等は此責任を負ひて宣傳使の職を去るべし、との嚴命で御座る』
と嚴かに云ひ渡したり。

紫姫は顔を赤らめ、

『實に理義明白なる御直使のお言葉、妾不徳の致す處、今となつては最早辨解の辭も御座いませぬ。謹みてお受け致します』

『モシモシ紫姫さま、此若彦を差し置き、さうづけけと「もの」を仰有つては後の結びがつきませぬ。假令權謀術數の策にもしる五六七神政の貴の御寶、玉照姫の生御靈を三五教に迎へ奉りたる拔群の功名手柄、御賞詞こそ頂くべきに、却つて吾々の職を免じ、剩つさへ玉照姫様を黒姫に渡せとは大神様始め英子姫様の御言葉とも覺えませぬ。オイ、コラ龜彦、貴様は吾々の成功を嫉み、左様な事を申すのであらう。否、汝の本守護神より出でたる世迷ひ言ではあるまい、屹度副守護神の惡戯ならむ。只今若彦が神靈注射を行ひ、汝に憑依せる惡魔を現はし呉れむ』

と早くも両手を組みウンと一聲靈縛を加へむとするや、龜彦の背後より煙の如く忽然として顯はれ給うた光華明彩六合を照徹する許りの女神顯はれ給ひ、若彦が面を射させ給ひぬ。紫姫、若彦は身體萎縮し其場に畏伏しワナワナと震ひ戦き、涙に疊を潤すに至りぬ。龜彦は顔色を和らげ、

「英雄涙を振つて馬糞を斬るとは神素盞鳴大神、英子姫様の御心事、さり乍ら汝よく直日に見直し聞き直し、奇魂の覺りによりて此大望を完全に遂行せば、再び神業に参加する事を得む」

と稍俯むき、同情の涙を流しつつ女神と共に、龜彦の姿は忽然として此場より消えにける。玉照姫の泣き給ふ聲は此時より時々刻々に烈しくなり來たれり。

お玉「玉照姫様、どうぞ御機嫌を直して下さいませ。何かお氣障りが御座いますか。幾重にも御詫致します」

と頭を疊にすり付け詫入る。

「紫姫さま、大變な事になりましたね工。若彦はどう致したら宜しいのでせう」

「仕方がありません、成功を急ぐの餘り無理をやつたものですから、何程目的は

手段を選ばずといつても、それは俗人の爲すべき事、吾々宣傳使の分際として餘り立派な行動をやつたとは云はれますまい。吾々兩人を殊勳者として大神様より賞詞さるる様な事あらば、それこそ三五教の生命は茲に全く滅亡を告げ、ウラル教となつて了ひませう。ア、大神様の御言葉には千に一つもあだは御座いませぬ。是よりは前非を悔い身魂を研いて本當の宣傳使にならなくちやなりません。玉照姫様のあの御泣き聲、御神慮に叶つて居ないのは當然です」

「エ、仕方がありませんなア」

馬公は、（小聲で）

「オイ鹿公、梟鳥の宵企み、夜食に外れて難かしい顔を致すぞよ。ドンナ良い事でも誠に致した事でなければ、毛筋の横巾程でも悪が混りたら、物事成就致さぬぞよ、と云ふ三五教の御神諭を知つて居るか」

「ウン、いつか聞いた様に思ふ。ナント神様といふものは七難かしい事を仰有るものだな。三千世界を自由になさる大神様が、ソナ小さい事をゴテゴテ仰有る様では神政成就も覺束ないワイ。然し乍ら若彦さまや、吾々の師匠と仰ぎ主人と

崇むる紫姫様迄が、御退職なさる以上は吾々とても同じ事だ。何とか考へないと馬鹿な目に遭はねばならぬぞ」

「モシモシ若彦さま、紫姫さま、御目出度う、お祝ひ致します」

鹿公は慌てて馬公の口に手を當て、

「コラコラ馬公何を云ふのだ、些と失禮ぢやないか」

馬公、よう云ふて下さつた。本當にコンナ目出度い事はありません。今日只

今始めて臍下丹田の天の岩戸が開けました。これから本當の眞如の日月が現はれ

ませう。お互様にお目出度う存じます」

若彦は拍手を打つて、

「大神様有難う御座います。愈私も心天の妖雲が晴れました」

と感謝の辭を涙と共に述べたて居る。

玉照姫は何とも形容の出来ない美はしき顔色にて、御機嫌斜ならずニコニコと

笑ひ始め給ひ、お玉は嬉し泣きに泣き入る。

馬公、鹿公二人は互に顔を見合せ、

『ハテ合點がてんがゆかぬ。こりやマアどうなり往ゆくのであらうかな』
紫姫むらさきひめ、若彦わかひこは今後果こんごはたして如何いかなる行動かうどうに出いづるならむか。

(大正一一・五・六 舊四・一〇 藤津久子録)

第二篇 意外いぐわいの意外いぐわい

第五章 零敗ゼロはいの苦く〔六五〇〕

炎熱えんねつ火房くわばうに坐ざするが如ごとく、釜中ふちうに在あるが如ごとき酷暑こくしよの空そら、雲路くもぢを別わけて降くだり來くる一隻いつせきの飛行船ひかうせんは、フサの國くに北山きたやま村むらのウラナイ教けうが本山ほんざんの廣庭ひろにはに無事ぶじ着陸ちやくりくしたり。魔我彦まがひこ、蝶いもり蛸りわけ別の二人ふたりは此音このおとに驚おどろき、高姫たかひめの御歸館ごきくわんなりと、取とるものも取敢とりあへず、

おもて
表に駆け出し見れば、高姫は眼釣り、得も謂はれぬ凄じき形相し乍ら、鶴、龜の
りやうにん
兩人を伴ひ、船より出で來り、

「ア、蠓蛸別さま、留守中大儀で御座いました。別に變つた事は有りませなんだ
かな」

「ハイ、たいした變りは有りませぬが、二三日以前より、何とも知れぬ太白星の
やう
様な光を發した光玉、夜半の頃になると、大音響を立て、庭前に落下する事屢で
あ
有ります」

「それは大變な吉祥だ。併し其玉はどうなさつたか」

魔我彦は丁重に首を下げ、

「毎朝早くより、綿密に調べて見ましたが、別に此れと云ふものも落ちて居らず、
またなん
又何の形跡も残つて居ませぬ」

「それは不思議な事だ。いづれ何か結構な事が有るでせう」

蠓蛸別「紫の雲の出所は分りましたか。定めて良結果を得られたでせう。萬事抜
め
目も無いあなたの事ですから、大成功疑なしと、館内一同の者は貴方の御歸りを

今か今かと首を長くして待つて居ました。どうぞ早く奥へお這入り下さいまして、結構な御土産話を、一同に聞かして下さいませ」

高姫「……………」

魔我彦「コレコレ蠓蛸別さま、大切な神界の御經綸、玄關口で尋ねると云ふ事が

あるものか、高姫様が沈黙なさるも當然だ」

蠓蛸別「ア、それもさうでした。高姫さま、サア奥へ御案内致しませう」

高姫は奥に入る。一同は俄に上を下へと、バタバタ歓迎の準備に多忙を極め居

る。

高姫「今日は無事に墜落もせず、遙々と歸つて來たのだから、御神前にお神酒を

澤山に献上し、種々の御馳走をお供へ申し、ゆつくり直會の宴でも張つて下さい。

あまり急速力で歸つて來ましたので、妾は少し許り頭痛氣味だから、奥へ往つて

二三日ユツクリ休息を致します」

蠓蛸別「ア、それはさうでせう。併し乍ら御休みになれば、お尋ね申す譯にもゆ

かず、一寸端緒なりと、一口仰有つて下さいませいな」

高姫「神界の御經綸、秘密は何處までも秘密ぢや。今は御神命に依りて言ふ事が出来ませぬ……コレ鶴に、龜、お前も休みなさい。種々の事を言ふではないよ」

鶴公「私はチツトも疲勞して居りませぬ。別に休む必要も御座いませぬから、ゆつくりと貴方に代つて、龜と二人が交る交る、一切の大失敗……ウン……オツトドッコイ顛末を演説致しませうか」

高姫「コレコレ鶴、龜、鶴は千年、龜は萬年と云ふ事があるぢやないか。鶴には千年の間箱口令を布く。龜には一萬年が間箱口令を布く……」

鶴公「モシ高姫さま、千年も箱口令を布かれては、唾も同様ですから、そればかりは取消を願ひます」

高姫「イヤ、今度の事に關してのみ箱口令を布くのだよ。其外の事はお前の勝手が皆に披露するから、サア鶴、龜、お前も永らくお供をして呉れて、辛かつたらう。二三日、誰も居らぬ所へ往つてユツクリと遊びて來なさい、又いろいろの事を喋舌ると煩雜いからな。……蠓蠓別さま、魔我彦さま、それなら失禮致しま

す。どうぞユツクリ酒でも飲み、皆さまと仲よく、神恩を感謝して下さい。妾は
何だか頭痛がして、モウこれつきり暫く言ひませぬから」

と襖を引開け奥の間に力無げに進み入り、中より固く鍵をかけて了ひけり。

蝶螭別「サア皆さま、これから祭典を執行し、終つて直會の宴だ。今日は酒の飲

み満足だ。併し酒を飲むのはいいが、酒に呑まれない様にして下さいよ」

甲「蝶螭別の大將、あなたこそ何時も酒に呑まれるでせう。今日はあなたから十

分の御警戒を願ひますで。何分高姫様が頭痛を起してお休みになつて居るのだから、

あまり大きな聲を出しては、お體に障つちやなりませぬからなア」

蝶螭別「きまつた事だ。ソナ事に抜かりの有る私だと思つて居るか」

祭典は型の如く嚴肅に行ひ了り、一同は別殿に進み入り、直會の宴に現を抜か

し、そろそろ酒の酔が廻るにつれて、喧騒を極め出したり。

甲「オイ鶴、随分愉快だつたらうなア。お羨ましい。吾々もア、云ふお供がして

見たいワ」

鶴公「何を云うても、大飛行船に乗つて、地上の森羅萬象を眼下に見くだし、空

中征服の勇者になつて、自轉倒島へ渡るのだもの、實に愉々快々、筆紙の盡すベ
き限りでは無かつたよ」

甲「立派に目的は達しただらうな」

鶴公「勿論の事、途中に墜落もなく、立派に目的地に到達したのだ」

甲「それは定まつて居るが、モ一つの肝腎要の紫の雲だ。それはどうなつたのだ

い」

鶴公「紫の雲に關する事は千年間の箝口令が布かれてあるから、紫だけは言つて

呉れな。其代りに玉照姫の一件は、事に依つたら報告してやらう。併し乍らモウ

少し酒が廻らぬと、巧く言靈が運轉しないワイ。一つ滑車に油を注ぐのだな」

龜公「コラコラ鶴公、紫の雲に關する事と云へば、玉照姫の事だつて言はれぬぢ

やないか、箝口令を嚴守せぬかい」

鶴公「ナー二、紫の雲の事さへ言はなかつたら良いぢやないか。皆の御連中が證

人ぢや、ナア蝶螭別さま、高姫さまはそう仰有つただらう」

蝶螭別「兔も角、成功話を言つて下さい。皆の者が待ちに待つて居つたのだ」

龜公「コラコラ鶴、滅多の事を言うではないぞ」

鶴公「貴様は酒を喰はぬから、生真面目で仕方がない。融通の利かぬ奴だ。高姫

様のお口からは、アンナ事がどうしても言はれぬものだから、俺達に代つて、言

うではないぞと仰有つたのは、要するに言へと云ふ事だよ。別に俺の口で俺が喋

べるのに、資本金が要るのでもなし、國税を納める心配も要らぬのだから……俺

は俺の自由の權を發揮するのだ」

龜公「ソナラお前の勝手にしたがよいワイ。俺だけは何處までも沈黙を守るか

ら……」

鶴は酒にグタグタに酔ひ、傲然として肱を張り、

鶴公「今日の鶴公は、要するに高姫様の代言人ぢや。さう心得て謹聽しなさい、

エヘン、

フサの國をば後にして 雲井の空を高姫が

翼ひろげて鶴龜の 二人の勇士を伴ひつ

高山短山下に見て

大海原を打渡り

自轉倒島にゆらゆらと

降り着いたは由良湊

魔窟ヶ原へテクテクと

三人駒を竝べつつ

黒姫館に立入りて

委細の様子を尋ねれば

彌仙の山の裾野原

賤が伏家に世を忍ぶ

豊彦夫婦の館より

色も芽出度き訝かしの

雲立ち昇り玉照姫の

神の命の神人が

現はれました事の由

聞いたる時の嬉しさよ

黒姫司は逸早く

千變萬化の手を盡し

紫姫や青彦の

二人の勇士に一任し

玉照姫をウラナイの

教の道の本山に

迎へむものと氣を配り

心を盡す妙案奇策

どうした拍子の瓢箪か

ガラリと外れて三五の

神の教の閒諜

紫姫や青彦は

手の掌返す情無さ
高姫司は青筋を

立ててカツカと怒り出す
高山彦や黒姫は

ソロソロ喧譁を始め出す
此有様を見る俺は

立つても坐ても居られない
氣の毒さまと申さうか

愛想が盡きたと申さうか
言ふに謂はれぬ爲體

これから奥は有るけれど
此れより先は神界の

秘密ぢや程にどうしても
紫姫や青彦の

誠の様子は話せない
ア、惟神々々

高山彦や黒姫は
さぞ今頃はブクブクと

面を膨らし熏つて
互に顔を睨み鯛

目を釣り腮釣り蛸釣つて
一悶錯の最中だらう

モウモウコンナ物語
飲の飲みし酒迄冷えて来る

三五教は日に月に
旭の豊榮昇ること

玉照姫の神力で
宇内へ輝き渡るだらう

それに引換へウラナイの 神の教はゴテゴテと

貧乏世帯の夕日影 段々影が薄くなり

終局に闇となるで有らう ア、惟神々々

叶はぬ時の神頼み 鶴会社の報告は

先づ先づザツと此通り

蠓蝶別 『オイ鶴公、眞面目に報告をせないか。ソナ馬鹿な事が有つて堪るもの

かい』

鶴公 『堪つても堪らいでも、事實は事實だ』

蠓蝶別 『仕方がないなア』

鶴公 『エーもう此鶴公は、千年の箝口令を布かれて居るが、俺の副守護神に對し

ては言論自由だ。……オイ副守の奴、チツと酒ばつかり喰うて居らずに發動せぬ

かい。責任は副守が負ふのだよ。……副守護神が現はれて何から何迄包まず隠さ

ず知らすのであるから、鶴公司は何にも知らず、高姫殿、必ず必ず鶴公を恨めて

下くださるなよだ、ヒ、ン」

魔我彦まがひこ「サア副守先生ふくしゅせんせい、細こまかく仰有おつしやつて下くださいませ」

鶴公つるこう「ウーン、ウンウン、此方このほうは鶴公つるこうの肉體にくたいを守護しゅご致いたす副守護神ふくしゅごじんのズル公こうである

ぞよ。併しかし乍ながら大體だいたいの要領えうりやうは、鶴公つるこうの肉體にくたいが申まをした通りとほ、今回こんくわいの事件じけんは全部ぜんぶ高姫たかひめ

さん一派いつぱの零敗ゼロはいだ。大當違おほあてちがひの大失策おほしくじりだ。それだから頭痛づつうもせないのに頭痛づつうがする

と言いつて、此この不利益極ふりえききはまる報告ほうこくを避さけたのだ。何れ早晚さうばん分わかる事實じじつだから、隠かくした

つて仕方しかたがない。モウ、ウラナイ教けうは駄目だめだ。バラモン教けうは間近まぢかまで教線けうせんを張はり、

猛烈まうれつな勢いきほひでやつて來くる。ウラル教けうは又またもや蘇生そせいした様やうに、此このフサの國くにを中心ちゆうしんとし

て押寄おしよせて來きて居をる。三五教あななひけうも其通そのとほり。三方さんぱうから敵てきを受けうけて、どうして此教このをしへが、

擴張所くわくちやうところが現狀維持げんじやうあぢも難むづかしい。日向ひなたに氷こほりだ。風前ふうぜんの燈火ともしびだ。アツハ、々々、良い

氣味きみだ。世界せかい一の黍團子きびだんご、何程なにほどキビキビした高姫たかひめの智囊ちなうでも、最早もはや底叩そこたたきだ。底そこ

抜ぬけの大失策だいしつさくだ。底拔そこぬけ序ついでに自棄酒やけざけでも飲のみ、底拔そこぬけ騒さわぎをやつたがよからうぞ

よ。ウーン、ウン、もうズル公こうはこれで引取ひきとるぞよ。蝶蠟別いもりわけ、魔我彦まがひこ、好すきな酒さけで

もズルズルベツタリに飲のみたが宜よからうぞよ」

とグレンと體をかわし、汗をブルブルかいて正氣に返つた様な姿を装ひ、

「何だか副守護神が仰有つたやうですな。何と言はれました。自分の口で言つて

自分の耳へ聞えぬのだから、大變に不便利だ。知覺精神を忘却し、大死一番の境

に立ち、感覺を蕩盡し、意念を斷滅して、假死状態になつて居たものだから、言

うた事がトンと分らない。：鶴公は何も知らぬぞよ。高姫の先生殿、屹度鶴公を

叱つて下さるなよ。守護神が口を借つた許りであるぞよ」

甲「アハ、ハ、ハ、何は免もあれ、貴様は知らな知らぬでよいワ。副守護神の奴、

鶴公が全部言つた通りだと證明したよ。ヤツパリ鶴公の肉體に責任があるのだ。

：モシモシ蠨螋別さま、一寸先や暗の夜だ。飲めよ騒げよと、ウラル教もどきに

亂癡氣騒ぎでもやりませうかい。チツト位亂暴したつて、劫腹癒やしだ。今日に

限つて、高姫さまだつて、失敗して歸つて來て、吾々に莊重な口調を以て、戒告

を與へる事は出來ますまい」

龜公「今鶴公の肉體の言つた事も、ズル公の副守の言つた事も、全然反對だ。お

前達を驚かさうと思つて、アンナ芝居をやりよつたのだ。鶴位の知つた事かい。

本當の事は此龜公が腦裡に秘め隠してあるのだ。鶴と云ふ奴ア、ツルツルと口が
迂るから本當の事は知らしてないのだよ。屹度一道の光明がウラナイ教の上に輝
いて居るのだから、さう氣投げをするものぢやない。千秋萬歳樂の鶴龜の齡と共
に、天の岩戸は立派に開けて日の出神様の御守護の世となるのだ。闇の後には月
が出る。夜が過ぐれば日の出となるのは、天地の眞理だ。暗中明あり、明中暗あ
り、明暗交々代り行くは、所謂神の攝理だ。人は得意の時に屹度失望落膽の種を
蒔き、不遇の境遇に有る時、屹度光明幸福の因を培ひ養ふものだ。何時も晝ばつ
かり有るものぢやない、又暗黒な夜ばかりでもない。善惡不二、吉凶同根、明暗
一如、禍福一途、大樂觀の中に大苦觀あり、大苦觀の中に大樂觀あり、天國に地
獄交はり、地獄に天國現はる。有耶無耶の世の中だ。マアマア心配するな。コン
ナ結構な事は無いのだよ。人は心の持様一つだ。ドンナ苦しい事でも、觀念一つ
で大歡樂と忽ち一變する世の中だ。吁惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世
と拍手し、祈願を凝らして居る。高姫は此場に手拭にて鉢巻し乍ら、ノコノコと
現はれ來り、

「ヤア皆さま、お元氣な事、親の心は子知らず、神の心は人間知らず。あなた方は實に羨ましいお身分だ。妾も半時なりとあなた方の様な氣分になつて見たいワ」
魔我彦「何分に重大なる責任を負擔して御座る貴女の事ですから、御心中を御察し申します。今回の遠路の御旅行、さぞさぞお疲れで御座いませう。それに就いても言ふに謂はれぬ御苦心が有つた様です。玉照姫は到頭三五教に取られて了つた様ですなア」

高姫「エー、それは誰れが言つたのかなア」

魔我彦「ズル公が詳細に報告を致しました。併し乍ら失敗は成功の基、失敗が無くては経験が積みませぬ。即ち萬世に残る大偉業は七轉び八起きと云うて、幾度も失敗を重ね、鍛へ上げねば駄目ですよ。イヤもう御心中お察し申します」

高姫「ヤアこれだけ澤山な宣傳使や信者がある中に、妾の苦衷を察して呉れる者はお前だけだ、ア、妾もこれで死んでも得心だ。千歳の後に一人の知己を得れば満足だと覺悟して居たが、現在此處に一人の知己を得たか、ア、有難や、これと云ふのもウライナイ教の神様のお蔭……」

鶴公「知己を得ましたか。千歳の後で無くて今チキに妙チキチンのチンチキチン、心の曲つた魔我彦が共鳴しましたのは、實に上下一致天地合體の象徴でせう。併しこれは鶴公の肉體に守護致すズル公の託宣ですから、決して鶴公に怒つては下さるなよ。…神は物は言はなんだが、時節参りて鶴公の口を藉りて委細の事を説いて聞かすぞよ。ウンウンウン、ドスン…：…アア又何だか憑依しよつたな。イヤ副守の奴發動したと見える。飛行機に乗つて空中を征服し乍ら、意氣揚々とやつて居つたと思へば、俄の暴風に翼を煽られ、地上目蒐けて眞つ逆様に顛落せしと思ひきや、ウラナイ教の本山、八咫の大廣間の酒宴の場席、アア助かつた助かつた」

高姫「コレコレ鶴公、ソナナ偽神術をやつたつて、此高姫はチヤンと審神をして居ますよ。お前は餘程卑怯者だ。残らず責任を副守護神に轉嫁せうとするのだナ」
鶴公「イエイエ決して決して、臍下丹田に割據する副守の發動です。どうぞ此副守を何とかして追ひ出して下さいな」
高姫「蝶鯨別さま、魔我彦さま、鶴公の臍下丹田に割據する副守の奴、此短刀を

… ヤアヤア者共、一刻も早く表へ駆け出し、實否を調べて參れ。世界見え透く日の出神が、鶴公の肉體を借りて申付けるぞよ」

龜公「何を言うのだ。日の出神様は世界中見え透き遊ばすのだが、門口へ出て來た者が敵か味方が分らぬと云ふ様な、日の出神が有るものかい」

鶴公「ウラナイ教に憑依する日の出神は、先づ此位な程度だよ、イヒ、ヒ、ヒ、ヒ」

龜公「誠の日の出神の生宮の高姫さまの御前だぞ。チツトは遠慮を致さぬかい」

鶴公「モシモシ本當の日の出神の生宮、高姫さま、貴女はジツとして、世界中の事が見え透く御身靈、表へ下つて來た飛行船の主は敵で御座いますか、味方で御座いますか、どうぞお知らせ下さいませ。これがよい審神のし時ぢや。これが分らぬよな事では、日の出神さまも良い加減なものですよ。貴女の信用を回復し…」

… 否御威徳を顯彰するのは、今を措いて他にありません。サア此一瞬間が貴女に對し、ウラナイ教に對し、國家興亡の分るる所、明かに命中させて、一同の膽玉を取り挫ぎ、疑惑を晴らしてやつて下さい」

高姫「コレコレ鶴公、一步出れば分る事ぢやないか。お前は太それた、神を審神

せうとするのかい。ソナ逆様事が何處に有るものか。恰度學校の生徒が校長の學力を試験するよなものだ。ソナ天地の轉倒つた事が何處に有りますか。心得なされッ

鶴公「これは誠に濟みませぬ。併し乍ら、私も實は今回の貴女の大失敗を回復させ、歸依心を増さしめむが爲の、血涙を呑みての忠告ですから、悪く思つて下さつてはなりませぬ」

高姫、心の中に、

「今來た人は何して居るのかなア、早く此處へ來て呉れば良いのに……」

鶴公「高姫さま、スツタ揉んだと掛合つとる間に、やがて誰か這入つて來ませう。さうすればヤツと胸撫でおろし、虎口を遁れたと、一安心する人が、どつかに一人現はれさうですよ」

高姫「チツトでも暇をいれようと考へて居る。外には高山彦、黒姫、寅若、菊若、富彦の五人連れ、傷持つ足の何となく屋内に進みかね、モチモチとして入りがてに居る。」

黒姫「ア、誰か来て呉れさうなものだなア。何時もの様に堂々と……何だか今日は鬨が高くて這入れない様な気がする……オイ寅若、お前這入つて下さいな」
寅若「此奴ア一つ低氣壓が襲來しますよ。ウツカリ這入らうものなら、暴風雨の爲に何處へ吹き散らされるか分つたものぢや有りませぬ。私の様に横平たい圖體の者は、風が能く當つて散り易いから、斯う云ふ時にはお詔ひ向の細長い、風を御まぬ、帆柱竹の様な高山彦さまが適任でせう」

黒姫「エー一寸も自由にならぬ人だな。なぜお前はそれ程師匠の言ふ事を用ひぬのだい」

寅若「ヘン、師匠なぞと、殊勝らしい事を仰有いますワイ。失笑せざるを得ませぬワ。今までは乞食の蝨の様に口で殺して御座つたが、今度の失敗はどうです。吾々の顔までが、何ともなしに瘦せた様な気が致しますワイ。これと云ふも全く、お前さまが出しやばるからだ。それだから牝鶏の唄ふ家は碌な事が出来ぬと言ひませうがな。此役目は大責任の地位に立たせられる黒姫さまの直接任務だ。外の事なら二つ返辭で承はりますせうが、こればかりは眞つ平御免だ。お生憎様……」

と白い齒を喰ひ締め、腮を【しやく】つて見せたり。

黒姫「エー剛情な男だナア。一旦師匠と仰いだら、何でも彼でも盲従するのが弟子の道だ。師匠や親は無理を云ふものだと思ひなされと、常々云うて聞かして有るぢやないか。何事に依らず、絶対服従を誓つたお前ぢやないか。モウお前は今日限り、師弟の縁を切るから、さう思ひなさい」

寅若「トラ、ワカラぬ事を仰有いますな。宇治の橋姫ぢやないが、二つ目には縁を切るの、封を切るのと、口癖の様に……馬鹿々々しい。實の所は此方から切りたい位だ。アツハ、ハ、ハ」

菊若「モシモシ黒姫さま、私は何時も申す通り、善悪邪正の外に超越し、絶対信仰を以て貴女の仰せは、徹頭徹尾キク若だ。オイ富彦、俺と一緒に出来い。何時まで鬨が高いと言つて、物貰ひの様に門口に立つて居たところで、解決がつかない。常よりも大股に跨げて這入らうぢやないか、黒姫さまばつかりの失敗ぢやない。總監督の任に當る高姫さまも、其責を負ふべきものだ。先んずれば人を制すだ。ナニ構ふものか、堂々と這入つてやらうかい」

と菊若はワザと大きな咳拂をなし、富彦を従へ、大手を揮つて、人聲のする八咫の大廣間へ向つて進み行く。

菊若「これはこれは高姫様、御無事で御歸館遊ばされました、お芽出たう存じま
す」

高姫「此日の出神が靈眼で見た通り、お前は黒姫のお使で、飛行船に乗つて遠方
ご苦勞だつたなア。あア見えても高山彦、黒姫さまも大抵ぢやない。非常な御苦

心だ。何事も時節には敵はぬから、お前が歸つたら、どうぞ慰めて上げて下さい
よ。妾もつい腹が立つて、怒つて歸るは歸つたものの、何だか黒姫さまの事が氣

になつて、後ろ髪曳かるる様な氣がしてならなかつた。ア、可哀相に……魔窟ケ
原の陰氣な岩窟で、黒姫さまも第二の作戦計畫をして御座るであらう」

菊若「イエ、黒姫さま始め、高山彦、寅若も、今門前へ飛來致しまして、餘り貴
方に會はず顔がないので、門口にモガモガと手持無沙汰で、這入るにも這入られ

ず、歸るにも歸られぬと言つて、煩悶苦惱の自由權利を極端に發揮して居られま
す」

高姫「ア、さうだらうさうだらう、妾の見たのは黒姫さまの本守護神だつた。本守護神は依然として岩窟に止まつて居られる。副守の先生肉體をひつぱつて來たのだな。何分顯幽を超越して居る天眼通だから、ツイ輕率に見誤つたのだ。靈眼と云ふものは餘程注意をせなならぬものだ、ホツホ、ホ、ホ」

鶴公「高姫さま、貴方の靈眼は實に重寶ですなア。活殺自在、實に一分一厘の隙も有りませぬワ。さうなくては一方の將として、多數を率ゐる事は出來ませぬワ。イヤもう貴方の神智神識には……否邪智頑識には、實に感服の外なしで御座います」

高姫「エーつべこべ何理屈を仰有る。神界の事が物質かぶれのお前に分つて堪るものか。斯うして幾十年も神界の爲に盡して居る妾でさへも、あまり奥が深うてまだ其蘊奥を究めて居ない位だのに、僅か十年足らずの入信者が分つてたまるものか……誠が分りたら、口をつまへて黙りて居つて、改心致さなならぬ様になるぞよ。ゴテゴテと喋舌りたい間は、誠の改心が出來て居らぬのであるぞよ。一時も早く改心致して、うぶの心になりて、誠の御用を致して下されよ……と變性男

子のお筆先にチヤンと書いて有るぢやないか。筆先の読みよが足らぬと、そんな屁理屈を言はねばならぬ。神の道は理屈では可いませぬぞ工。絶対服従、歸依心、歸依道、歸依師でなければ信仰の鍵は握れませぬぞ工。

鶴公「二つ目にはよい避難所を見つけられますなア。鍵が握れぬなぞと、うまく仰有いますワイ。鶴公の名論卓説を握り潰すと云ふ心算でせう」

高姫「きまつた事だ。古參者の吾々に、新參のお前たちが、太刀打しようと思つたつてそりや駄目だ。駄目の事は言はぬが宜しい。あつたら口に風引かすよなものだ。何時までもツルツルと理屈を仰有るなら、モウ神のツルを切らうか」

鶴公「ツルなつと、カメなつと、縁なつとお切りなさい。三五教もウライナイ教も奉齋主神は同じ事だもの。私は神さまと直接交渉致します。人を力にするな、師匠を杖につくなと、三五教もどきに貴女も始終仰有つたぢやありませんか。嘘を吐く師匠を杖に突くと云ふ事は、熟々考へて見ればみる程厭になつて來ましたワイ。何れ私が脱退すれば、千匹猿の様に、喧し屋の革新派が従いて來るでせう。さうすればウライナイ教もシーンとして、世間から見ても、大きな館で澤山人が居る

様だがナンした静かな所ぢやと、世間から申す様になるぞよ。さうでなければ誠
が開けぬぞよと日の出神のお筆先にも出て居る通り、貴方も御本望でせう。筆先
の實地證明が出来て、日の出神の生宮の御威勢は益々揚り、旭日昇天のウラナイ
教となりませう」

高姫「コレ鶴公、よう物を考へて見なさいや、ソナ淺薄な仕組ぢや有りませぬ
ぞエ。お前はチツトばかり青表紙や、蟹文字を嚙つて居るから、仕末にをへぬ。
ママア時節を待ちなさい。枯木にも花咲く時が来る。後になつて、アアあの
時に短氣を起さなかつたらよかつたにと、地團駄踏みてジリジリ悶えをしてもあ
きませぬぞエ。よう胸に手を當て心と相談をして見なさい」

鶴公「ヤツパリ、私の様なプロテスタントにも未練がかかりますかなア」

高姫「プロテスタント派だから餘計可愛のだ。敵を愛せよと神様は仰有る。改心
の出来ぬ悪人程、妾は可愛いのだ。不具な子程親は餘計憐れみを加へたがる様に、
神様の御慈愛と云ふものは、親が子を思ふと同じ事だ」

鶴公「ア、仕方がない。流石は高姫さまだ。チツトも攻撃の出来ない様に、何時

の間に鐵條網を張つて了つた

高姫「早く黒姫さまを此方へお迎へして來ないか。コレコレ龜公、黒姫さま一同

にどうぞお這入りなさいませと言つて、御案内を申してお出で……」

龜公「承知致しました」

鶴公「オイ龜公、鶴と龜とは配合物だ。俺も從いて往かう」

龜公「ヤアお前が來ると又難問題が突發すると仲裁に困るから、マア控へとつて

呉れ」

鶴公「ナ―ニ、鶴と龜と揃うてゆけば、鶴龜凜々だ。活機臨々として高姫の御威

勢は、天より高く輝き亘り、大空に塞がる黒姫……オツトドツコイ黒雲は、高山

彦のイホリを掻き分けて、天津日の出神の御守護となるに定つて居る。それは此

鶴公が鶴證するよ。アハ、ハ、ハ、」

高姫「コレコレ鶴公、お前は此處に待つて居なさい。龜公一人で結構だ」

鶴公「これは高姫さまのお言葉とも覺えませぬ。折角遠方からお出でになつたの

に、龜公一人を出しては、チツト不待遇ぢや有りませぬか。鶴龜の揃はぬのは、

あまりお芽出たうは有りますまいぞ。併し乍ら高姫様は芽出たい様にと、鶴龜の兩人を連れてお出でになつたが、ヤツパリ……ヤツパリだから、御案じ遊ばすのも無理は御座いますまい。……エー仕方が有りませぬ。大讓歩を致しまして、鶴公は本陣に扣へて居りませう。……オイ龜公、一人御苦勞だが、鶴公は奥にハシヤいで居ます……と黒姫さま一行に傳言をするのだよ」

龜公「勝手に、何なと吐けッ」

と足を早めて表へ駆け出したり。黒姫の一行は龜公に案内され、喪家の犬の様に悄氣返つて、コソコソと足音までソツと、薄氷を踏む様な體裁で此場に現はれたり。

高姫「ア、黒姫さま、高山彦さま、ようマア歸つて下さつた。今も今とて靈眼で貴方の御心勞を拜觀して居ました。お前さまは副守護神の容器だらう。黒姫さまや、高山彦さまの本守護神は屹度アンナ利巧な事はなさいますまい」

黒姫「ハイ誠に申譯の有……もせぬ事を致しまして、何分副守護神が此頃は權幕が強いものですから、黒姫の本守護神も持て餘して居られますワイ。高山彦さ

まの本守護神も第二の作戦計畫をやつて居られます。此處に參上たのはヤツパリ
お察しの通り副守護神の容器で御座います。』
高姫「それはそれは副守護神どの、遠路の所御苦勞で御座いました。サアサアど
うぞ妾の居間へお出で下さいませ。副守護神同志、何かの相談を致しませう。』
ハイと答へて、黒姫、高山彦は、高姫の後に従ひ、ホツと一息つき乍ら、奥の
間指してシホシホと進み行く。後には魔我彦、蝶螭別、鶴公、龜公、寅若、菊若、
富彦、甲乙丙丁戊己其他數十人の者、酒に酔ひ潰れ、喧々囂々、遂には打つ、蹴
る、擲る、泣く、笑ふ、怒るの一大修羅場が現出されウラナイ教の本山は鼎の沸
くが如く大亂脈の幕に包まれにける。

(大正一一・五・七 舊四・一一 松村眞澄録)

第六章 和合と謝罪(六五一)

一葉落ちて天下の秋を知るとかや。神の教も不相應ぬフサの國、北山村の本山
ウラナイ教の頭株、心も驕る高姫が、執着心の胸の闇、鼻高山彦や黒姫は、奥の
一間に差し籠もり、ウラナイ教の前途に就いて、コソコソ協議を凝らし居る。
高姫 榮枯盛衰、會者定離は人生の常とは云ひ乍ら、よくも是だけウラナイ教は、
庭先の紅葉の風に散る如く凋落したものだ。彼れ程熱心に活動して居つた蝶蜩別
は煙の如く此本山から消えて了ひ、數多の部下や信徒は四方に散亂し、全で蟹の
手足を「もが」れた様な敗殘のウラナイ教、何とか回復の道を講ぜねばなりません

まいよ

黒姫 日の出神さまも此際、ちつとどうかして居らつしやるのではありますまい
かなア

高姫 日の出神様は外國での御守護、世界の隅々迄も調べに往つて御座るのだから
今はお留守だ。何れお歸りになれば、日の出の守護になるのは定つて居ります
が、さうだと云つて此儘放任して置けば此本山は、孤城落日、土崩瓦解の憂目に
會ねばなりません。それよりも黒姫さま、龍宮の乙姫様は此頃はどうして御座

るのでせう。随分氣の利かぬ神様ですなエ。コンナ時に御活動下されば宜しいの
に」

黒姫「龍宮の乙姫様は貴方もお筆先で御存じの通り、日の出神様に引添うて一所
に外國で御守護して居られるに定つて居るぢやありませんか。高姫様は、玉照姫
の一件から何處ともなしに、ボーとなさいましたなア」

高姫「黒姫さまも御同様ぢやありませんか。貴女は、高山彦さまが、あちらにお
出でになつてから、日増に、ボンヤリなされましたさうですよ。御自分の事は御
自分には分りますまいが、寅若がそう云つてましたぞえ」

黒姫「何を仰有います。そう人を見損なつて貰つては困ります。高山さまがお出
でになつて以來といふものは、層一層活動しました。それよりも高姫さま、斯う
云うとお氣に障るか知れませぬが、蝶螭別さまが此本山から姿を隠されてより、
層一層氣拔けがなかつた様な、爛ざましの酒を十日も放つて置いて飲みた様な鹽
梅式ですよ。お互に氣を取直して確りと仕様ではありませぬか。あの三五教を御
覽なさい。旭日昇天の勢、まるでウラナイ教なぞとは比較物になりませぬワ」

高姫「憎まれ子世に覇張る、と云つて、悪が榮える世の中だ、その悪の世に榮ゆる教だから大概分つて居りますよ。併し九分九厘迄悪の身魂は世に覇張る、善の身魂は落ちて居ても一厘でグレンと覆ると日の出神様が仰有る。三五教は何程澤山集まつて居ても烏合の衆ですよ。何れ内裏から内閣瓦解の運命が萌しかけて居ります。ウラナイ教は少数でも、善一筋の誠生粹の大和魂の堅實な信仰の團體だ。萬卒は得易く一將は得難しと云つてな、少数なのは結構ですよ。餘り瓦落多人足がガラガラ寄つて居ると、遂に蟲が「わき」まして水晶の水が臭くなり、子子が「わい」て鼻持ちならぬ臭がし出し、終局には此子子に羽が生えて飛散し、遂に人の頭に留まつて生血を絞る様になります哩。必ず必ず御心配なさいますな。日の出の守護になれば一度にグレンと覆るお仕組がして御座います」

黒姫「さうすると善許り選り抜いて、身魂の曇つた者は一人も寄せないと云ふ神様の御方針ですか」

高姫「其處は惟神ですよ。無理に引張に行つた處で寄らなきや仕方がありませんぬワ。又何程引留めたつて綱を付けて縛つて置く譯にもゆかず、脱退する者は是も

惟神に任して、自由行動を取らして置くのですな。来る者は拒まず、去る者は追はずと云ふのが神様の思召だ。無理に引張りに行つて下さるなよ、時節参りたら神が誠の者を引寄せて誠の御用をさすぞよ。と仰有るのだから、そうヤキモキ心配するには及びませぬ哩

黒姫「それでも玉照姫さまを無理に引張て来いと御命令をなさつたぢやありませんか」

高姫「それはあなたの量見違だ。無理に引つぱらうとするから、取り逃したのだ。向うの方から何卒玉照姫様をお預り下さいと云つて来る様に、上手に仕向けぬから、そんな事にかけては抜目のない素盞鳴尊は甘い事をやつたぢやないか。お前さまも随分賢いお方ぢやが、千慮の一失とか云つて、此度あの件に限つては黒姫さまの失敗でしたよ」

黒姫「そうだと云つて、愚圖々々して居れば三五教に八九分取られて了ふ様になつて居たのだから、ソナ廻り遠い事をして居つては、六菖十菊の悔いを残さねばならぬと思つたから非常手段をやつただけの事です。勝敗は時の運、今になつ

て死んだ兒の年を數へたつて仕方ありません。貴方も餘程愚癡つぽくなつて、取返しのかめ愚癡な事を言ひなさいますな」

高姫は眉をキリリとつり上げ、ドシンと四股を踏み、疊を鳴らしプリンと尻を向けて、次の間に姿を隠したり。

高山彦「コレコレ黒姫さま、お前は何と云ふ御無禮な事を仰有るのだい。大將や師匠は無理を云ふものだと思へと何時も部下の者に云つて聞かせて居乍ら、何故一つ一つ口答へをしたり、言ひ込めたりなさるのだ。仲に立つた柱の私は何とも挨拶の仕様が無いではないか」

黒姫は目に角立てて、

「コレお前さま、以前由良の川を渡つた時に、何でも彼でも絶対服従すると云つただぢやないか、草履取にでもして呉れと云つたではないか。今良い亭主面をして龍宮の乙姫様の生宮の云ふ事に一々干渉なさるのか。黙つて引込みて居なさい、お前さまが首を突き出して出しやばる幕ぢやないのだ。餘り差出口をしなさんと箱口令を勵行しますぞ」

高山彦「ハイハイ龍宮様の御逆鱗、もう是れからは沈黙を守りますワイ」

黒姫「何程黒姫が砲弾を發射しても、高山砲臺は沈黙を守つて決して應戦しては

なりませぬぞや。二〇三高地の性念場になつて居るのに傍から敵の援軍が來て堪

るものか」

高山彦「ハイハイ仕方がありません。どつか、渤海灣の海底にでも伏艇して形勢

觀望と出かけませう。併し乍ら黒船が敵弾を受けて苦戦の最中を見て居る私は、

どうしても中立的態度は取れませぬワ。何とか應援を致し度い様な氣が致します」

黒姫は稍機嫌を直し、

「ア、さうかいなア、それが眞心の現はれと云ふものだ。矢張り氣になるかいな

ア、夫婦となれば氣にかかると見える。矢張黒姫のハズバンドとして相當の資格

を保有して御座る。元は赤の他人でも夫婦の愛情と云ふものは又格別なものだ」

と又ニコニコ笑ひ出すおかしさよ。

一天黒雲漲り暴風吹き起り雷鳴轟くかと思ひきや、高山彦の圓滑なる言靈の伊

吹によつて黒雲忽ち四方に飛散し、明皎々たる満月の光、中天に綺羅星の現はれ

たる如き天候と一變したりける。

黒姫「コレコレ高山彦さま、お前さまは見掛けに依らぬ親切な人だつた。其親切を吐露して高姫さまの御機嫌を直して來て下さい。併し親切を盡くすと云つても程度がありますよ」

高山彦「随分難かしい御注文ですなア。其程度が一寸分りませぬ、何處迄と云ふ制限を與へて下さいな」

黒姫「エ、不粹な人だなア。そこはそれ、不離不即の間に立つて圓満解決を計るのだ。電波を送るなぞは絶対に禁物ですからな」

高山彦「誰がアンナ婆アさまに電波を送つて堪るものか、安心なさい」

黒姫「婆アさまに電波を送らぬと仰有つたが、高姫さまが婆アさまなら、私はもう一つ婆アさまだ、そうするとお前は餘程險呑な人だなア。これだから折角出來たお民を、巧い事を云つて高城山迄放り出したのだ。コレ高山さま、ソナ事に抜け目のある様な、素人とは違ひますよ。此道にかけたら、世界一の經驗者だから、お前の様な雛子とは違ひますよ、確りとやつて來なさい。これからは婆ア

と云ふ事は云つて貰ひますまい。年は取つても心は二八の花盛り、靈主體從の仕組と云つて心に重きを置くのだよ」

高山彦「同じ、婆アどっこい、昔の娘でも貴方は又格別ぢや、どことは無しに、良い處があります哩」

黒姫「それはそうだらう、七尺の男子を手鞠の様に翻弄すると云ふ黒姫の腕前から、何程高山さまが、地團太踏んだつて、足許へも寄り付けるものか。然し乍ら、良く氣を付けて、昔の娘の高姫さまに旨く取り入つて御機嫌を回復して來るのだ。呉れ呉れも送つてはなりませんぞや」

高山彦は迷惑相な顔付で高姫の居間を訪れた。高姫は、夜着を頭迄グツスリ被つて、捨鉢氣味になつて横たはつて居る。

高山彦「モシモシ高姫さま、高山で御座います」

高姫「コレお前さま、戸惑ひをして居るのかな、私は黒姫さまぢやありませんよ。貴方のお出でになる處は方角違ですよ。サアサアトツトとあつちへ往つて下さい、黒姫さまに痛くも無い腹を探られちやお互の迷惑だからなア」

高山彦「イエイエ決して決して御心配下さいませ。山の神様の公然認可を得て参りました。實の處、黒姫がお詫に参りますので御座いますが、どうも餘り失禮な事を物の機で申上げ、貴方に合す顔がないところから、私に代つて旨く御機嫌をドツコイ、十分に御得心の往く様にお詫をして来いと仰有いました。何卒黒姫さまの脱線振りは、神直日大直日に見直し聞直し不調法は宣り直して上げて下さいませ」

高姫「コレコレお前さまは、何時の間にやら下鶏になつて了つた。何故それ程主人のクセに奥様に敬語を使ふのだい」

高山彦「ハイハイこれには、曰く因縁が御座います」

高姫「因縁があるか何だか知らぬが、貴方がさう御丁寧な言靈を使ひなされると、自然に夫婦仲が良くなつてお目出度い。それだから嬪大明神で、高山彦さまはお目出度いと人が云ひますよ。ホ、ホ、ホ、」

高山彦「何でも結構です。何卒貴方も御機嫌を直して下さい。さうすれば此お目出度い男が尚お目出度くなりますから、和合して下さい」

高姫「和合して下さいとはそれは何を云ひなさる。一方の大將と大將の争ひを平和にするのは和合だが、何と云つても、私と黒姫さまとは師弟の間柄ぢやないか。師匠の私に和合して呉れなぞとチツと僭越ぢやありませんか。今迄のお氣に障つた處は何卒お許し下さいませと謝罪するのが當然だ、それをソナ傲慢不遜の態度では、高姫の腹の蟲が容易にチヤキチヤキと承諾致しませぬよ」

高山彦「御説御尤も、夫婦の仲と師弟の間を混同して居ました。これは黒姫と私との間に用ゆる言葉で御座います。高姫のチヤキチヤ様、何卒黒姫の御無禮、寛大な大御心に見直し聞直し許してやつて下さいませ」

高姫「ア、さうかいな、さう物が分かれば、元より根のない喧嘩だ。どちらも神を思ひお道を思うての争ひなのだから、私人としての恨みはチツとも無いのだ。どうぞ黒姫さまに早く此處に来て貰つて下さい」

高山彦「承知致しました。黒姫さまも嘸お喜びになる事で御座いませう」

高姫「ソレ又々、貴方は奥さまに對して敬語を使ひなさる。餘り見つともよくない、愼みなさいや」

高山彦「ハイハイ以後は慎みます」

と此場を立ち、

「ア、敬語を使はねば、黒姫さまには叱られるなり、困った事だ」

と呟きつつ黒姫の居間に歸り來り、高山彦は怖さうに、襖をスーツと開き、半分逃げ腰になつて、顔許り突出し、形勢觀望の態度を取つて居る。黒姫は目敏くこれを眺めて、

「コレコレお前は高山さまぢやないか。其態度は一體どうしたのだい」

と震ひ聲で呶鳴り付けた。

「ハイ、ドドドーモ致しませぬ」

と云ひつつびつくりして鬨の外にドスンと尻餅を搗きアイタ、々、々、黒姫「コレ高山さま、何をしとるのだい。這入つて來て早く注進なさらぬかい」

高山彦はもぢもぢし乍ら、云ひ難さうに、

「高姫さまがそれはそれは御機嫌麗はしく、和合は和合、謝罪は謝罪、そこで和

謝何も彼も中立と合罪」

「何だか齒切れのせぬ返事だな。何は免もあれ、高姫さまのお居間にお伺ひしよう、何時迄兄弟牆に鬨ぐ様な内輪喧嘩を繼續して居ても、お互の不利だ。どれ、これから和合して來ませう」

高山彦「モシモシ黒姫さま、和合はいけませぬよ」

「何、和合が不可と、喧嘩をせいと云ひなさるのか」

高山彦は周章氣味で、

「イエ高姫さまが、喧嘩株式會社を創立なさつて、株券を募集したり、社債（謝罪）を起したりするとか何とか云つてましたよ。何でも些細な間違ひで、いつ迄も蝸牛角上の争鬪を續けて居るのは、國家の内亂も同様だから可成く平和の解決を致します」

黒姫は委細かまはず、ドスンドスンと床を響かせ乍ら、高姫の居間をさして進み入り、

「高姫様、御機嫌は如何で御座います。御無禮の段は平にお詫を致します」

「イヤ御無禮はお互様で、何卒これからは感情の衝突は一掃し車の兩輪となつて、

神國成就の爲めに活動致さうぢやありませんか

「有難う御座います。何分宜しく御願ひ致します」

「時に黒姫さま、自轉倒島の魔窟ヶ原に残してある梅公、其他の宣傳使の方々は、愚圖々々して居ると、又もや三五教に、青彦や常彦、夏彦の様に沈没すると困りますから、今の内に本山に迎へ取つたらどうでせうか」

「ハア御意見通り、黒姫も賛成致します。飛行船を二艘許り、鶴、龜の兩人に操縦さして迎へて歸つてはどうでせうか」

「それは至極適任でせう。コレコレ鶴公、龜公」

と高姫は金切聲を出して呼び立て居る。臆て鶴、龜の二人は、二艘の飛行船を操縦して四五の随員と共に天空を轟かして進み行く。

(大正一一・五・七 舊四・一一 藤津久子録)

嚴いづの御靈みたまの大御神おほみかみ、その和魂にぎみたまを祭まつりたる、神かみの光ひかりの元伊勢もといせの、大御前おほみまへに額ぬかづき
て、天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし、心こころの空そらの雲霧くもぎりを晴はらせ給たまへと、汗あせをたらたら祈いのり居をる、
三男二女さんなんにぢよの信徒まめひとありけり。

若彦わかひこ「コレコレ馬公うまこうに鹿公しかこう、お前御苦勞まへごくらうだが是これから、魔窟まくつヶ原がはらの黒姫くろひめさまの岩窟がんくつ館かたを訪たづねて往いつて貰もらへまいかな、私わたくしは玉照姫たまてるひめ様さまを御保護ごほごまをしあ申上まをしあげて、紫姫むらさきひめ様さま、お玉たまさまと此御神殿このごしんでんに圓満解決えんまんかいけつの祈願きぐわんを凝こらして待まつて居ゐるから、黒姫くろひめさまに會あつて、
とつくりと吾々われわれの眞心まごころを傳つたへて貰もらひたいのだ」

馬公うまこう「ハイハイ、かうなればもう破やぶれかぶれた。神様かみさまの仰有おつしやる事ことは何なにが何なんだか譯わけ
が分わからない、行いつて参まゐりませう」

若彦わかひこ「分わからない所に妙味めうみがあるのだらう、往ゆく所迄ところまで行ゆかねば到底たうてい吾々われわれの限かぎりある
知識ちしきでは御神慮ごしんりよを窺き知ちし奉たてまつる事ことは出来できない。此度このたびは十分じふぶんに低ひくう出でて、黒姫くろひめさまが、
何なんと云いうても一言いちごんも口答くちこたへをしてはならないよ」

鹿公しかこう「ソナナラ馬公うまこう、兔とも角偵察かくていさつがてら行いつて來きませう。何なんだか張合はりあひの無ないやう
な氣きが致いたします哩わい。併しかし乍ながら黒姫くろひめが居ゐなかつたらどうしませう」

姫様や、若彦の代理にお詫に参りました。玉照姫様を献上致しますから、今迄の御立腹は河に流して下さいませ、是非とも宜敷くお願い致します。と云うて返事を聞いて来るのだよ

馬公「ソナ察しの無い馬公とは違ひます哩。龜彦のお直使がお出でになつた時からチヤンと筋書は分つて居るのだ。なア鹿公」

鹿公「鹿」り鹿り、サア往かう。三人様、玉照姫さまを大切に御保護なさいませや、たつた今黒姫の手に渡すかと思へば、何だかお世話の仕甲斐が無いやうな氣が致しまするが、これも成行だ。因縁づくぢやと諦めましてな、是非とも宜敷うお頼み申やす

と云ひ捨てて谷川傳ひ、崎嶇たる小徑を魔窟ヶ原指して驀地に驅けり行く。

話變つて魔窟ヶ原の岩窟には主人の留守の間鍋たき、梅公の留守師團長、丑、寅、辰、鷹、鳶其他七八名は、食つては寝、寝ては起き、朝から晩迄、土龍のやうに穴住ひ許りに日を暮し、宣傳にも行かず、貯藏せし酒や米を出し放題に出して、白蟻が柱を食ふやうにちびちびと、獅子身中の蟲の本領を遺憾なく發揮して

居る。

寅若「コレコレ梅の大將、去年の此頃だつたね工、普甲峠の突發事件、黒姫さまに分つた時にや随分ひやひやしたぢやないか」

梅公「過ぎ去つた事は云ふものぢやない哩。あれが抑もの序幕で、玉照姫の事件が起り、それが失敗の原因となつて、意地癖の悪い高山彦夫婦が、吾々に城を明け渡してフサの國の本山へ歸つて行つた。お蔭で目の上の瘤が取れて毎日ウラル教ぢやないが、飲めよ騒げよ一寸先ア闇よと、牛飲馬食が續けられるのだ。矢張これも梅公の方寸から出たのだ。一年前から見越しての梅公の計畫と云ふものは偉いものだらう。黒姫迄おつ放り出すと云ふ土臺を作つた凄腕前だから、何と云うても哥兄さまだよ」

寅若「ソナナ自慢は置いて貰はうかい。此新しがる世の中に、黴の生えたやうな一年越の自慢話は買手がないぞ。それにつけても漁夫の利を占たのは三五教の奴だ。一敗地に塗れ馬鹿を見たのは黒姫さまだよ。紫姫や、青彦を特別待遇で下にも置かぬ様な信任振を發揮して居たが、豈圖らむや、妹圖らむやだ。あの態つた

らないぢやないか。アンナ奴は又三五教で愛想盡かされて、盆過ぎの幽霊の様に矢張ウラナイ教が誠だつた、改心致しましたなぞと尾を掉つて歸つて来るかも知れやしないぞ。今度はドンナ事があつても相手になつてはいけないよ」

梅公「何程鐵面皮の青彦だつて、さう何度も謝罪つて來られた態ぢやあるまい。

ソナ事は絶対にない俺は確信して居る、マアマア悠くり飲みて騒ぐがよからうぞ。一寸先は暗の世だ。ある中に飲んだり食つたりして置かない事には、三五教は兔も角バラモン教の殘黨が押し寄せて來て奪つて行くかも分つたものぢやない。兔に角腹の中に入れて置けば損は無いだから、人數は減つたなり、二年ぶりの食糧や酒があるのだから、お前方勉強して胃の腑を働かし、毎日毎日、五六人前宛勉強せないと神様に濟まないぞ」

と他愛もなく、酒に酔うて勝手な理屈を囀り居る。

此時門口より岩の戸を覗いて「オイオイ」と呼ぶ男ありき。

寅若「オイ鷹公、鳶公、何だか入口からオイオイと云つて居やがるぢやないか。何處の奴か知らないが、敵でも味方でも構はぬ、引張込んで飯を鱈腹喰はせ、酒

を十分飲ませて穀潰しの御用をさせるんだ。早く行つて引張つて来い。是から酒責め、飯責め、御馳走責めだ」

「オイ合點だ」と鳶、鷹の兩人は握り飯を片手に持ち、片手に酒徳利を各自提げながら、穴の入口迄やつて来る。

馬公「モシモシ、私は馬で御座います。どうぞ通して下さいませぬか」

鳶公「ウン、荷つけ馬か、乗馬馬か、木馬か、尻馬か知らぬが、マアこの【うまい酒を飲んで握り飯でも食へ。さうして誠意を現はすのだ】」

馬公「飯相な、何う致しまして、お酒を頂戴しては濟みませぬ。實は謝罪りに参りました。是非共宜敷くお願い致します」

鳶公「エ、ちよる臭い、徳利の顔を見て謝罪る奴があるか。二升や三升グツとやつて其上で謝罪るのなら筋が立つが、徳利の顔を見て謝罪る奴が何處にあるか

い

馬公「イエイエ、私は黒姫さまに反對致しました青彦や、紫姫の部下の者で御座います。誠に濟まない事で、黒姫さまにお詫に参りました」

鳶公「ウン、あの黒姫の奴か、彼奴はお前達のお蔭で縮尻りやがった。とうの昔フサの國の本山に引き上げよつた、其後と云ふものは毎日毎日、食つたり飲んだり、氣樂なものだ。青彦様々だ。お前も其家來であれば尚々結構だ。マアマア祝ひに一杯やれ」

馬公「オイ鹿公、何うやらこいつは風竝が變だよ」

鹿公「變でも何でも唯飲めと云ふのだから飲んだらいいぢやないか。モシモシ皆さま、是非共宜敷く、私は決して決して謝罪りなどは致しませぬ」

鳶公「ヤアお前は鹿公だつたな。ウンよしよし、一寸話せる、我黨の士だ。サア是から酒責め、飯責め、牡丹餅責めの御馳走責めだ。去年の返報がへしだ。おぢおぢせずに男らしう牛飲馬食するのだぞ。黒姫が留守になつたから梅公の會長で、牛飲馬食會の本部が設立されたのだ。貴様も成績次第で幹部にしてやらぬ事も無いし、特別會員に推薦しないにも限らない、

岩窟にも春は來にけり酒の花

だ。アハ、ハ、ハ、サア這入つたり這入つたり」

鷹、鳶の兩人は、馬、鹿の手を無理無體に引張り、大勢の前に連れて來た。

梅公「ヤアお前は三五教の連中ぢやないか」

馬公「今日から牛飲馬食會へ入會を願ひます」

梅公「ヤア、二人だな、本會創立以來創立者の外に、入會を申込んだのは君達が

最初だ。普通なれば飲みぶり、食ひぶりを検査した上に會員の等級を定めるのだ

が、今日は祝意を表する爲、特別會員に推薦するから、特別會員の名譽を保持す

る爲に、腹が破れる程食つて、天が地になり、地が天になる所迄酒を飲むのだ。

いいか、合點か」

馬公「これはこれは特別の御詮議を以て」

鹿公「【しか】も特別會員に列せられまして有難う。飽迄頂戴仕ります」

梅公「ヤア、これで同志がざつと二人増加した。黒姫の信徒募集とは餘程早い哩。

否効果が擧がると云ふものだ」

寅若「オイ皆の奴、會長萬歳を三唱しようぢやないか」

一同「オー宜からう宜からう、牛飲馬食會萬歳、會長さん萬歳、馬、鹿兩人萬歳、

會員一同萬々歳、ワハ、ハ、ハ、」

と岩窟も崩るる許り笑ひ倒ける。此時岩窟の外には鶴、龜の兩人四五の從者を引

き連れやつて來た。

鶴公「これこれ龜公、隨分賑やかな聲がするぢやないか」

龜公「オウ、そうだなア、何でも此中に天眼通の利く奴があつて、吾々の歡迎會

でも開いて前祝でもしとるのだらう」

鶴公「それだけ天眼の利いて居る奴があるのなら、何故吾々を迎ひに來ないのだ

らう」

龜公「餘り嬉しいので酒に喰ひ酔うて忘れたのかも知れない。併し靈は屹度迎ひ

に來て居るよ。何事も善意に解するのが安全第一だ」

鶴公「併し何だかちと變挺だ。鬼の來ぬ間に體の洗濯、鞆丸の皺伸ばしをやつて

居るのぢやなからうかなア。何は兔もあれ一つ吠鳴つて見ようぢやないか」

斯く話す折しも、鳶、鷹の二人は行步蹣跚として入口に現はれ來り、

「ダ、誰人だ。羨望りさうに入口から覗きよつて、何も遠慮は要らない。サア思ひ切り飲んで、思ひ切り食つて踊るんだ。今日は三五教からも二人も入會者があつた。ヤア七八人も連れて居やがるな。牛飲馬食會の隆盛、旭日昇天の勢だ。今日の祝意を表するため、特別會員に推薦してやる。そんなに入口に乞食のやうに立つて居ないで、トツトと迂り込めい」

鶴公「貴様は鷹公と鳶公ぢやないか。黒姫の留守役たる梅公は何をして居るか。此方はフサの國の本山より出張致したる鶴、龜の兩人だ。一刻も早く梅公の奴に注進致せ」

鷹と鳶とは此の聲を聞いて一度に酔を醒まし、ぶるぶる慄へながら、
「ヤア、これはこれは鶴公に龜公、鷹公に鳶公、馬公に鹿公、鶴公に鹿公、鷹公に馬公に鹿公」

鶴公「何を云つて居るのだ。狼狽へやがつて、早く注進せぬかい」
鷹公「オイ鳶公、氣の利かぬ奴だ。早く今の内に奥に行つて皆に注進して、酒徳利や何かを隠すのだ。それ迄俺は何とか彼とか云うて閉塞隊の御用を務めて居る

から』

龜公「オイ、鷹公、その狭い入口に何をうごうごして居るのだ。早く退かぬかい、

這入れないぢやないか」

鷹公「今這入られて何う耐らう。出口入口一寸一つ門、徳利の口で一口ぢや、土

瓶の口ぢや二口ぢや、口は幸福の門、今日の口はどうやら禍の門ぢや。謹んで漫

りに口を開くぢやないぞ。口は禍の基だぞよ。口程恐いものはないぞよ。今に天

の岩戸を開いて見せるぞよ」

鶴公「コラ鷹公、貴様酒に喰ひ酔つて居るな、大方誰も彼も残らず酒を喰ひ、御

馳走に飽いて居るのぢやらう」

鷹公「滅相な滅相な、何うして何うして、黒姫様のお留守中は慎んだ上にも慎ま

ねばなりません、その故に牛飲馬食會が創立されました」

鶴公「何、牛飲馬食會、そりや何をする會だ」

鷹公「エイエイ、それは彼の何です。大江山に八岐の大蛇が現れまして大きな牛

を五六匹も一遍に【ぎう】と飲み、馬も七八匹一遍に食つたと云ふ事です。それ

で呑のむのが商賣しやうばいの八岐やまたの大蛇をろちの牛飲馬食ぎういんばしよくをやつて居をる其型そのかたを一寸ちよつとして見たみのですよ。
ちと位酒くちあみさけを飲のんで飯めしを食くつたつて矢張やつぱり一升袋いっしやうぶくろは一升いっしやうだ。何れ留守中るすちゆうの事ことだからち
ツと位不都合くらあふつがふがあつても大目おほめに見みなさるがよからう。兔とに角憎かくにくまれるのは損そんだ。
八方美人主義はつぱうびじんしゆぎが當世たうせいだから〆

奥おくの方ほうでは鳶公とびこうの注進ちゆうしんによつて俄にはかの大騒おほさわぎ、徳利とくりを持もつて雪隠せつちんに隠かくる奴やつ、井
鉢りばちを抱かかへて床下ゆかしたに這はひ込こむ奴やつ、着物きものを前後まへうしろに着きる奴やつ、大騒おほさわぎをやつて居をる。鶴つる、
龜かめりやうにん兩人つひは遂つひに鷹公たかこうを蹴飛けとばし、六人ろくにんの從者じゆうしやと共にこの亂癡氣らんちき騒さわぎの現場げんぢやうに現あらはれ
來きたり、

鶴公つるこう「ヤア御大將梅公おんたいしやううめこうさま、仲々なかなかの元氣げんきですなア。流石さすがは黒姫くろひめ様が留守るす師團長しだんちやうに
選拔せんぱつせられるだけあつて好よく隅すみから隅すみ迄まで行き届とどいて居あります。餘程よほど貴方あなたの御政治ごせいぢが
良よいと見みえて四邊あたりの草木くさきは申まをすに及およばず、室内しつないの徳利とくりや土瓶どびん、膳ぜん、椀わん、箸はしにいた
る迄まで貴方あなたの餘徳よとくで交歡かうくわん拵ぶじ舞雀やくやく躍手ての舞まひ足の踏ふむ所ところを知らずと云いふ有様ありさまですな〆
梅公うめこう「イヤもう、さう云いはれましては答辨たふべんの辭じが御座ございませぬ。何分なにぶん有力いりよくな黒姫くろひめ
様さまが留守るすになつたものですから、吾々われわれは粉骨碎身ふんこつさいしん大車輪だいしやりんの活動くわつどうを致いたさねばなら

鹿の兩人、吾々も特別會員に列せられたチヤキチヤキです。もしもしフサの國からお越しになつた鶴公さま、龜公さま、よい所でお目に懸りました。實の處、特別火急の願ひがあつて黒姫さまにお目に懸からうと出て参りました處、生憎御不在の上、梅公の會長の下に盛な牛飲馬食會が開會されて居ましたので、吾々も鷹公、鳶公の推薦によつて特別會員たるの光榮を得ました。併し乍ら鶴公さま、貴方は黒姫さまに一つ吾々の願を取次で下さいますまいかな」

鶴公「是は又妙な事を聞きます。一體取次げと云ふ要件は何んな事で御座いますか」

鹿公「實は紫姫、青彦が改心を致しまして、折角手に入れた玉照姫様母子を黒姫様に獻じ度いと申し出たので御座います」

鶴公「暫し首を傾け稍思案に暮れ居たりしが、龜公は不思議さうに、又そんな事を云つてウラナイ教を打ち返しに来るのだらう。そんな下手な計略はよしたがよからうぜ」

鹿公「是非とも宜敷うお願い申します」

鶴公は手を打つて、

「嗚呼流石は神様だ、斯うなくては叶はぬ道理だ、イヤ承知致しました。直様お傳へ致しますせう。馬公、鹿公、貴方は一時も早く歸つて皆さまに報告して下さい。私は一寸飛行船を飛ばしてフサの本山に立歸り、高姫、黒姫様の御兩人様の御意見を承はつて参りませう」

馬公「是非共宜敷くお頼み申します」

鹿公「私も同じく是非共宜敷う」

と、いそいそとして門番の丑公に事情を明かし、元伊勢指して歸り行く。

(大正一一・五・七 舊四・一一 加藤明子録)

第八章 大悟徹底(六五三)

紫姫、若彦、お玉は元伊勢の神殿に祈願を籠め終り、玉照姫を介抱しつつ、馬、

鹿兩人の復命如何にと待つて居た。

黄昏過ぐる頃神殿に向つて急ぎ来る二つの影。

「モシモシ紫姫さま、若彦さまは居られますか、馬、鹿の兩人で御座います」

若彦「ヤア馬公に鹿公、御苦勞だつたナア。様子は如何ぢや」

馬公「ハイまあまあ上【いき】でした。黒姫はフサの國へ歸つて不在中だとかで、

残りの十四五人の連中、酒に喰ひ酔つて大騒ぎの眞最中、到頭吾々兩人も引張り

込まれ、酒に酔ひ潰され、敵味方の區別も無く互に歡を盡して居る最中へ、やつ

て來たのはフサの國の本山より高姫、黒姫の使として鶴公、龜公の兩人、そこで

吾々兩人は貴女方の御意見を傳へますと、鶴公、龜公は一も二も無く承諾をし

ました。併し乍ら一寸フサの國まで伺つて來るから、確たる返答は後程するとの

事でございます」

紫姫「ア、それは御苦勞でしたナ。左様ならば御返事のあるまで、一旦聖地へ引

返しませうか」

若彦「それが御よろしうございませう。玉照姫様が元伊勢へ御參拜の御供を致し

たと思へば無駄にはなりませぬ。サアサア急ぎ歸りませう』
と一行五人は、玉照姫を恭しく捧持しつつ再び世繼王山麓の館に立歸りける。峰
の嵐に吹き散らされて満天の雲は何處ともなく姿を消し、上弦の月は東天に輝き
初めた。夜明けに間もなき時なりける。

四五日過ぐる夜半頃、世繼王山麓の玉照姫が庵を訪ねる數名の男女が現はれた。
凧吹き荒ぶ眞夜中頃、紫姫以下の家族は残らず寢に就て居た。門の戸を敲く男の
聲、

鶴公「もしもし夜中に参りまして濟みませぬが、私は御存知のフサの國のウラナ
イ教の本山から参りました鶴公でございます。先日馬公さま、鹿公さまに御聞き
申したことを、直様高姫、黒姫様に御傳へ致しました所、殊の外御悦び遊ばして、
唯今此所へ大勢伴れて御出でになりました」

馬公は此の聲を聞き、家の中より、
「ヤア擬ふ方なき鶴公さまの聲、一寸待つて下さい。今直に紫姫様に申上げます
から、オイ鹿公、起きぬか、大變だ大變だ」

鹿公はむつくと起き、

「ナ、何が大變だ。大方フサの國から黒姫さま、高姫さまが殊の外御悦びで御

出でになつたのだらう」

馬公「なまくらな奴だ、聞いてみやがつたのだな」

鹿公「アハ、、、モシモシ紫姫さま、若彦さま、高姫、黒姫の御兩人が御出で

になりましたよ」

紫姫「アーそれは御遠方の所、よう来て下さつた。馬公や、早く表を開けて下さ

い。さうして受付で一寸御茶でも差上げて、此方の奥の片付くまで待つて居て貰

うて下さい」

と欣々として寢床を片付け、掃除にかかると。若彦は寢巻を着替へ、慌て表に飛び

出し、

若彦「ヤ、黒姫さま、高姫さま、よう御出で下さいました。サアほんの假小屋で

貴方の御在遊ばす本山に比ぶれば、全で柴小屋の様なものでございますが、どう

ぞ御入り下さいませ」

高姫「青彦さま、何事も神界の御都合だから今迄の事は、全然水に流して仲好うするのだよ」

若彦「ハイハイ仰せの通り仲好うする程、結構なことはございませぬ」

黒姫「お前は矢張り私の眼識に違はず、屹度こんな好結果を齎すであらうと思つて居つた。私の眼は矢張り黒いワ。高姫さま如何でございます、間違ひはありま
すまい」

高姫「イヤどうも恐れ入りました。サアサア御免蒙りませう」
と一同はぞろぞろと鬨を跨げて奥に進み入る。

紫姫「これはこれは皆様よく「おはせ」られました。毎日日首を伸ばして御返事如何にと御待ち申してゐました。「こちら」の方から御返事の有り次第伺ふつもりでしたのに、自ら御出張下さいますとは、實に有難いことでございます。どうぞ今迄の御無禮は御赦し下さいませ」

黒姫「モースうなれば親子も同然だ。決して御氣遣ひ下さるな」
と奥の間の正座に一行七人ずらりと棚の布袋然として座を占る。

紫姫は心底より嬉々として、丁寧に遠來の客をもてなしてゐる。若彦、馬、鹿の三人は俄に襷掛けとなり、御馳走の獻立に全力を盡してゐる。お玉は玉照姫の側を離れず大切に保護して居る。

黒姫「これ紫姫さま、貴女は本當に見上げた御方だ。この黒姫でさへも深遠靈妙なる貴女の秘策には氣が付かなかつた。大事を遂行するものは、さうなくてはならぬものだ。現在上役の私さへも知らぬやうに、うまく芝居を仕組まれた其の腕前は、實に感服致しました。モシ高姫さま、それだから私が貴女に御目にかけて時、掘り出し物が手に入つたと言つたぢやありませんか。黒姫の眼力も、あまり捨てたものぢやありませんまい。エへ、へ、へ、』
と肩を揺る。

紫姫「イエイエもとより智慧の足らはぬ妾のことでございますから、實の處は若彦、元の名の青彦と二人、悦子姫さまの御指圖に従つて、濟まぬとは知り乍ら黒姫様を誑かつたのです。つまり貴女に揚げ壺を喰はし、玉照姫様を此方へ捧持して歸つた時は、それはそれは何とも知れぬ心持でございました。嬉しいやら又何

ともなしに氣持が悪いやら、貴女に對して御氣の毒やら、何か心の奥の奥に一つの黒い影があるやうな心持でした、今日となつては實に一點の曇りも無き様になりました、こんな嬉しいことはございませぬ』

黒姫は眼を丸うし、口を尖らし、

黒姫『さうすると矢張りお前等二人謀し合はして、私を抱き落しにかけたのだな。

ほんにほんに油斷ならぬ途方も無い腹の黒いお姫様だ。オホ、、、』

高姫『これ黒姫さま、もう好いぢやありませんか。改心さへなさつたら何も言ふ

ことはありませぬワ。過ぎ去つたことを言うて互に氣分を悪うするよりも、勇ん

で御用をするのが神様に對して孝行ぢや。もうそんな事は打切りに致して、打解

けて是から神業に参加しようではありませんか』

紫姫『有難うございます。これに就きましては種々と深い理由がございませぬが、

臆て御膳の支度も出来ませうから、ゆつくりと召上つて其の後に、妾等の懺悔話

を聞いて貰ひませう』

斯る處へ若彦は現はれ來り、

「皆さま、御飯の用意が出来ました。もう夜も明けかけましたから、どうぞ御手水を使つて御飯を召上つて下さいませ」

黒姫「サア皆さま、身體を潔めて神様に御禮を申上げ、御飯を頂戴して、ゆるゆると御話を承はることにしませう」

此の言葉に一同は裏の谷川の清泉に口を嗽ぎ、手水を使ひ神前に祝詞を奏上し、終つて朝餉の膳に就いた。

黒姫「何から何まで心を籠めた結構な御馳走を頂戴致しました。青彦さまの眞心が染み込んで、何となく美味しく頂戴致しました。時に青彦さまに否紫姫さまに改めて御訊ね致しますが、それだけ仕組んで此の年寄をちよるまかし、茲まで成功して置き乍ら、何の爲に今となつて玉照姫様を、私の方へ渡さうと言ふのだい。大方玉照姫様の御意に叶はずして何か恐ろしい夢でも毎晩二人の方が見せられ、責られるのが辛さに切羽詰つての今度の降参ぢやないか。素盞鳴尊の惡神の御用をするお前として、どうも不思議で堪らぬぢやないか。サアすつぱりと打明けて言ひなされ。事によつたら玉照姫様を受取つて上げぬこともない」

若彦「イエイエ滅相もない。玉照姫様は何時も大變な御機嫌でみらせられ、御神徳は日々輝きまして、此の御方あるため三五教は大變な勢力になつて來ました」
黒姫「そんな結構な玉照姫様を何故又あれだけ秘術を盡して手に入れ乍ら、ウライ教へ受取つて下されと頼みに來たのだい」
若彦「實は劍尖山の麓の谷川で、貴女に御眼にかかつた時、紫姫様と吾々以心傳心的に詐つて、ウライ教に歸順と見せかけ、貴女の計略をすつかり探知し、うまく取り入つて重任を仰せ付けらるるところまで漕ぎつけ、これ幸ひと豊彦の家へ綾彦夫婦を引伴れ、玉照姫様、お玉さまを受取り、黒姫さまは今頃は缺伸をして待つてゐらつしやるだらう。エー好いことをした、痛快だと心欣々歸つて參り、日に夜に侍き仕へ奉り、その御かげで旭日昇天の三五教の勢ひとなり、素盞鳴大神様も嘸御悦びの事と思つて居りましたところ、或夜のこと大神様の御娘英子姫様に、大神様より非常な御意見を遊ばされた上、權謀術數的偽策を弄して貴き神様を手に入れるとは不都合千萬だ、三五教に於て最も必要なる玉照姫なれば、ウライ教にも必要であらう。黒姫が全力を盡して手に入れようとしてゐるものを、

無慈悲にも何故そんな掠奪的行動を執つたのだ。己の欲する所は他人に施せと云ふ神の心を知らぬか、一時も早く黒姫に玉照姫を御渡し申し、御詫を致せ。さうして其方等は三五教の宣傳使を止めよとの意外なる御不興、厳しき御命令でございました。それが爲に紫姫様も、私も嗚呼縮尻つた。三五教の精神はそんなものぢやない。また素盞鳴大神様の大御心は、吾々のやうな半清半濁の魂ではない。誠一つの水晶の御魂と感じ入り、恐れ入つて気が氣でならず、貴女が依然として魔窟ヶ原の巖窟に御座ることと思ひ、玉照姫様が元伊勢様へ御参拜の御供を幸ひ、馬、鹿の兩人を遣はして御詫にやつたところ、生憎本山へ御引上げの御留守中、幸ひにも本山より、鶴、龜の御兩人が御出でになつたさうで、そこで馬、鹿の兩人が吾々の意志を傳へて、貴女に御願ひしたやうな次第でございます。決して決して吾々兩人が心からの改心で御渡し申さうと言ふのではございませぬ。全く大神様の御命令に據つたのでございます」

紫姫「唯今若彦の申された通り、寸分の相違もございませぬ。どうぞ吾々の今迄の悪心を御赦し下さいまして、玉照姫様をウライナイ教へ御受取下さいませ。吾々

一同がフサの國迄御供を致します。さうして吾々最早三五教を除名されたものでございませうれば、どうぞ貴女の幕下に御使ひ下さいませうように御願ひ申します。黒姫「よしよし私の否ウライ教の立派な宣傳使にして上げませうよ。御心配なさるな。又玉照姫様もお玉さまも確に御受取り致しますせう」。高姫「ア、一寸黒姫さま、御待ち下さいませ。こりや吾々も一つ考へねばなりませう。何程玉照姫様が結構な御方だと言つて、ハイ左様かと頂いて歸る譯には行きますまい」

黒姫「そりや又何故に、折角ここ迄に漕ぎつけたのに、神様の御神徳を受取らぬと仰有るのですか」

高姫「私は實に心の中の【さもしさ】が今更の如く恥かしくなつて來ました。素盞鳴尊様は變性女子だ、悪役だと今の今まで思ひ詰め、こんな神の建てた教は絶対に根底から粉碎して了はねば世界は何時迄も闇黒だから、假令私の生命は如何なつても、素盞鳴尊の悪神を打滅し、三五教を根底より替へて誠一つのウライの教で世界を水晶に致し、二度目の岩戸開きをせなならぬと、今の今迄一生懸命

に活動して來ましたが、素盞鳴尊様は矢張り善であつた。大善は大惡に似たり、眞の孝は不孝に似たり、誠の教は偽りの教に似たりと言ふ神様の御教示が、私の胸に釘さすやうに響いて來ました。ア、瑞の御靈様、今迄の私の取違ひ、御無禮を何卒赦して下さいませ』

と兩手を合せ、涙をハラハラと流し、身體を疊に打突けるやうに藻搔いて詫入るのであつた。

黒姫は狐につままれたやうな顔をして、一言も發せず、眼ばかりギョロつかせて一同を眺めて居る。梟鳥の夜食に外れたと言はうか、鳩が豆鐵砲を喰つたと言はうか、何とも形容の出來ぬスタイルを遺憾なく暴露してゐる。紫姫は高姫に取継り、涙乍らに、

紫姫「モシモシ高姫様、どうぞ許して下さいませ。貴女は其様な綺麗な御心とは知らず、今の今迄陰險な御方と疑つて居りました。何も彼も是にてすつかり御心中が氷解致しました。ア、私は何とした【さもしい】根性でありましただらう。どうぞ私達を助けると思つて、玉照姫様を御受取り下さいませ』

高姫は漸々顔を上げ、涙を袖にて拭ひ乍ら鼻を啜つて、

高姫「イヤもう前世よりの深い罪業で、今が今迄瞋恚の雲に包まれ、執着心の悪

魔に囚はれて、思はぬ恥を神様の前に晒しました。國治立の大神様、豊國姫の大

神様、素盞鳴大神様も嘸端ない奴だと御笑ひでございませう。それに就けても茲

迄素盞鳴大神様を敵として、有らむ限りの悪口を申上げ、神業の御邪魔を何彼に

つけて致して來ました。此の深い罪をも御咎めなく、大切な玉照姫様を私達に御

遣はし下された上、大切な宣傳使まで懲戒のため除名をするとの御言葉、何たる

公平無私な神様でございませう。ア、勿體ない、どうぞ神様赦して下さいませう

と又もや泣き伏しける。黒姫も何となく悲しさうに俯向いて、肩で息をして居る。

馬公「オイ鹿公、どうしても世繼王山の麓はフモトぢや。全で狐を馬に乗せたや

うな天變地變が勃發したぢやないか」

鹿公「そうだから一寸先は暗の世よ。何事も惟神に任せ、人間の分際で神の經綸

は判らぬと仰有るのだ」

馬公「そうだと言つて、變ると言つても、あまりぢやないか。彼れ程兩方から一

生懸命になつて、狙つて居つた玉照姫様を貰つて呉れ、イヤ勿體ないなんて肝腎の玉照姫様を馬鹿にして居るぢやないか。此方で振られ、彼方で振られ、玉照姫さまだつて立つ所が無いぢやらう。俺はウラナイ教が伴れて歸らねば、お玉さまと一緒に手を携へて、玉照姫様を捧持し、何處かの山奥に行つて、一旗擧げて見ようと思ふが如何だらうな」

鹿公「何を吐すのだ。貴様等に玉照姫さまやお玉さまが隨いて往かつしやると思ふか」

馬公「一寸先は暗の世だ。人間の知識の範圍でわかるものかい。何事も神様の御意思の儘だ。併しよく考へてみよ、高姫さまや、黒姫さまが泣いて受取らず、紫姫さまや、若彦が受取つて呉れと言ふ。何方にもゆき場がなくなつて、宙にブラリの玉照姫さまだ。白羽の矢は屹度俺にささらねば、ささるものがないぢやないか」

鹿公「アハ、ハ、ハ、取らぬ狸の皮算用だ、拾はぬ金子の分配話見たやうな惚けたことを言ふない。餘程貴様もお目出度い奴だ。アハ、ハ、ハ、」

若彦「こりや馬、鹿の兩人、沈黙せぬか」

「ハイ沈黙致します。併しお前さま等のやうに涙をこぼしての沈黙とは違ひますから、玉石混淆されては困りますで」

若彦「要らぬ口をたたくものぢやない」

馬、鹿は目を細うし、舌をべロツと出し、腮をしゃくつて蹲踞んで見せた。

高姫は涙を拂ひ、

「ア、兔も角一旦フサの國の本山へ歸りまして、トツクリと思案を致しまして其上に御返事をさして貰ひませう。サア黒姫さま、御暇乞ひをしようではございませぬか」

黒姫「玉照姫さまの御身の上はどうなさる。序に鄭重に御迎ひ申して歸つたら如何でせう」

紫姫「どうぞさうなさつて下さいませ。ナアお玉さま、貴方行つて下さいますか」

お玉「ハイ何事も惟神に任した妾、どうぞ宜敷きやうに御願ひ致します」

高姫「なんと仰有つて下さいませても、心が恥かしくつて玉照姫様を御世話さし

て戴いたただけの資格しかくがないやうに、守護神しゆごじんが申まをします。どうぞ此場このばは、これ限りぎにして下くださいませ」

若彦わかひこ「どうしても御受取おうけとり下くださらぬのですか。又また吾々われわれの願ねがひを諾きいてやらぬとの御ごり了やうけん簡けんですか。それはあまりぢやありませんか。又また吾々われわれの願ねがひを諾きいてやらぬとの御ごり了やうけん簡けんですか。それはあまりぢやありませんか。」

高姫たかひめ「なんと仰有おつしやつても暫しばらくの御猶豫ごいうよを頂いたきます。どうぞ大切たいせつに玉照姫様たまてるひめさまを御お世話せわして上あげて下くださいませ。萬々まんまん一素盞鳴いちすさのを大神様おほかみさまが此事このことに就ついて、貴方方あなたがたをお咎とがめ

になるやうなことがあれば、此この高姫たかひめがどんな責任せきにんでも負おはして頂いたきます。ア、玉照姫様たまてるひめさまどうぞ御機嫌ごきげんよう三五教あななひけうを御守おまもり下くださいませ。罪深つみふかき高姫たかひめ、御言葉おことばをおか

け申まをすも畏おそれ多おほうございませが、廣ひろき厚あつき大御心おほみこころに見直みなほし、聞直ききなほし下くださいまして罪深つみふかき吾々われわれどもを御許おゆるし下くださいませ。左様さやうならば御暇致おいとまいたしますよ」

黒姫くろひめ「もうお歸かへりですか」
高姫たかひめ「サア貴方あなたも歸かへりませう。玉照姫様たまてるひめさまにお暇乞いとまごひをなさいませ。紫姫様むらさきひめさま、青彦あをひこ

様さま、其外そのほか御一同様ごいちどうさま、突然とつぜん参まゐりまして、エライ御造作ござうさをかけました。一先ひとまづ本山ほんざんまで歸かへつて参まゐります。何分なにぶん宜よろしう願ねがひ申まをします」

紫姫むらさきひめ「ア、強たつてさう仰おつしや有れば是非ぜひはございませぬ。これも全まく妾等わたしらの行届ゆきとどかな
いからのこと、どうぞ悪あしからず思召おほしめし下くださいまして、將來しやうらい何分なにぶん宜敷よろしく御願おねがひ申まをし
ます」

馬公うまこう「是非ぜひともよろしう」

鹿公しかこう「私わたしも同じおなく是非ぜひともよろしう」

高姫たかひめ「サア金公きんこう、八公はちこう、飛行船ひかうせんの用意よういだ」

高姫たかひめ「一行いっかうは二隻にせきの飛行船ひかうせんに搭乗たふじやうするや否いなや、圓ゑんを描えがいて空中くうちうに驅かけ昇のぼり、西天せいてん

高たかく姿すがたを隠かくしたり。

ア、高姫たかひめ、黒姫くろひめは今後こんご如何いかなる行動かうどうに出いづるならむか。

(大正一一・五・七 舊四・一一 外山豊二録)

第九章 身魂の淨化（六五四）

心の暗の空晴れて、世界に鬼は梨の木、峠の巖に腰打掛け、雪雲の空を眺めて、雑談に耽る二人の男あり。

荒鷹「ア、思ひまはせば今年の春の初、鬼熊別の部下となつて、三嶽山の岩窟に數多の手下を引連れ、善からぬ事計りを得意になつて、自己保存は人生の本領だと思ひ詰め、利己主義の行動を以て金科玉條として居たが、まだ天道様は吾々を捨て給はざりしか、音彦、加米彦、悦子姫様の一行に救はれ、翻然と悟り、三五教に入信さして頂き、鬼熊別の本城に逆襲し、言向和さむと心力を盡して見たが、まだ鬼熊別の大將は、神の救ひのお綱が掛つて居なかつたと見え、吾々の熱誠なる言靈の忠告を馬耳東風と聞き流し、終には鬼雲彦の後を追うて何處ともなく遁走して了つた。假令三日でも同じ鍋【はだ】の飯を食つた閒柄だから、我々としては何處までも、誠の道に救はねばならないのだが、何處へお出でになつたか行衛は知れず、三五教へ這入つてから、此れと云ふ様な神様に御奉仕も出來ず、困

つたものだ。竹生島へ行つて見れば、英子姫様は神業を完成遊ばして、素盞鳴大
神様と共に、フサの國齋苑の御住居へお歸り遊ばした後なり、三五教の方々には、
散り散りバラになつて別れて了ひ、殆ど方向に迷ふ今日の有様、せめては高城山
の松姫でも言向和して、一つ功を立てねばなるまい………ナア鬼鷹」
鬼鷹「オーそうだ。此處も所は違ふが、ヤツパリ大枝山だ。あの向うに見えるは
確かに高城山だ。何時も悪神の邪氣に依つて黒雲が山の頂を包んで居たが、今日
は又どうしたものだ。何時にない立派な雲が棚引いて居るではないか。何でも三
五教の誰かが征服して、結構な神様を祀り、神徳が現はれて居るのではなからう
かな。萬一さうであるとすれば、結構は結構だが、吾々はモウ此自轉倒島に於い
て活動する所が無くなつた様なものだ。兔も角高城山を一度踏査して實否を探り、
萬々一三五教に歸順して居たとすれば、モウ仕方がない。どつと張り込んで此海
を渡り、龍宮の一つ島へでも往つて、一働きしようぢやないか」
荒鷹「オウそれが上分別だ。併し第一着手として、高城山の探險と出かけやうぢ
やないか」

鬼鷹おにたか 高城山たかしろやまに立派りつぱな雲くもが棚引たなびいて居ゐるが、あれ見みよ、眞西まにしに當あたつて又またもや彌仙みせんざ山の麓ふもとの樣やうに紫むらさきの雲くもが靨たなびいて居ゐるぢやないか。玉照姫たまてるひめさま樣さまに匹敵ひつてきした男神をがみさま樣さまが御ごし出現遊ゆつげんばしたのであるまいかなア。併しかし何なには兔とも角高城山かくたかしろやまへ打向うちむかひ、其次そのつきに紫むらさきの雲くもの出處でどころを調しらべる事こととしようかい。サアサア行ゆかううと板いたを立てた樣やうな坂道さかみちを下くだり、西にしへ西にしへと驅出かけだした。満目蕭然まんもくせうぜんとして地ちは一面いちめんの薄雪はくせつの白布はくふを被かぶつて居ゐる。仁王にわうの樣やうな足型あしがたを印いんし乍ながら、高城山たかしろやまの山麓さんろく、千代川ちよかはの郷さと、鳴石なきいしの傍かたはらまでやつて來きた。

荒鷹あらたか 一方いつぱうは樹木鬱蒼じゆもくうつさうとした箱庭式はこにはしきの小山こやまに、卯うの花はなの咲さいた樣やうに、白雪はくせつが梢こすえに止とまり、時ときならぬ花はなを咲さかせ、前まへは何なんとも知しれぬ綺麗きれいな水みづの流ながれた大堰川おほいがは、こんな佳いい景色けしきは大枝おほえの坂さかを越こえてこのかた、見みた事ことも無ない。一ひとつ此邊このへんで休息きうそくした上うへ、ボツボツと高城山たかしろやまに向むかふ事ことにしようかいう

鬼鷹おにたか 何なんだか妙めうな聲こゑがし出だしたぢやないか。別べつに人間にんげんらしい者ものも居を居ゐらず、獸けだものとても居ゐないやうだ。狐きつねや狸たぬきの足型あしがたは薄雪はくせつの上うへに残のこつて居ゐるが、併しかし狐きつねの聲こゑでもなし、人間にんげんの聲こゑでもなし、合點がつてんのいかぬ響ひびきがするぢやないか。兔とも角かく此處ここに大おほきな岩いは

がある。どこもかも薄雪だらけだが、此岩に限って一片の雪もたまつて居ない、さうして又カラカラに乾いて居る。幸ひ此岩の上で、楊柳觀音ぢやないが、一つ瞑目靜坐し心膽を鍊つて見たらどうだ」

荒鷹は打首肯き乍ら、平坦な巖の上にドツカと坐つた。

荒鷹「オイ兄弟、大變此岩は温かいぞ。お前も一寸此處に坐つて見よ」

鬼鷹「ヤア本當に温かい岩だなア。地上一面冷たい雪が降り、冷酷な世界の人情

は此通りと、天地から鑑を出して、俺達に示して御座るのに、こりや又どうした

ものだ。僅か一坪ばかりの此岩の上許りは、冷酷な雪もたまらず、春の様な暖か

みを帯びて居る。是れを見ても、どつかに暖かい人間も、チツとは残つて居ると

云ふ神様の暗示だらうよ」

忽ち膝下の平面岩は鳴動を始め、刻々に音響強大猛烈の度を加へて來た。二人

は驚いて足早に飛び下り、七八間此方に引き返し、岩石を見詰めて居た。忽ち岩

石は白煙を吐き出した。續いて紫の雲細く長く、白煙の中に棹を立てた様に天に

沖し、蕨が握り拳を固めたやうな恰好になつては、二三十間中空に消え、又同じ

く現はれては消え、幾回となく紫の圓柱が立昇り、生々滅々して居る。二人は「ヤアヤア」と聲を張り上げ驚くばかりであつた。猛烈なる大爆音は次第々々に低聲となり、遂にピタリと止まつた。白煙は依然として盛に立昇つて居る。此時金の冠を戴き、種々の寶玉を以て造られたる瓔珞を身體一面に着飾り、白き薄衣を着したる、白面豐頬の女神、眉目の位置と謂ひ、鼻の附具合と云ひ、唇の色紅を呈し、雪の如き齒を少しく見せ、ニヤリと笑ひ乍ら現はれ給うた。荒鷹「ヤア音に名高い川堰の鳴石であつたか。それとは知らずに御無禮千萬にも、吾々の汚れた體で踏みにじり、誠に申譯のない事を致したワイ。キツと鳴石の靈が現はれて、何か吾々に對して嚴しい御託宣を下されるのであらう。何はともあれお詫をするより仕方がない」

と荒鷹は薄雪の積もる大地にペタリと平太張つて、謝罪の意を表した。鬼鷹も同じく大地に齧伏し慄うて居る。忽ち虚空に音樂聞え、蓮の葉の様な大花辨がパラパラと降つて來た。四邊はえも云はれぬ芳香に包まれた。荒鷹は頭を地に附け乍ら、少しく首を曲げ、一方の目にて恐る恐る岩上の女神を眺めた。女神は二人の

美しく稚兒を左右に侍らせ、例の白煙の中に莞爾として立現はれ、白に稍桃色を帯びたる織手を差し延べて、此方の兩人に向ひ手招きして居る。

荒鷹「オイ鬼鷹、ソウツと頭を上げてあの女神を拜んで見よ。何だか吾々兩人に對して御用が有りそうだぞ」

此聲に鬼鷹はコワゴワ乍ら、女神の方に眼を注いだ刹那、鬼鷹は「アツ」と叫んで、又もや大地に頭を摺付けた。何時の間にやら兩人の體は何者にか引きずらるる様な心地し、以前の平岩の前に安着して居た。女神は淑やかに、

「荒鷹どの、鬼鷹どの、しばらくで御座つたなア」

此聲に兩人は一度に頭を擡げ、熟々と女神の姿を打眺め、腑に落ちぬ面色にて頭を搔いて居る。女神は二人の稚兒に、懷より麗しき玉を持たせ、何事か目配せした。二人の稚兒は兩人の前に進みより、小さき紫の玉を兩人の額に當て、コンコンと打ち込んだ。二人は「アイタタ」と云ふ間もなく、痛みは止まつた。二人の稚兒は忽ち女神の兩脇に復歸し、さも愉快げに笑つて居る。此時より荒鷹、鬼鷹の二人は何となく心穩かに春の様な氣分が漂うた。

女神は静に、

唯今より荒鷹、鬼鷹では有りませぬ。隆靖彦、隆光彦と名を與へます。どうぞ今後は誠の神人となつて、神業に参加して下さい。妾の顔を覚えて居ますか」

荒鷹はやつと安堵の態、

隆靖彦の名を賜はり、有難き、身に取つての光榮で御座います」

隆光彦「私の如き曇り切つた身魂に對し、隆光彦と御名を下さいましたのは、何ともお禮の申様が御座いませぬ。失禮乍ら貴神様は吾々と共に三嶽山の岩窟にお住居遊ばした丹州様では御座いませぬか」

女神は莞爾として首肯く。

隆靖彦「ア、是れで世界晴れが致しました。モウ此上は高城山の松姫を言向け和し、瑞の御靈の大神様の御神業に奉仕し、天地に蟠まる八岐の大蛇を言向け和す御神力は、十分に與へられた様な心持になりました。有難う御座います」

隆光彦も無言の儘、頭を下げ感謝の意を表示する。

隆靖彦「あなた様は今まで丹州と身を變じ、吾々の身魂を研く爲に、種々雑多と

御苦勞を遊ばした神様、どうぞ御名を現はし下さいませ」

女神「今は我名を現はすべき時にあらず。自然に貴方等の身魂に感得し得る所まで磨いて下さい。妾の素性が明瞭お分りになつた其時は、貴方等の身魂は天晴れの神人となられた時です。それまでは、あなた方の爲に懸案として暫く留保して置きますせう」

と云ふかと思れば、三柱の姿は煙となつて消えて了つた。鳴石は依然として小さき唸りを立てて居る。

隆靖彦「なんと不思議な事が有つたもんですなア。吾々に不思議な女神さまが現はれて、隆靖彦だとか、隆光彦だとか、身分不相應の神名を下さつたが、實際に於て責任を盡す事が出来るであらうかと、又一つ心配が殖えて来たやうだ」

隆光彦「そうだ、私も同感だ。併しあの女神様は何處となく丹州さまにソツくりだつた。お前もさう思つただらう」

隆靖彦「ヤア私はあまり勿體なくて、とつくりと顔を、ヨウ拜まなんだよ。何とはなしに目がマクマクして、面を向ける事が出来なかつた。そうして何だか心の

底から恥しくつて、自分の今迄の罪惡を照される様な氣がして、随分苦しかった。是れはヒヨツとしたら夢ぢや有るまいかなア」

隆光彦「ナニ、夢所か本當に顯はれ給うたのだ。斯うなつた以上は、層一層言行を慎んで立派な宣傳使にならなくちや、今の女神様に對して申譯が無からう。併し乍ら此の鳴石は依然として唸つて居るぢやないか。又々どんな神様が出現遊ばすか分らないよ。モウ暫く此處に祝詞を奏上して待つて居たらどうだらう」

隆靖彦「ヤア此上立派な神様に出られてたまるものかい。モウ此れで結構だ。恥かしくつて仕方がない。サアサア早く高城山へ行かう」

二人は鳴石に恭しく禮拜し、足早に大川の堤を傳つて上り行く。忽ちドンと突き當つた二人の男、驚いて、

二人「ヤアこれはこれは誠に無調法致しました。あまり俯むいて道を急いで居ましたので、女神様の御通りとも知らず、衝突を致しまして、申譯が御座いませぬ。どうぞお許し下さいませ」

隆靖彦「ヤアお前は、馬公に鹿公ぢやないか。エライ勢ひで何處へ行く積りぢや」

馬公「ハイ吾々の大將、紫姫、青彦の兩人さま、大失敗を演じ、聖地にも居れないと云ふ立場になつて苦んで居られます。私等兩人はあまりお氣の毒で、見て居る譯にも行かず、そつと館を飛び出し、江州の竹生島へ參つて、英子姫様にお目にかかり、お情を以て、素盞鳴大神様に兩人のお詫をして頂かうと思ひ、取る物も取敢ず參りました。どうぞ丹州さま、何とか、あなたもお力添をして下さいませぬか、お頼み申します」

隆靖彦「私は丹州さまぢやない。お前さんと一緒に、鬼ヶ城の言靈戦に向つた大悪人たりし、荒鷹で御座いますよ」

馬公「モシモシ丹州さま、ソラ何を仰有います。眉目清秀、嚴として冒す可らざるあなたの御容貌、女神の姿に化けて居らつしやるが、適切りあなたは擬ふ方なき丹州様、そんな意地の悪い事を仰有らずに、氣を許して、打解けて下さいな」
鹿公「ヤア不思議だ。此處にも丹州さまそつくりの方が又現はれた。一目見た時から變つたお方ぢやと思つて居たが、ヤツパリ神様の化身で御座いましたか。どうぞ唯今申した通りの始末ですから、宜しく御神力を以てお助け下さいませ」

隆光彦「イエイエ決して決して、私は丹州さままでは御座いませぬ。荒鷹の兄弟分鬼鷹と云ふ、三嶽山の岩窟に於て、悪ばかり働いて居つた男で御座いますよ」

馬、鹿「なんと仰有つても、鬼鷹、荒鷹の様な粗雑な容貌ぢや有りませぬワ。彼奴ア、一旦改心はしよつたが、又地金を出して、どつかへ迂路つき、此頃は鬼雲彦や鬼熊別の後を追うて、悪の道へ逆轉旅行をやつて居るだらうと、吾々仲間の評定に上つて居る位な男です。そんな善悪不可解の筒井式の男の名を騙つたりなさらずに、本當の事を言つて下さい。私達は千騎一騎の場合で御座います」

隆靖彦「世間の眼識は違はぬものだなア。何程改心してもヤツパリどつかに、副守が割據して居つたと見えて、三五教の御連中からは、今、馬公、鹿公の言つた様に見られて居つたのだなア。アア仕方ないものだ。どうぞしてあの時の姿になつて、此兩人の疑を晴らしたいものだ。斯うなると、麗しき容貌になつたのが、却て有難迷惑だ。ナア鬼鷹否々、隆光彦さま……」

隆光彦「ア、さうですなア。併し、馬公さま、鹿公さまにまで疑はれる程、靈魂が向上し、體の相貌までが變つて來たと云ふ事は、實に尊いものだ。ヤツパリ人

閒は靈魂が第一だ。……モシモシ馬さま鹿さま、決して嘘は申しませぬ。たつた今、何とも知れぬ立派な女神様から、玉を頂いたが最後、斯んなに變化して了つたのだ。名も隆靖彦、隆光彦と頂いたのだが、つい今の先まで依然として、荒鷹、鬼鷹の姿で居つたのだ。どうぞ疑を晴らして下さい」

馬、鹿の二人は疑團の雲に包まれ、兩人の姿を頭の上から足の爪先まで、念入りに見詰めて居る。

□ バラモン教の總大將

鬼雲彦の部下となり

三嶽の山の岩窟に

心も荒き荒鷹や

生血を絞る鬼鷹と

現はれ出でて四方八方の

老若男女を拐はかし

無慈悲の限りを盡したる

鬼熊別と諸共に

大江の山や鬼ヶ城

三嶽の山に山砦を

構へて住まへる折もあれ

天津御空の雲別けて

降りましたか地を掘りて

現あらはれましたか知しらねども 何なんとはなしに威ゐげん嚴げんある

丹たん州しゅうさまがやつて來きて 俺わしの乾こぶん兒ぶんにして呉くれと

頭かしらを下さげて頼たのまれる 二ふたり人は素もとより神かみならぬ

身みの悲かなしさに丹たん州しゅうを 奴どれい隸れいの如ごとく酷こき使つかひ

紫むらさき姫ひめの主しゅ従じゆを ウマウマ岩いはや窟くに騙だまし込こみ

馬うま公こう、鹿しか公こう二ふたり人をば 地ぢ獄ごくに等ひとしき岩いは穴あなへ

情なさけ容よう赦しゃも荒あ縄なはに 縛しばつてヤツと放ほり込こみし

天てん地ち容いれざる大だい惡あくの 罪つみをも憎にくまず三あ五あなの

神かみの教をしへの宣せん傳でん使し 音おと彦ひこ、加か米めい彦ひこ現あらはれて

悦よし子この姫ひめを守まもりつつ 深ふかき罪つみをば差さし赦ゆるし

神かみの教をしへに導みちびきて 忽たちまち變かはる神かみ心こころ

人ひとを惱なやめる鬼おにヶ城じやう 惡あく魔まの砦とりでに立たち向むかひ

聞きくも芽め出でたき言こと靈たまの 清きよき戦いくさに參さん加かして

神かみの尊たふとき事ことを知しり 三あ五あな教なひけうの神かみの道みち

四方の國々弘めむと
心こころを配くばる折柄をりからに

彌仙の山の山麓さんろくに
神かみの知しらせか紫むらさきの

雲立昇る麗うるはしさ
吾々二人は何なんとなく

雲に引ひかるる心地こちして
木この花はな姫ひめの齋まつりたる

御山の麓ふもとに來きて見みれば
豈あにはか計からむや丹州たんしゅうの

威嚴おげん備そなはる御姿みすがたに
再ふたび驚おどろき畏かしこみて

踵きびすを返かへし須知しゆち山の
峠たうげの上うへに來きて見みれば

常彦つねひこさまや瀧たき、板いたの
二人ふたりの姿すがたに驚おどろきつ

一言二言ひとことふたこと云いひかはし
丹州たんしゅうさまの仰あふせをば

畏かしこみ仕つかへ東路あづまぢを
指さして山坂やまさか打うち渉わたり

荒波あらなみ猛たける琵琶びばの湖うみ
英子ひでこの姫ひめの隠かくれます

竹生ちくぶの島しまに往いて見みれば
藻も拔ぬけの殻からの果敢はなさに

駒こまの首かしらを立たて直なほし
彼方あちら此方こちらと彷徨さまよひつ

吾わが信しん仰かうも堅木かたぎ原はら
足あし竝なみ揃そろへて沓掛くつかけの

郷を踏み越え懺悔坂

漸く登り梨の木

峠に立ち眺むれば

遙に見ゆる西の空

高城山の頂きに

五色の雲の棚引きし

其光景に憧憬れつ

薄雪踏み締め来て見れば

風の音高く鳴石の

上より昇る白煙

また立昇る紫の

雲に心を奪はれつ

両手を合せ拜む内

煙の中より現はれし

莊嚴無比の女神さま

二人の稚兒を伴ひて

吾れにうつしき寶玉を

授け給うと見る間に

鬼をも欺く醜體の

二人は忽ち此通り

白衣の袖に包まれて

容貌忽ち一變し

隆靖彦や隆光彦の

教の司と名付けられ

やうやう此處に来て見れば

顔見覺えた馬公や

鹿公二人に巡り會ひ

俄に變る吾姿

如何程言葉を盡すとも 諾なひまさぬは道理なれ

ア、然り乍ら然り乍ら 吾れはヤツパリ荒鷹に

鬼鷹二人の向上身 どうぞ疑晴らしませ

人は心が第一よ 靈魂研けば忽ちに

鬼も變じて神となり 心一つの持方で

神も忽ち鬼となる さは然り乍ら人の身の

如何に靈魂を研くとも 神の力に依らざれば

徹底的に魂は 清まるものに有らざらむ

自力信仰もよけれども 唯何事も人の世は

他力の神に身を任せ 心を任せ皇神の

救ひを得るより途はない 人の賢しき利巧もて

誠の道を究めむと 思うた事の誤りを

今漸くに悟りけり 吁馬公よ鹿公よ

人間心を振棄てて 唯何事も惟神

神かみの他た力りきに打うち任まかせ 誠まことの信しん仰かう積つむがよい

吾われは是これより高たか城しろの 山やまの麓ふもとに現あらはれし

ウラナイ教けうの宣せん傳でん使し 松まつ姫ひめさまを言こと向むけて

誠まことの道みちに救すくはむと 思おもひ定さだめて進すすみ行ゆく

紫むらさき姫ひめや若わか彦ひこの 二ふた人たりの心こころは察さつすれど

人にん間げん心こころの如い何かにして 救すくふ手て段だてが有ありませうか

魂たまを研みがいて今いまは唯ただ 花はな咲さく春はるを待まてばよい

神かむ素す盞さん鳴の大神おほかみの 無む量りやう無む限げんのお慈じ悲ひ心しん

如い何かでか見み捨すて給たまはむや ア、惟かむ神ながら々かむ々ながら

御み靈たま幸さちはひましまして 紫むらさき姫ひめや若わか彦ひこに

如い何かなる罪つみの有ありとてても 心こころ平たいらに安やすらかに

直な日ほに見み直なし聞き直なし 宣のり直なしませ素す盞さん鳴の

大おほ神かみ様さまに祈ねぎ奉まつる 朝あさ日は照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも 假た令へ大だい地ちは沈しづむとも

誠まこと一つの麻柱あなひの

神かみの救すくひは目まの前あたり

心こころを痛いため給たまふまじ

吾々われわれ二人ふたりは先頭せんとうに

馬公うまこう、鹿公しかこう兩人りやうにんよ

吾等われらと共に言靈ことたまの

太ふとしき功績いさをを立て給たまへ

一時いちじも早はやく片時かたときも

神かみは汝なんぢと俱ともにあり

深ふかしと聞きけば高城たかしろの

悪魔あくまの勢強いきほひくとも

常世とこよの暗やみを照てらし行ゆく

身みの上うへこそは樂たのしけれ

御靈みたま幸さちはひ坐ましませよ

道みちを貫つらぬく吾々われわれは

必かならずともふたりともに二人共

女神めがみの姿すがたと現あらはれし

高城山たかしろやまに向むかひ行ゆく

執着しふちやくしん心を振ふり棄すてて

清きよき戦いくさに加くははりて

いざいざさらば、いざさらば

疾とく速すみけく参まゐりませう

神かみの恵めぐみは海うみよりも

山やまは如何いか程ほど嶮さかしとも

神かみの光ひかりを身みに受うけて

三五あななひけう教われの吾々われわれが

ア、惟かむながら神々かむながら

と宣傳歌を歌ひつつ、一行四人は一步々々、ウラナイ教の松姫が館を指して近付きぬ。

馬公「モシモシ最前のお歌に依つて、私達もスツカリと信仰の妙味と効果が、心底から諒解出来ました。併し乍ら吾々兩人は、紫姫様のお供を致し、比沼の眞奈井の貴の寶座へ參拜の途中、あなた方に拐はかされ、其お蔭にて尊き三五教の信者となり、御主人の紫姫様は、世にも尊き宣傳使とまでお成り遊ばし、吾々兩人は晝夜感涙に咽び……アア吾々主従は何とした果報者だ……と喜んで居りました。が、計らずも紫姫様は若彦さまと共に、大神様の御不興を蒙り、少しの取違り、今は三五教を除名され、神様に對しては申譯なく、其罪萬死に値すると言つて、日夜紫姫様のお歎き、家來の吾々兩人、これがどうして見て居られませう。そこで吾々は紫姫様にお暇を願ひ、一つの功名を立て、大神様に誠を現はし、其功に依りて御主人の罪を赦して戴かうと思ひ、それとはなしにお願致しましたが、どうしても紫姫様は吾々に暇を下さらないので、血を吐くやうな思ひをして、心にも有らぬ主人に對し罵詈雑言を逞しうし、ヤツと勘當されて此處までやつて來

ました。モウ斯うなる上は、假令失敗を致さうとも、御主人の御身には何の關係も及ばさないなり、萬々一吾々が功名手柄を現はした時には御主人様に歸參をお願致し、さうして紫姫様の名譽を回復したいばかりで、兩人申合せ、何とか良い御用をして見たいと思つて、此處まで參りました。併し乍らあなたは既に高城山を言向け和さむと御決心なされた以上は、吾々はお供の身の上、假令成功を致しましても、それが御主人様のお詫の材料にはなりません。あなたは既に其れだけの御神徳をお頂きになつたのだから、此言靈戰はどうぞ、私に譲つて下さいませまいか」

鹿公「いま馬公の申した通りの事情で御座います。どうぞ、吾々の切なる胸中をお察し下さいまして、今回は吾々にお任せ下さいませ。萬々一失敗を致しました時は、第二軍として、あなた方御兩人が、弔戦をやつて下さいませぬか」

と涙をハラハラと流し、眞心を面に現はして頼みある。

隆靖彦「吾々も入信以來、一つの功勞もなく、せめては頑強なる松姫を言向け和し、神様にお目にかけたいと思つてやつて來たが、武士は相身互だ。それだけの

事情を聞いた以上は、強つて斷る譯にも行かぬ。ナア隆光彦さま、此言靈戰は馬公、鹿公に手柄を譲りませうか。己の欲する所は人に施せとの御神勅を思ひ出せば、無情に撥ねつける譯にもゆきませぬまい」

隆光彦「あなたの仰有る通りです。馬公、鹿公、御苦勞乍ら華々しくやつて見て

下さい。私は彼の川縁の景色の佳い所で、あなたの武者振を拜見致します」

馬、鹿「それは早速の御承諾、有難う御座います。何分身魂の磨けぬ吾々の言靈

戦、蔭乍ら御保護を御願ひ致します」

隆靖彦「天晴れ功名手柄を現はして下さい」

隆光彦「大勝利を祈ります」

馬、鹿の兩人は「有難う」と感謝の意を表し、二人に別れ、松姫の館を指して

イソイソ進み行く。

(大正一一・五・八 舊四・一二 松村眞澄録)

第一〇章 馬鹿正直（六五五）

雲を抜き出てそそり立つ
高城山の峰傳ひ
松樹茂れる神の山
木の間に閃く十曜の神紋
國治立の大神や
埴安神や木の花の
姫の命の御教を
四方に傳ふるウライの
神の教の出家と
鳴り響きたる神館
五六七の御世を松姫が
朝な夕なに眞心を
こめて祈りの言靈に
百の神たち寄り集ひ
醜の教と云ひ乍ら
御國を思ひ世を思ふ
其御心を諾なひて
守らせ給ふぞ尊けれ。

松姫館の表門には、
受付兼門番の溜り所が設けられてある。
龍若、
熊彦、
虎彦

の三人は、【あどけ】なき話に冬の短き日を潰して居る。

龍若「此春頃は陽氣もよし、日々木の芽を萌く様に、求道者が踵を接し、随分吾々

も受付や門の開閉に繁忙を極めたものだが、春逝き、夏過ぎ、秋去り、冬来る今

日此頃、雪は散らつく、凧は吹く、梢は眞裸となり白い白い花が咲く様になつた

様に、ウライナイ教の此館も、一葉落ちて天下の秋を知る處か、全葉落ちて寂寥極

まる天下の冬となつて來たぢやないか。如何に榮枯盛衰は世の習ひだと云つても、

ウライナイ教の凋落と云つたら、實に哀れ儚なき有様だ。我々は斯うチヨコナンと

して用も無いのに、借つて來た狎の様にして居るのも、何だか氣が利かない。松

姫様に對しても氣の毒な様な氣がしてならないワ。嗚呼ウライナイ教にも、冷酷無

殘の冬が來たのかなア」

熊彦「それが身魂の恩頼だ。冬が有りやこそ春が來るのだ。神様は引懸け戻しの

仕組ぢやと仰有るぢやないか。海の波だつて風だつて其通りだ。七五三と風が吹

き、波は立つ、ウライナイ教も此春頃は七の風が吹き、七の波が立つて居た。夏に

なると五の風や五の波、秋の末から冬のかかりにかけて、三の風が吹き、三の波

が打つて居る様なものだ。又世の中の歴史は繰返すものだから、花咲く春は屹度
ウラナイ教に見舞うて来るよ。天下の春にウラナイ教計り何時迄も、冬の冷酷を
眺めて居る様な事はあるまい、さう悲觀したものでぢやないよ

虎彦「熊公、随分お前は樂觀者だなア。蜘蛛が巢をかけて、蟲が引つかかるのを

待ち受ける様なやり方では何時迄経つても、ウラナイ教に春は見舞うて呉れない。

矢張能ふ限り最善の努力を費やさねば駄目だ。運と云ふものは手を束ねて待つて

居たつて、来るものではない。矢張こちらから、活動を開始せねばならないぢや

ないか。それに此頃は館の松姫様も、宣傳使の布教をお止めなさつたぢやないか。

一體吾々は諒解に苦まざるを得ないのだ

龍若「吾々一同の宣傳使が御神慮に叶つて居ないのだから、十分に此靜かな間に、

身魂を研き上げ、御神慮を悟り、本當の神様の大御心を體得して、神様から是れ

なら宣傳をしにやつても差支へ無いと御認めになる迄、吾々は修行をさされて居

るのだ。月日の駒は再び歸り來らず、一日再び晨成り難し、此機會に、吾々は充

分の魂磨きをやつて置くのだ。今迄の様な脱線だらけの宣傳をしたつて、世の中

を益々混亂誑惑させるだけだ。一かど立派な神様の御用を勉めた積りで、お邪魔
許りして居たのだから、神様が戒めの爲に、此頃の様に宣傳もお止めなさつたり、
求道者もお寄せにならないのだらうよ。吾々一同の者が、本當の誠の神心が解つ
たならば、宣傳にもやつて下さらうし、因縁の身魂も寄せて下さるだらう。神様
は何處から何處迄抜け目が無いからなア
熊彦「それに就いても三五教は比較的隆盛ぢやないか。高姫さまや、黒姫さまの
大頭株が得意の神算鬼智を發揮して、玉照姫様をウライナイ教に奉迎せむとなさつ
たが、薩張三五教の紫姫や、青彦の奴に裏をかかれて馬鹿を見たと云ふのだから、
油断も隙もあつたものぢやない。それに又合點のゆかぬは松姫さまぢや。青彦の
裏返り者の女房お節が、此間から猫撫で聲を出しよつて、旨く松姫さまに取り入
り、今では奥の間の御用を務めて居るぢやないか。又黒姫の二の舞を演じてアフ
ンとなさる様な事はあるまいかなア。何程、清濁併せ呑む大海の様な松姫さまの
御心でも、お節の様な危険人物を奥に住み込ませて置くのは、爆裂弾を抱へて寝
る様なものだ。此位な分り切つた道理がどうして松姫さまは氣が付かぬのだらう

か

虎彦「何は免もあれ、權謀術數至らざるなき、素盞鳴尊の惡神の一派だから千變萬化に身を賣し、大膽不敵にも、女の分際としてこんな所へ、恐れ氣もなくやつて來居つた危険性を帯びた化物だから、一つでもお節の缺點を發見したら、それを機會に松姫の大將が何と仰有つても、吾々は職を賭してお諫め申し、お節をおつ放り出さねばなるまいぞ」

龍若「それもそうだ。女でさへも三五教へ這入つた奴は、あれだけの膽力が据わつて居るのだから、男は尚更手に合はぬ奴計りだ。又何時三五教の奴がやつて來居つて、魔窟ヶ原の岩窟の二の舞ひをやらうと掛るかも知れないから良く氣を付けて、三五教の連中だつたら、此門内へ一足でも入れさす事は出來ないぞ。箒で掃出すか、それも聞かねば六尺棒で袋叩きにしても懲らしめてやらねば、ウラナイ教は何時根底から顛覆さされるやら分つたものぢやない。松姫さまは狼であらうが、虎であらうが、老若男女の區別なく、物食ひがよいから困つて了ふ。腹の中へ毒藥を呑み込んで平氣で居るのだから實に劍呑千萬だ。もうこれからは、一々

出て来る奴を誰何して、身魂を調べた上でなければ、通行させる事は出来ないぞ。此門の出入を許否するは吾々一同の権限でもあり大責任だから、今後吾々は三角同盟を形造り、結束を固うして、毛色の變つた怪しき人物は、斷乎として通過させない事にして締盟仕様ぢやないか、日の出神の生宮でも龍宮の乙姫さまの生宮でも、月夜に釜を抜かれた様な馬鹿らしい、悲惨な目に遭はされ給ふのだから、餘程警戒を嚴重にせなくては國家の一大事だ。此門一つが危急存亡の分るる所だからなア」

斯かる處へ馬、鹿の兩人、潛り戸をガラガラと開けて這入り來たり。

熊彦「ヤア、門番の吾々に何の應答もなく、潛り戸を開けて這入つて來るとは、怪しからぬぢやないか、サア出て下さい」

馬公「ヤアこれは誠に失禮を致しました。餘り森閑として居たものですから、貴方等が厳しい御装束をして門を守つて御座るとは露知らず、心急く儘ついお應答もせず御無禮致しました。何卒此不都合は、神直日大直日に見直し聞直し下さいまして通過させて下さいませ」

ない。トツトと歸らぬか」

馬公「如何にも吾々の名は馬、鹿、四足に間違ひありませんが、此御門を御覽なさい、これも矢張四足ぢやないか。それにお前の名も、龍とか熊とか、虎とか云うぢやないか。矢張四足だらう。四足門を、四足が守るとは、餘程よいコントラストだ、アハ、ハ、ハ」

虎彦「トラ何を吐しやがるのだ。それ程コントラストが望みなら、貴様の薬罐を此棍棒でコントラストと叩き付けてやらうか」

と云ふより早く傍の六尺棒を以て、馬、鹿の前頭部を二つ三つ撲り付けた。

鹿公「随分ウライナイ教は、手荒い事をなされますなア」

虎彦「何、ウライナイ教が手荒い事をするのだ無い、貴様の悪心が此虎彦をして、貴様を打たしめるのだ。心の虎が身を責めると云ふのは此事だ。名詮自性、馬鹿な事を云つて通過を懇望するものだからそれで御注文通り、棍棒を頂かしてやつたのだ。今後は謹んで、斯様な亂暴な事を致すでないぞよ。馬、鹿の守護神、勿體なくも、虎彦さんの肉體を使つて馬鹿にして「けつ」かる、アハ、ハ、ハ」

馬公「重々私が悪う御座いました。何卒御勘辨下さいませ」

熊彦「悪いと云ふ事が分つたか。悪かつたら勘辨せい、と云つて、それで勘辨が

出来ると思ふか。結構な御神門を、四足門だの、吾々三人を四足だのと失敬千萬

な、劫託を吐きやがつて、何だ、三五教はそんな無茶な身勝手な理屈は通るか知

らぬが、誠一途のウライ教ではそんな屁理屈は通らぬぞ」

鹿公「イヤもう、通つても通らひでも結構です、吾々の目的は此門を通りさへす

れば宜いのだ。黙つて門を開けたのは誠に濟まないけれど、諺にも「桃李物云は

ず」と云ふ事がある。それだから、物靜かに敬虔の態度を以て通行したのです」

虎彦「エ、ツベコベと、よう囀る奴だ。愚圖々々吐すと、鬼の蕨がお見舞ひ申す

ぞ」

と骨だらけの握拳を固めて、鹿の顔を二つ三つガツンとやつた。

鹿公「アイタ、随分氣張り應があります哩」

虎彦「定つた事だ、斯う見えても、朝から晩迄、劍術に柔術で鍛え上げた百段の

免状取りだ。全身鐵を以て固めた、虎彦さまの鐵身、鐵腸、槍でも鐵砲でも持つ

て来て、撃つなど、突くなとやつて見よ。鋼鐵艦にブトが襲撃する様なものだ、

アハ、ハ、ハ、

と得意の鼻を蠢かし、四角な肩を不恰好に腰迄揺つて嘲笑する。馬公、鹿公は堪忍袋の緒が今やプツリと切かけた。エ、残念だ、もう此上は善も悪もあつたものかい、三人の奴を片ツ端から打のめし、三五教の腕力を見せてやらうか。イヤイヤ、なる勘忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪忍だ。譯の分らぬ下劣な奴を相手にしての争ひは自ら好んで人格を失墜するのみならず、延いては、大神様の御心に背き、三五教の名譽を毀損する生死の境だ。假令叩き殺されても柔和と誠を以て、彼等悪人を心の底より、改心させるのが吾々信者の第一の務めだ。國治立の大神様や素盞鳴大神様の御事を思へば、これ位の口惜残念は宵の口だ。怒りに乗じ手向ひすれば、一時の胸は治まるだらうが、叩かれた者は、安樂に夜分も寝られる、叩いた者は夜分に寝られぬといふ事だ。嗚呼、何事も大慈大悲の大神様の深遠なる恵の鞭だ。吾々は大神様の試鍊を受けて居るのだ。紫姫様のお身の上に関する様な失敗を演じては濟まない。と、馬、鹿兩人は一度に、心中の光明に照

されて、嬉し涙をタラタラと流し大地にカチリ付いて神恩を感謝して居る。

虎彦「オイ馬、鹿、どうだ、往生致したか。初めの高言に似ずメソメソと泣面搔

きやがつてチヨ口臭い。女郎の腐った様な奴だなア。貴様は何時の間にか、鞆丸

を落して来やがつたのだらう。オイ熊彦、貴様は馬の鞆丸を検査するのだ。俺は

鹿の鞆丸を實地檢分してやらう」

と目と目を見合せ兩人の尻を引捲り、三つ四つ臀部を叩き、

虎彦「ヤア腰抜けだと思つたら、矢張此奴の體は女に出来て居やがる。骨盤が非

常に大いぞ。ヤア長い鞆丸を垂らして居やがる」

とギョツと握り、無理無體に後向けに引張つた。

馬、鹿兩人は鞆丸を引張られ痛さに堪らず、後向けにノタノタと這ひ乍ら、門

の外へ引摺り出された。

熊彦、虎彦兩人は、手早く門内に驅入り、潛り戸の錠前を下ろし、

熊、虎「アハ、ハ、ハ、態ア見やがれ、ノソノソとやつて来ると又こんなものだぞ。

早く歸つて三五教の奴に、酷い目に遭はされましたと報告しやがれ」

馬公「モシモシ、それは餘りで御座います。開けて下さいと無理に申しませぬ、何卒、馬、鹿の兩人が、門の外迄参りました、と松姫さまに報告して下さいませ」
虎彦「報告すると、せぬとは、吾々の自由の權利だ。犬の遠吠の様に、見つともない、門の外で、ワンワン吐すな」
鹿公「左様で御座いませうが、どうぞ、何かのお話の序に、一言でも宜しいから、仰有つて下さいませ」
虎彦（大きな聲で）「喧しう云ふない。貴様が言つて呉れなと云つたつて、此手柄話を黙つて居る馬鹿が何處にあるかい。ウラナイ教の邪魔計り致す、三五教の馬、鹿の兩人の鞆丸を掴んで、門外におつ放り出してやつたと云ふ、古今獨歩、珍無類の功名手柄を包み隠す必要があるか、縁の下の舞は、我々の取らざる所だ、一時も早く歸らぬか、愚圖々々致して居ると、藥罐に熱湯を浴びせてやらうか。シート、シー、こん畜生ツ、アハ、ハ、ハ。是れで俺も日頃の鬱憤が晴れ、溜飲が下つた。サアこれから、松姫様に申上げて喜んで頂かう、さうすれば又、御褒美に御神酒の一升もお下げ下さるかも知れぬぞ、オホ、ハ、ハ、ハ」

馬公「オイ鹿公、随分結構な神様の試練に遭つたぢやないか。ようお前も辛抱して呉れた。俺は、お前が短氣を起しはせぬかと思つて、どれだけ胸を怯々さして心配したか知れなかつたよ。それでこそ俺の親友だ、有難い、此通りだ、手を合して拜むワ」

と涙を瀧の如くに流し男泣きに泣き沈む。

鹿公「そうだな、本當に結構な御神徳を頂いた。これで俺達も、餘程、身魂に力が出来て胴が据わつた。身魂に千人力の御神徳を與へて下さつた。ア、神様、あなたの深き廣き御恵み、身に浸み渡つて有難う感謝致します」

と嬉し涙に掻きくれる。

馬公「オー鹿公、よう云うて呉れた。嬉しい」

と、「しがみ」付く。鹿公も亦、馬公の體に「しがみ」付き、互に抱き合ひ、忍び泣きに泣いて居る。

秋の名残りの柿の實、只二つ、冬枯れの梢に淋しげにブラ下つて居る。

凧に煽られて、鳥の雌雄連れは忽ち此柿の木に羽を休め、悲しさうに可愛い可

愛いと啼き立てる。

嗚呼此結果は、如何なるならむか。

(大正一一・五・八 舊四・一二 藤津久子録)

第一章 變態動物(六五六)

書院造りのこつてりとした、餘り裝飾の施して無い瀟洒たる建物の中に、三十路を越えた一人の女と、二十前後の優しい女、桐の丸火鉢を中に「ひそ」ひそと何か囁き話を始めて居る。

お節「松姫様、春の景色も宜敷う御座いますが、かう薄雪の溜つた四方八方の景色、この苔蒸した庭から見渡す時の美しさは又格別で御座いますな。満目皆銀の蓆を敷き詰めたやうに、それへ日輪様の御光が宿つてきらきらと反射して居る所は恰で玉を敷き詰めたやうですなア、荒金の土を御守護遊ばす神素盞鳴大神の大

御心は、此景色のやうに一點の塵もなく汚れもなく、實に瑞々しい御靈で御座いませう」

松姫「左様です、此雪の野邊を眺めますと、妾達の心迄、「すがすがしうなつて來ます。貴女のお國は此邊とは違つて雪も深く、今頃は嘸綺麗な事で御座いませう、何事も天地の合せ鏡と云つて、國魂の清い所は又それ相當に清い美しい景色が天地自然に描き出されるものです、私も一度比沼の眞名井の珍の寶座に參拜したいと思つて居ますが、何分大任を負はされて居ますので、一日も館をあけて置く譯にもゆかず、實に神様のお道は廣いやうで、窮屈なもので御座います。お節さま、貴女はこの夏の初め、魔窟ヶ原の黒姫さまの方へお越しになつて以來、俄にお心變りがして三五教へ後戻りをなさつたさうぢやが、三五教とウラナイ教は何う違ひますか」

お節「ハイ誠にお恥かしい事で御座います、心にちつとも根締めが無いものですから、風のまにまに弄ぶられて、つい彼方此方と迂路つき廻りました。併し乍ら何方の教も實に結構だと思ひます、神様は元は一株、三五教だとかウラナイ教だ

とか、名稱は分かれて居りますが、尊敬する誠の神様に些つとも變りはありませぬ、唯教を傳ふる人々の解釋に淺深廣狹の別があるのみです。併し乍ら人間と致しましては何事も神様にお任せするより仕方がありません、此世をお造り遊ばして人民を晝夜の區別なくお守り下さる神様を念じさへすればよいのです、教が高遠だとか、淺薄だとか云ふのは人間の解釋の如何によるので、神様御自身に對しては何の關係も無からうと思ひます』

松姫「其お考へなれば何故ウライナイ教へお出でになりましたか、貴女の御主人はいまだに三五教の宣傳使を勤めて居られるではありませんせぬか。」「二世契る夫婦の中も踏みてゆく道し違へば憎み争ふ」と云ふ道歌がありましたねエ、夫は東へ妻は西へと云ふやうな信仰のやり方はちと考へものですよ、信仰の道を異にする時は屹度家内は治まりますまい、夫唱婦従と云うて女は夫に従ふべきものたる以上、青彦さまの奉じ給ふ三五教を信奉なさつた方が、御家庭の爲めよいぢやありませんか、但青彦さまを貴女の奉ずるウライナイ教へ歸順させるとか、どちらか一つの道にお定めなさつたらどうでせう』

お節「實の所は私がこれへ参りましたのは、貴女に聞いて貰ひ度い事があるからで御座います、貴女は三五教のどの點が悪いと思召すか」

松姫「別に私としては彼是申上げるだけの權利も知識もありませぬ。併し乍ら今の三五教は變性女子の御靈が混入して、變性男子の教にない種々のものが輸入されて居りますから、此儘にして置けば折角の男子の御苦勞も水の泡になつて、天下國家の爲に由々敷一大事と、男子の系統の高姫さまが御心配遊ばし、止むを得ずウライナイ教をお立てなされたのですから、ならう事なら三五教の方々も一つ考へ直して頂いて、本當の教を立てて貰ひ度いものです」

お節「變性女子の御靈の素盞鳴尊様の教はお氣に入らぬのですか」

松姫「何だか蟲が好きませぬ、どこかに物足らぬ所があるやうで御座います、合縁奇縁と云うて信仰の道にも向、不向がありましたな」

お節「さう致しますと貴女は此頃の高姫様や、黒姫様の御意中はお分りになつて居ないのでですか」

松姫「イヤ、うすうす承知致して居ります、何うかするとお二人様は怪しくなつ

て來ました、やがて三五教へお歸りになるのでせう、併し乍ら私としては、さうくれくれと掌返したやうに軽々しく、吾精神を玩弄物にする事は出来ませぬ」

お節「さうすると貴女の師匠と仰ぐ高姫様や、黒姫様の御命令でもお聞きなさらぬお考へですか」

松姫「假令高姫さまが顛覆なされても、私は最後の一人になる所迄ウライ教を立てて行きます。師匠も大切だがお道も大切で、お道が大事か、師匠が大切か、よく考へて御覽なさい、それだと申して師匠に背くと云ふ心は露程も持ちませぬが、止むを得ない場合には矢張本末自他公私の區別を明かにするため、ウライ教の孤城を死守する考へで御座います」

お節「さう聞きますと貴女は何處迄もお固いのですなア」

松姫「岩にさへも姫松の生える例がある。一心の誠は岩でも射貫くと云ひます。私の鐵石心は如何なる砲火も威力も動かす事は出来ずまい、これが私の唯一の生命ですから誰が何と云つても「ビク」とも致しませぬよ。槍でも鐵砲でも梃子でも棒でも、いつかないつかな動くやうな脆弱な御魂ぢやありません、そんな

動搖するやうな信仰なら初めからしない方がよろしい、お節さまが私に對して何程婉曲に熱心にお勧め下さつても駄目ですから、何卒是限り御親切は有難う受けますが、もう云つて下さいませぬ。人は柔順と忍耐と誠さへ徹底的に守つて居れば神様は守つて下さいます。教派の如何にかかはるものぢやありませんか」

斯く二人の話す折しも、慌ただしく駆け来る門番の熊彦、虎彦二人、

熊彦、虎彦「松姫様に申し上げます、只今大變な事が出来致しました、それはそれは、小氣味よい大勝利です、何卒お喜び下さいませ」

松姫「オ、お前は熊公と虎公さま、エライ血相をして慌だしく何事ですか」

虎彦「貴方も御存じの通り、ウライナイ教の目の上の瘤仇敵、素盞鳴尊の惡神の教

を奉ずる三五教の木端武者、馬、鹿と云ふ馬鹿面した二人の奴がやつて來まして、御免とも何とも云はず、潛り門を開き、吾々の門番に無斷で、「すつ」と奥へ通

らうと致します。貴女が今迄仰有つたでせう、三五教の連中が來たら、一人たりとも通してはならぬ、追拂へとの仰せ、又魔窟ヶ原の黒姫さまのやうな馬鹿な目

に遭つてはならないからと仰有つたのを、我々は其お言葉を夢寐にも忘れず、今

日迄よく守り、表門を嚴重に固めて居りました。其所へ又ク又クとやつて来て、門が四足だの、吾々を四足身魂だのと嘲弄するものですから、エイ猪口才な、禮儀を知らぬ畜生め、畜生なら畜生相當の制裁を加へてやらうと云うて、吾々兩人が六尺棒を以て頭を三つ四つガンとやつた處、口程にもない腰抜け野郎、荒肝を摧がれ、大地に蛙踞になりめそめそと吠面かわいて居る、エ、此尊い神門を無斷で通り、剩つさへ門の様が四足だのと吐いた上、涙を大地に零して靈場を汚しよつたので、つい勇猛心を發揮して斷行しました」

松姫「それは亂暴な事をなさつたものだ、誰がそんな事をせいと云ひましたか、これ熊公、眞實にお前達、虎公の云ふやうな事をしたのかい」

熊彦「へエへエ、そんな事處ですか、餘り業腹が立つので尻をひん捲くり、虎公と二人、兩人の臀部をエ、この柔道百段の腕拳を固めて、青くなる所まで叩いてやりました、其時の態つたら實に滑稽でしたよ」

松姫「其お二人の方は何うなつたのかい」

熊彦「へエ、其二人ですか、イヤ二匹の畜生ですか、門の外へ追放り出され、め

そめそと女の腐つたやうに抱きついて愁歎場の一幕を演じて居ました。戸の節穴より覗いて見ましたら實に憐れなものでした、イヤ氣味のよい、溜飲が下がるやうでした。ア、大變に骨を折つてウライナイ教の爆裂弾を未發に防ぎ得たのは、全く大神様の廣大無邊の御神力は申すに及ばず、吾々兩人が愛教の大精神の發露で御座います、何卒何分の何々を何々して下さいますれば吾々は益々神恩を忝けなみ、層一層に嚴格に御用を務めます」

松姫「龍若の受付は黙つて見て居たのかい」

熊公「指揮をなさつたでもなく、なさらぬでもなし、悪く云へば瓢鯨式ですな、併し乍ら吾々に對し一部の聲援を與へて呉れましたから、其功績は矢張等分と見て差支無からうと思ひます、へエへエいやもうエライ活動致しました」

松姫、膝に手を置き、俯むいて何事が考へて居る。

お節「熊公、虎公、今承はれば三五教の馬公に鹿公が見えたやうですが、眞實に其様な手荒い事をなされましたのか、ウライナイ教は時々亂暴な事をする人が現はれますな、決して大神様はお喜びなされますまい」

虎彦「オイお節、何を吐しやがるのだ、貴様は猫見たやうな奴だ、甘く口先で松姫様をチヨロマカしよつて、其上に馬、鹿の畜生と内外相應じ、此館を根底から顛覆させようと仕組んで居るのだらう、そんな事は貴様が來た時からチヤンと看破して居るのだ、貴様も序に鞆丸を握つて門外へ追放り出してやらうか」
熊彦「アハ、女、女の鞆丸とは今が聞き初めだ、そりや虎公貴様肝玉の間違ひだないか」

虎彦「ちつと位違つたつて、ゴテゴテ云ふな、鞆の【ん】と肝の【も】だけの間違ひだ、元來が【門】から起つた【もん】題だから、肝の【も】を鞆の【ん】の言靈に詔り直したのだ。それだからお節の守護神は俺がいつも、【きんもう】九尾の悪神と云うたぢやないか、アハ、アハ、アハ、」

松姫「コレ虎公熊公、馬公鹿公とやらによくお詫をして私の居間へお迎へ申して來るのだよ、本當に仕方のない男だなア」

虎彦「へエ、何と仰有います、あの様な爆裂弾を連れて來いと仰有るのですか、貴女も此頃はちつと變だと思つて居ましたが、矢張脱線しとりますなア」

松姫「ごてごて云はいでも宜敷い、迎へてお出でなさいと云うたら迎へてお出なさい。熊公も一緒に行くのだよ」

兩人は「へエ」と嫌さうな返事を此場に投げ捨て力無げに表門にやつて来た。

龍若「オイ兩人、ちつと貴様顔色が變だないか、一體どうしたのだい」

虎彦「何うしたも斯うしたもあつた【もん】かい、門から大【もん】題が起つて

我々は煩【もん】苦惱の眞最中だ。本當に馬鹿な目に遭つて来たよ」

熊彦「摺つた、【もん】だと【もん】着の結果この熊公も今日は【もん】もんの

情に堪へ難しだ」

龍若「貴様の出方が悪いから、打ち返しを喰つたのだよ」

熊彦「何、出方は至極完全無缺寸毫も缺點なしだが、何を云うてもお節の奴、間

がな隙がな松姫を籠絡しきつて居やがるものだから、松姫さまの性格は【ガラリ】

と一變し、いつもなら、比丘尼に何やらを見せたやうに飛びついて悦ぶのだけ

ど、どんな結構な報告をしても【ビク】ともしやがらぬのだ。俺やもうお節の面

を見て腹が立つのだ。エ、怪體の悪い、ケツ、ケ、ケ怪體が悪くて腸が【でん

ぐり」返る哩、それにまだまだ業の沸くのは、折角追放り出した馬、鹿の兩人を此處へ丁寧にお迎へ申せと吐しやがるのだもの、薩張お話にならないのだ」

虎彦「餘り「てれ」臭いから、兩人は疾くの昔に逃げ歸りやがつて、其邊に居なかつたと報告して置かうかい」

龍若「そんな事を云つた處で、云ひ出したら後へ引かぬ片意地な松姫の大將だ、假令百里でも千里でも跡追つかけて馬、鹿の二人を此處へ連れて來いと頑張つて、

大きな雷でも落しよつたらどうする、屹度さうお出になるに定つて居るよ、虎、熊の兩人が亂暴したのだから貴様は當の責任者だ、七重の膝を八重に折つて、お

二人さま、何と仰有つてもお頼み申して、お迎へ申して御大將のお目通りへ實檢に供へ奉るのだよ」

虎彦「さうだと云うて、まさかそんな阿呆げた事が七尺の男子として出来るものかい」

龍若「オイ、虎、熊の兩人、上官の命令に服従せぬか」
虎彦「ヘン、一寸、上役風を吹かし遊ばす哩、併し乍ら今度の事件は上官の責任

だからさう思ひなさい、我々は唯上官の目色を見てやつただけのものだ、萬々一
吾々の行動に對し、不都合の點ありとみた時は、上官の職權を以て、制止せなく
てはならぬ筈だ」

龍若「その責任はどこ迄も此方が背負ふのは當然だ、ゴタゴタ云はずに早く謝罪
つて來い」

熊彦「オイ虎公、仕方がないなア」

と不承無精に潛り門を開き、門外を「キヨロ」キヨロと見廻して居る。遙向ふの
森蔭に馬、鹿の兩人を始め、立派な女神が二柱立つて居る。

虎彦「オイ熊公、何時の間に「なめくじり」のやうにあんな所迄這つて行きや
がつたぢやないか、エ、厄介の事が起つたものぢや、何うしようかなア」

熊彦「何うしようも斯うしようもあつたものぢやない、謝罪つてお迎へするより
仕方がないワ」

虎彦「それだと云うてあんな綺麗な美人が二人も傍に立つて居るぢやないか、羣
丸を提げた男が、あんな綺麗な美人の傍で謝罪するなんて男の顔が全潰れだ、困つ

た事だなア」

熊彦「エ、身から出た錆、誰人に聞いて貰ふ譯にも行かず、恥を忍んで参りま

せう、サア虎彦、俺に従いて来るのだよ」

虎彦「本當に土龍になり度いわ、せめて貴様の後から俺の姿を隠して往かうかな

ア、さうぢやと云うて貴様より俺の方が背が高いから肝腎の顔の方が見えるなり、

困つた事だ」

熊彦「何れ面を晒されるのだ、併し一時凌ぎに俺の後から、腰を屈めて出て來

るか、邪魔臭ければ四つ這になつて従いて來い、さうすれば暫くなりと助かるだ

らう」

虎彦は熊彦の後から這はぬ許りに屁つぴり腰をしながら従いて行く。

熊彦「モシモシ馬公に鹿公、先刻は誠に御無禮な事を致しまして、何とも顔の合

しやうがありません、松姫様の御命令で面を被つて参りました」

馬公「ハイ、有難う、吾々のやうな無禮者に、左様な鄭重な言葉をお使ひ下さつ

ては恐れ入ります、貴方の背後に従いて來た影はなんで御座いますか」

熊彦 「これは私の影法師で御座います」

馬公 「お日様が西に輝いて御座るのに、この影法師は南の方へさして居ますなア」

熊彦 「此奴ア高城山で生擒つた虎で御座います」

虎彦 「オイ熊彦、餘り人を馬鹿扱ひにするものぢやないぞ、モシモシ今囀つて居

る奴は、人間に見えても此奴は矢張四足の熊で御座います」

熊彦 「エ、いらぬ事を云ふものぢやない哩、モシモシ馬公に鹿公さん、私は良心

に責られて貴方の前へ出て來るだけの勇氣がありません、お詫のために恥を忍ん

で四足になつて参りました、何卒、神直日、大直日に見直し聞き直して下さいま

して御機嫌を直し、奥へお通り下さいませ、松姫様にお目玉を頂戴致しま

した。三五教のお節さまも待つて居なさいませ、貴方等がお出で下さらねば私達

は今日限り鼻の下が干上つがて仕舞ひます。何卒、虎一匹、熊一匹助けると思

てお這入り下さいませ」

馬公 「ハイ、有難う、何卒宜敷うお願い致します」

鹿公 「御丁寧なお迎ひ有難う感謝致します」

熊公は馬、鹿の頭部に目を注ぎ、

「ヤア、お頭に大變に血が流れて居ります、どうなさいました」

馬公「これは貴方のお慈悲の鞭で御座います」

鹿公「これも矢張、貴方等のお情で、結構なお蔭を頂きました」

虎、熊は之を聞くより、大地に犬踞となり拳大の石を拾ひ、片手に捧げ乍ら、

「モシ馬公に鹿公さま、何卒私にもこの石をもつて頭に澤山お蔭を頂かして下さいませ、さうでなければ奥に這入る事が出来ませぬ、何卒お願いで御座います」

馬公「それは絶対になりませぬ」

鹿公「折角の御懇望なれど、これ許りは御免蒙りませう」

隆靖彦「皆さまの眞心が現はれて實に氣分が冴え冴え致しました。何事も神様の

思召しで御座います」

隆光彦「何事も此場の事は私にお任せ下さいませ、松姫様がお待ち兼でせう、サ

ア何卒御案内して下さいませ」

熊彦、虎彦は四這ひになり、

熊彦、虎彦は四這ひになり、

「サアサア四足の後へ従いて来て下さい、御案内致しませう」

馬公 「そんな事をなさるには及ばぬぢやありませんか、ナア鹿公さま」

鹿公 「へエ、さうですとも、御兩人さま、何卒立つて御案内して下さいな」

虎、熊 「何卒、門へ這入る迄この儘にさし許して下さいませ」

馬公 「ア、仕方がない、そんなら馬も鹿も四足になつて這つて往かうかなア」

と二人の後を四這ひになつて従いて行く。

熊を先頭に虎、馬、鹿、四四十六足の變態動物は表門さして、のそりのそりと

這つて往く。

隆靖彦 「何と誠と云ふものは偉いものですなア」

隆光彦 「ヤア實に感心致しました」

と感歎しながら氣の毒さうな顔をして四人の跡をつけて往く。

（大正一一・五・八 舊四・一二 加藤明子録）

第一二章 言照姫（六五七）

松姫館の表門の司を兼ねたる受付役の龍若は、両手を組み深き思案に沈む折柄、
潜り門を潜つてノタノタ入り込む四人の姿を眺めて打ち驚いた。女神姿の二人の
宣傳使は門外に煙の如く姿を消した。

龍若は怪しき四人の姿を見て、

「オイ其處へ往くのは、熊に虎ぢやないか。ヤー馬公に鹿公、この冷たい地上を
四這ひになつて通るとは、こりや又何うした理由だ」

熊彦「熊、虎の本守護神の顯現だよ」

龍若「貴様は馬公、鹿公を威喝毆打致した罪人だから、當然の成り行きだが、馬
公に鹿公は又何うしたものだ」

馬公「ハイ私も本守護神が現はれました。どうぞ尻でも叩いて追ひ込んで下さい」

龍若「ハテナ」

と暫時思案の後自分も又四這ひになつて従いて行く、五人の姿は館の奥深く這ひ

込んだ。奥には松姫、お節の兩人、桐の丸火鉢を挟んで頻りに御蔭話に現を抜かしてゐる。苔蒸す庭前にノコノコ現はれた五人の四這ひ姿、二人は話に實が入り、少しも此の珍姿怪體に氣が付かなかつた。獸になつた五人は人語を發すること能はず、二人が自然に目を注ぐのを「もど」かしげに待てゐる。待あぐんでか、熊公は熊の様に、

熊彦「ウン　ウン」

と一聲唸る。續いて虎公は、

「ウワー　ウワアー」

と一生懸命に唸り立てる。馬公は、

「ヒン　ヒン　ヒン」

と叫ぶ。鹿公は、

「カイロー　カイロー」

と鳴く。龍若は沈黙を守つてゐる。

になつた五人の男、松姫は、

此の聲に驚いて二人は庭前を見やれば四這ひ

『アーいやらしいこと、何でせうなア、お節さま』
と座を立つて遁げようとする。

お節 『モシモシ松姫さま、さう驚くには及びませぬ。なんでもありません、龍若さまに熊彦、虎彦の兩人さま、それに三五教の馬公に鹿公さまですよ。ホ、ホ、ホ、あのマアよう似合ひますこと』

松姫はやつと安心の面色にて、

『コレコレ龍若、熊彦、虎彦、冗談もよい加減にしなさい。女主人だと思つて人を嘲弄するのかい。なんだ見つともない。神様の御用をする身であり乍ら、汚ら

はしい獣の眞似をしたり、何の態だ。ちと嗜みなさらぬか』

虎彦 『ウワー　ウワー』

熊彦 『ウー　ウー』

松姫 『アーア困つたことになつて來た。誰も彼も氣が違つたのだらうか。これお

節さま、如何しませう』

お節 『サア困つたことですな、何うしようと云つたところで仕方が無いぢやあり

ませぬか。コレコレ馬公、鹿公、お節ですよ。あまり御無禮ぢやありませんか

馬公「ヒンヒンヒン」

鹿公「カイローカイロー」

お節「ア、互恨みの無いやうに、兩方共怪體なことになるましたな」

松姫「斯う云ふ時には神様より外に解決をつけて下さる方はない、アア可憐想

に生き乍ら畜生道へ落ちたのかいな。人面獸心と云ふことは聞いて居るが、此奴

は又獸體獸心になつた様だ。やつぱり此世にも地獄もあれば、餓鬼道、畜生道も

あると見える。ア、怖ろしい怖ろしい。コレコレ皆さま、立つて見なさい。どう

しても立つことが出来ないのか。最早人間の位が無くなつたのかいな。位と云ふ

字は、立つ人と書くが、此奴は又完全な四足ぢや、ア、可憐想到、これと云ふの

も松姫の我が強いからだ。ドレドレ一つ神様にお詫を致しませう。お節さま、貴

女はこの五人の男の看守りをして居て下さい。私はこれからお水でも頂いて一生

懸命御祈念を致します」

と眞青な顔をして、神前の間さして進み入る。五人は聲限りに「ウーウー」

「ワ―」 「ヒンヒン」 「カイロカイロ」 と負まず劣おとらず嘸ど鳴なり立たててゐる。

暫しばくあつて松まつ姫ひめは此この場ばに現あらはれ、

「ア、お節せつさま、一生いっしやう懸命けんめいに願ねがつて來きましたが、まだ皆みなの衆しうは治なほりませぬかな」

お節せつ 「ハイ依然いぜんとして最さい前ぜんの通とほり、庭にはの木きの「しげみ」へかたまつて這はひつくば

うて居をられます。漸やうく唸うなり聲こゑだけは止とまつた様やうです」

松まつ姫ひめ 「どう致いたしませう。私わたくしも仕しか方たが無ない、罪つみ滅ほろしに四よつ這ばひになつて這はうて見みませ

うか」

お節せつ 「滅めつ相さうな、何なにを仰おつ有しやいます。結けつ構こうな立たつて歩あるける人にん間げんに生うま

宮みやを輕けい蔑べつし、四よつ足あしの眞ま似ねを爲なさると今いまの五ご人にんさまのやうに、神しん罰ばつが當あたつて本ほん當たうの

四よつ足あしになつて了しまひますよ」

松まつ姫ひめ 「それだと言いつて私わたくしの責せき任にんが濟すまぬぢやありませぬか。私わたくしは畜ちく生しやう道だうへ落おちて

も構かまひませぬ、苦く樂らくを共ともにするのが本ほん當たうです」

お節せつ 「結けつ構こうな神かみの生いき宮みやと生うま

した事ことになり、本ほん守しゆ護ご神じんは愛あい想さうをつかして貴あなた方たの肉にく體たいを脱だつ出しゆつし、副ふく守しゆ護ご神じんばかり

になつて了しまひます。さうすればあのやうな淺あさま猿ましい【さま】にならねばなりません
まい。人間にんげんは神かみさま様に對たいし持ぢしん身の責せきにん任にんがあります。我わが身みを輕かるんずると云いふことは、
所謂いはゆる大神おほかみさま様さまを輕かるんずるも同どう様やう、これ位くらゐ深ふかい慢まん神しんの罪つみはありませぬ。どうぞそれ丈だけ
は思おもひ止とまつて下くださいませせ」
松まつ姫ひめ「さうだと言いつて此この慘さん状じやうを私わたくしとして傍ばつ觀くわんする事ことが出來でませうか」
お節せつ「成なり行ゆきなれば仕しかた方たがありませぬ。前ぜん車しやの覆くつがへるは後こう車しやの戒いましめ、必かならず必かならず
そんな真ま似まねをなさつてはなりませぬぞ」
と聲こゑに力ちからを籠こめ、常つねに變かはつて稍やや氣け色しきばみ叱しかりつけるやうに言いつた。松まつ姫ひめは默もく念ねんと
して首かっへを垂たれ、悲ひ歎たんの涙なみだに暮くれてゐる。

お節せつ「人間にんげんと云いふものは行おこなひが大切たいせつです。吃どもりの真ま似まねをすれば自然しぜんに吃どもりとなり、
唾おしの真ま似まねをすれば自然しぜんに唾おしとなり、聾つんぼの真ま似まねをすれば忽たちまち聾つんぼとなり、蹙いざりの真ま似まねを
すれば天てん罰ばつ觀くわん面めん壁へきになつて了しまふのは、爭あらしはれぬ天てん地ちの真しん理りです。それに人間にんげんに生せい
を亨うけ乍ながら如い何かなる事じじやう情じやうがあるにもせよ、勿もつ體たいない、結けつ構こうな肉にく體たいを四よつ足あしの真ま似まねを
したりすると云いふことがありますものか。アレ見みなさい五ご人にんの方かたは段だん々だん身からだ體たいの樣やう

子が獸らしくなるぢやありませぬか。それに又人間と生れ乍ら汚らはしい、馬ぢやの、鹿ぢやの、熊、虎、龍なぞの獸の名をつけるものだから、忽ち其名の如く墮落して了ふ。言靈の幸はふ國と申しますが、言靈計りではありませぬ、行ひの幸はひ災する世の中、どうしても人間は名を清くし、心を清め、行ひを正しくせなくてはなりません。ア、可憐想に私が及ばず乍ら、言靈を以て宣り直して見ませう。さすれば大慈大悲の大神様が一度は御許し下さるでせう』

松姫 『本當に驚きました。どうぞ貴女、神様にお詫して下さいませ』

お節 『畏まりました』

とお節は立上り、神前に進み入り天津祝詞を奏上し、終つて再び此場に現はれた。お節 『モシモシ龍若さま、熊彦さま、虎彦さま、神様が御許し下さいました。サアお立ちなさいませ。一二三四五六七八九十百千萬』

龍若 『は忽ちムツクと立上り、

龍若 『ア、有難うございました』

次で熊彦、虎彦、馬、鹿の四人、又もやスツクと立上り、

「コレハコレハお節さま、よう助けて下さいました。エライ心得違ひを致しました。モウ今後は決して斯んな馬鹿なことは致しませぬ」
松姫「コレ龍、熊、虎の三人さま、お前は彼んな馬鹿な態をして私を困らしたのぢやないかいな」

龍若「イエイエ滅相な、私が門番を致して居りますと、潜り門をノタノタ這うて来る熊彦、虎彦の姿、こりや不思議だとよくよく見れば、馬公、鹿公四人揃うてノタノタと四這ひになつて奥へ向つて進んで往く。ヤア此奴は熊、虎、最前の無禮を謝する爲、謙遜の餘り這うてゆくのだな。それに就ても馬公、鹿公は立つて歩くにしのびず、御付合ひに這うてゆかつしやるのだ。ア、何方も誠と誠の寄り合ひ、義理の立て合ひと感服の餘り、大責任を持った私一人、人間らしう立つて歩く譯にも行かず、餘り心の恥かしさに四這ひになつて隨いて來ました。さうした所二三間歩く内に本當の四足になつて了ひ、立つことも出來ず、もの言ふ事も出來なくなつたのです。實に恐ろしいものです。ナア熊彦、虎彦、お前はどうか」

熊、虎一度に、

「何だか本當の獸になつたやうな心持がし、再び立つて歩く事が出来ないかと心配してゐました。お節さまの御かげで畜生道の苦みを助けて頂きました。有難う

ございます」

と心底から嬉し涙を零して居る。

お節「ア、それは大變な事になるとこでした。今後は何卒慎んで下さいませ。鹿

公、馬公、お前迄が何とした馬鹿な眞似をなさるのでや。私は大神様に恥かしい」

「イヤどうも申譯がありません。以後は屹度心得ます」

お節「馬公、鹿公、貴方は途中で立派な女神さまにお會ひぢやなかつたか」

馬公「ハイ會ひました」

鹿公「門前まで送つて頂きました。併しそれ限り御姿がなくなつて了つたのです」

お節「さうでせう。貴方が自ら人格を落して馬鹿な眞似を爲さるものだから、流

石に慈愛深き女神様もおあきれ遊ばして、お歸りになつたのだ。お詫をなさいま

せ」

馬公うまこう 『有難ありがたうございます』

鹿公しかこう 『今度こんどといふ今度こんどは種々いろいろと神様かみさまから實地じつち教育けういくを授さうかりました』

熊彦くまひこ 『私わたくしは、馬公うまこう、鹿公しかこうに對たいし、實じつに有あるに有あられぬ侮辱ぶじよくを與あたへ、打擲ちやうちやくを加くはへま

した。然しかるに忍耐にんたい強つよきお二人ふたりさまは、チツトも抵抗ていかうもなならず、却かへつて私達わたくしたちに感謝かんしゃ

をされました。智慧ちゑ淺あさき私共わたくしもは、馬鹿ばかか、氣違きちがひかと思おもうて益々ますます虐待ぎやくたいを致いたしまし

たので、心こころの底そこより恥入はぢいつて、ア、私わたくしの精神せいしんは四足よつあしだつた、人間にんげんらしく、どうし

てお地つちの上うへを立たつて歩あるけようかと、懺悔ざんげの餘あまり一ひとつは謝罪しやざいのため四足よつあしの眞似まねを致いた

しました』

と涙なみだぐむ。

松姫まつひめ 『アアさうだつたか、其處そこ迄まで改心かいしんが出來できれば、斯こんな結構けつこうなことはありま

せぬ。併しかし神様かみさまの御教みをしへに、神かみを敬うやまひ、人ひとを敬うやまひ、我身わがみを敬うやまへと云いふことがありま

す。何卒どうぞ人間にんげんの身體からだは神様かみさまの結構けつこうなお宮みやだと思おもつて、假令たとへ自分じぶんの身體からだでも粗末そまつに

してはなりませぬ。私わたしもお節せつさまがお止とめ下くださらなかつたならば、お前まへさま等の

やうに畜生道ちくしやうだうに落おちるとここでございました。サア皆みなさま、打揃うちそろつて神様かみさまにお禮れいを

申しませう。實の所はフサの國の本山より、高姫様、黒姫様の御命令が降り、心は既に三五教へ歸順致して居つたのですが、部下の皆さま達が俄にそんな事を云つたところで聞いて下さる道理もなし、どうしたらよからうかと思ひ煩つて居りました。然るに神様は何から何まで抜け目なく、誠の手本を示して皆さまの改心を促して下さいました。此間からお節さまがお出でになり、いろいろと言葉を盡して三五教に歸るようとお示し下さつたけれども、餘り易々と歸順すればお節さまの夫を思ふ真心の誠が現はれ難いと思つて、わざと心にも無い事を云うて頑張つて居りました。さうして紫姫様の御身の上を案じて助けたいと思ふ馬公、鹿公のお二方に花を持たしたいばつかりで、今迄頑張つて居たのです。私が心の底から改心を致しましたのは、大神様のお慈悲は申すに及ばずお節さまのお力と、馬公鹿公の主人を思ふ真心のお力でございます。私のみかうライ教一同の者が歸順するやうになりますのも、夫を思ふお節さまの至誠と、主人を思ふ馬公、鹿公の忠義心とのお力でございます。誠ほど結構なものはこの世の中にございませぬ。私は今日限り此の館をあけて暫く修業に参り、身魂を研くつもりでございます。

どうぞお節さま、馬公、鹿公と共に此館をお守り下さつて、數多の信者に誠の道を説いてやつて下さいませ。貴方等が夫や主人を大切に思はるのと同様に、私も師匠の高姫様や、黒姫様のために盡さねばなりません。どうぞ宜敷くお願い致します。龍、熊、虎其他一同の方々、お節さまを私の代理否、私の御師匠さまと崇め、鹿公、馬公を高弟と仰いで、仲好くお道のために盡して下さい。と言ひ棄て庭先の草履を穿くや否や、夕の闇に紛れて何處ともなく姿を隠しけり。熊彦は驚きあわて、

「ヤア龍若さま、松姫さまは到頭蒙塵されました。コラスうして居られまい。何處までも追ひ驅けてお姿を見つけ出し、歸つて貰はねばなりません。オイ虎彦、サア足装束をせい」

龍若「オイ熊彦、虎彦、待て待て、去るものは追はず、來るものは拒まずぢや。何事も惟神に任して置けばよいのだ」

熊彦「オイ龍若、貴様は人情を知らぬ不徳漢だ。今迄師匠と仰いだ松姫さまが、吾々の醜態を御覽になつて恥しさに堪へかね、結構な館を捨てて何一つ持たず、

飛び出されたぢやないか。春秋の筆法を以て言ふならば、龍若、松姫を追放すと云ふことになるぞ。今迄は上役を笠に着居つて偉さうに、熊だの、虎だのと頤で俺を使ひ居つたが、何ぢや、斯んな時に平然として構へて居る奴が何處にあるか。モウ今日限り上官でも兄弟子でも、何でも無いワ。不徳を懲すために、コラ柔道百段の鐵拳をお見舞ひ申さうか、返答は如何だ」

龍若「アハ、ハ、ハ、又鍍金が剥げかけたぞ。今のことを忘れたか。また四足に還元したら如何するのだ」

熊彦「エー四足になつたつて構ふものか。國家の興亡旦夕に迫る此の一刹那、愚圖々々して居る場合でないぞ。間髪を入れずとは此の事だ。オイ龍若、貴様も今迄松姫様の殊恩に浴した代物だ、斯う云ふ場合に赤誠を表はし、師弟の道を盡すと云ふ義侠心はないか」

虎彦「コラ龍若の野郎、何を怖ぢ怖ぢとしてゐるのだ。松姫様を見殺しにする量見か」

龍若「喧しい云ふない。貴様のやうな慌者が居るから、ウラナイ教は發達せない

のだ。

君ならで誰かは知らむ我心

と松姫様は俺の千萬無量の心中をよくお察し遊ばしてござるのだぞ。貴様のやうにうるたへ騒いで何になるか。それだから平素から臍下丹田に心魂を鎮めよと云うてあるぢやないか

熊彦「アカンアカン、そんな逃げ口上を云つたつて、誰が承諾するものかい。卑怯者奴が、不徳漢奴が」

龍若「オイ、それ程松姫様の神業の邪魔がしたければ、俺に構はずトツトと往け。間違々々して居るとお姿を紛失して了ふぞ」

熊彦「エー忌々しい、祿盗人奴、サア虎彦、首途の血祭に、假令熊や虎に還元したつて構ふものか。此奴を一つ打撲つて潔く出發しようぢやないか」

虎彦「ヨシヨシ合點だ」

と早くも拳骨を固め前後より打かからむとする。馬公、鹿公は兩人の利腕をグツと握り、

「ヤア待った待った」

「待てと云ったつて是が何うして待たれるものか。エー邪魔して呉れな、放せ放せ」

馬公「お前さまの焦るのは尤もだ。併し乍ら松姫様をそれだけ思ふ眞心は、實に感心だが、鬣肩の引倒しとなつては、反つて濟まないぞ。一生懸命に松姫様のお爲だと思つてやつたことが、却て師匠を泥溝へ落すことになるのだ。マア冷静に考へて見よ。餘り熱した時は公平な判断は出来ぬものだ。此處が鎮魂の必要な所だ。マアマア俺達に免じて思ひ止まつて呉れ。屹度松姫様は神様に助けられ、立派な手柄を遊ばすのだから」

熊彦「馬公、そんな氣休めを云うて呉れな」

馬公「ナニ決して氣休めぢやない。正真正銘の偽らざる俺の忠告だ。屹度お前のためにならぬやうなことはせないよ」

熊彦「俺はどうなつても構はぬ。松姫様を見捨てる譯にはいかない。どうぞ頼みだから放して呉れ」

虎彦「オイ鹿公、どうぞ今度許りは見遁して呉れ。二人のものに自由行動を採らして下さい。これが一生の頼みだ」

龍若「馬公、鹿公、構うて下さるな。これだけ貴方が親切に云つて下さつても、私は何と云つても通じないやうな没分曉漢だから、二人の自由に任して置きませう。併し乍ら二人とも實に美はしい紅い血が全身に漲つて居る。ヤア熊、虎、ようそこ迄師匠を思つて呉れる。俺は何も云はぬ、唯もうこの通りだ」

と手を合す。
お節「コレコレ熊公、虎公、どうぞ思ひ止まつて下さい。お節がこの通りお願い致します」

と跣足の儘庭先に飛び下り、大地にペタリと平伏し、両手を合して涙と共に頼みいる。

どこともなく嚙喰たる音楽の響、一同はハツと驚き空を見上ぐる途端に現はれ

ひとり
た一人のエンゼル、聲も涼しく、

エンゼル「われこそは神素盞鳴大神の御使言照姫命なり。松姫の改心に依り、ウ

ラナイ教の教主高姫、副教主黒姫の罪は赦された。又松姫は神が守護を致し、神

界のために拔群の功名を顯はし、日ならず當館へ歸り來るべし。此上はお節に對

し、玉能姫と云ふ神名を賜ふ。龍若は今より龍國別、馬公は駒彦、鹿公には秋彦、

熊彦には千代彦、虎彦には春彦と神名を賜ふ。汝等玉能姫を師と仰ぎ協心戮力神

界のために全力を盡せ。神は汝の心魂を守護し天地に代る大業を萬世に建てさせ

む。ゆめゆめ疑ふこと勿れ」

と詔り終り、崇高なるエンゼルの姿は煙の如く消え失せたまひぬ。

一塊の紫雲は室内より戸外に向つて流れ出で、中空高く舞ひ上る。星は満天に

燦然として輝き渡り、東の山の端に三五の明月皎々として輝き始め、芳ばしき風

颯々として吹き來り、一同の心膽を洗ふ。

ア、惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・五・八 舊四・一二 外山豊二録)

(昭和一〇・六・三 王仁校正)

第四篇 地異天變ちい てんべん

第一三章 混線こんせん「六五八」

月照りわたる御空より まばらの雪はちらちらと
恥かしさうに降つて来る 樹木茂れる木下闇じゆもく しげ こじたやみ
ウラル教の宣傳使 テルヂー、コロンボの兩人はりやうにん
常世の國を後に見て ウラルの道を開かむととこよ くくに あと みて みち ひら

海河山野を打渡り 自轉倒島に來て見れば

遙の空に紫の 雲立ち昇る怪しさに

是れぞ正しく眞人の 出現ならむ兔も角も

雲を目當てに行き見むと 高熊山の峰傳ひ

大原山の山麓に 月の光を浴び乍ら

二人テクテク進み來る。

片方の森に怪しき人の聲、何事ならむと兩人は、差し足、抜き足、摺寄つて、

聲の出處を窺ひ居る。

谷丸「オイ、鬼丸、御苦勞だつたなア。鬼雲彦の御大將は、三五教の宣傳使に撃

退され、續いて鬼ヶ城に堅城鐵壁を構へ、天下を席卷せむとして居た鬼熊別の副

將も亦、ア、云ふ悲惨な態になつて、フサの國に逃げ歸り、振り残された吾々は、

鳥の翼を取られたやうな悲境に沈淪し、何とかしてモウ一度、大江山、鬼ヶ城を

回復し、吾々兩人は兩山に立て籠り、再び堂々と陣取り、以前の隆盛に復活せむ

と、千辛萬苦の結果漸く目的を達し、斯うして高熊山の言照姫が産んだとか云ふ
玉照彦の神様をお迎へした以上は、何程三五教だつて、どうする事も出来まい。
ウラナイ教の高姫や黒姫の奴が一生懸命に骨を居つて、その結果三五教に肝腎の
玉照姫を横奪され、今の所ではウラナイ教も追々と凋落の風が吹いて来よつたぢ
やないか。それに引替へ三五教は、玉照姫の神力で、あの通りの隆盛だ。吾々の
奉ずるバラモン教も、玉照彦さへ手に入らば、三五教もウラナイ教も、唯一蹴の
下に滅ぼして了ふのだが、到底大將があんな事になつたのだから、どうする事も
出来やしない。併し乍ら吾々は假令鬼雲彦、鬼熊別の大將が屁古垂れても誠の神
さまは決して屁古垂れないのだから、一人になつても此道を立てねば置かぬと思
つて居たが、待てば海路の風が吹くとやら、今日は本當に結構な日だつたネー。
それに就てもお前に随分骨を折らしたものだ」
鬼丸「谷丸の哥兄、別に俺にそう禮を言ふには及ばぬぢやないか。お前の働きつ
たら、實に華々しいものだつた。山口の來勿止まで行つた時は、來勿止神が澤山
の手下を引連れ、固く守つて居る。俺はモウ此難關をどうして突破しようと心配

でならなかつた、その時お前は來勿止神に向つて、強硬な談判をやつたお蔭で、ヤツと其場を通過し高熊山の麓まで泳ぎつく様にして驅けつけて、ヤアこれでこつちのものだと安心して居る最中へ、神國守の神が國依姫とか云ふ女房を連れて其場に現はれ、俺達を睨んだ時の其形相の凄じさ、今思つてもゾツとするよ」

谷丸「併し乍らイロイ口と得意の辨舌を以て、此關所をウマク切り抜け、兩人が岩窟の前に行つた所、目的物の言照姫も玉照彦さまも、お姿は見え、イロイ口と岩窟内を探險する最中、赤兒の泣き聲が耳に這入つた時の嬉しさ、臍の緒切つてから、あの時位愉快な事はなかつたなア」

鬼丸「お蔭で玉照彦様は奉迎して歸つたが、女神の様な立派なお姿の母親と聞いて居た言照姫は、皆目影を見せなかつたぢやないか」

谷丸「吾々の威勢に恐れて遁走して了つたのだ。併し腹は借り物、玉照彦様の蟬の脱殻も同然だ。肝腎の本尊を手に入れて歸つたのだから、言照姫なんかどうでも良いぢやないか」

と玉照彦を大切に傍に休ませ乍ら、一方に窺ふ人有りとも知らず、嬉しさの餘り

聲高々と囁いて居る。此方の木蔭に身を潛めた二人、

コロンボ「コレ、テルチーよ、遙々と常世の國からやつて来て功名を現はし、ウラル教を昔の勢に回復しようと思つたのに、バラモン教の奴に先を越されて詰らぬぢやないか。何とかして此方の方へボツたくる手段はあるまいかなア」

テルチー「さうぢやなア、向ふはどうやら二人らしい。此方もヤツパリ二人だ。

何とかして、一つ脅かし、玉照彦様をウマく手に入れる工夫を廻らさねばなるまい。現在五六間眼の前に、肝腎の玉が輝いて居るのだから、成功不成功は後の問題として、吾々としては此儘歸る事は出来ないなア」

コロンボ「併し今の彼奴の話で聞けば、來勿止神が澤山な部下を連れて、嚴守して居た山口の關所も、モ一つ奥の神國守の關所も、巧く突破した位な奴だから、中々力の強い奴に違ひないぞ。吾々の様に長途の旅で疲労れきつた肉弾を以て打向ふた所で到底駄目だ。何とか奇計を廻らすより仕方がない。……オイ、テルチーの哥兄お前何か良い考へは湧いて來ぬかなア」

テルチー「何れ此路を通つて歸るのだから、中途に待ち受けて、何とかやらうぢ

やないか。あまりヒソビソ話をやつて居て、敵に悟られては一大事だ。サア俺に随いて来い」

と足音を忍ばせ、腰を屈め、這ふ様にして此場を後に、元來し道へ引返し、堺峠の山麓に歸り着いた。

テルヂー「何時バラモン教の奴が歸つて来るか知れないから、早く計略をめぐらさねばならぬ、俺は此老木に攀登り、松の枝をザアザアと揺つて、天狗の聲色を使ふから、貴様は灌木の茂みに身を隠し、二人連れの奴がビツクリして腰を抜かした隙を考へ、玉照彦さまをソツと抱きあげ、堺峠の天狗岩の側まで逃げて呉れ、そうすれば成功屹度疑無しだ」

コロンボ「兄貴の計畫も一寸聞くと面白いが、しかし當事と牛のオモガイは先から外れるとか云つて、危ない藝當だなア、罷り違へば高い木の上から滑走して、腰を抜くか、脚の骨を折る位が結末かも知れないよ」

テルヂー「エ、まだ松の木に登らぬ間から、落ちぬのつて、落ちぬのつて、せうもない事言ふな。俺の計略に一つとして今迄缺點があつたかい」

コロンボ 「天道様の弔ひだ、空葬だ」

テルチー 「エー又怪體の悪い事を云ふ奴だ。これから高い木へ登らうと思つて居るのに、空葬だなんて、又しても縁起の悪いことを言ふ奴だなア。併しながら、何時歸つて来るか知れない。早く計畫に取りかからう。……俺は貴様に妙な言靈を使はれたから、今日は遠慮して置く。罰金として貴様が木登り役だ。うまく天狗の言靈を使ふのだよ」

コロンボ 「兄貴、俺の木登りの拙劣なのは、常から能く知つて居るぢやないか。そんな事言はずに、お前上役だから、ヤツパリ上の役をして呉れ。俺は下役を務める。こんな挽臼の様な重たい體で木登りをして踏み外し、地上へスツテンコロンボとやつては、それこそ大變だ。サアサア一ニウ三ツだ」

テルチー 「エー仕方がない。勇將の下に弱卒有り。これも俺の型が悪いのだ」と猿の如く、大木の幹をかかへて、樹上高く驅登つた。

コロンボ 「オーイ、兄貴、どこに居るのだ」

テルチー 「馬鹿ツ、大きな聲で物を言つと、そこいらへ近寄つて来る二人の奴に

聞きこえると大たい變へんだぞ。チツと靜しづかにせぬかい』

コロンボ』併しかし作さく戦せん計けい畫わくを、俺おれに充じゅう分ぶん教をしへて置おかないものだから、どう方ほう針しんを採とつたら良よいかサツパリ暗やみ雲くもだ』

テルヂー』暗やみ雲くもだから結けつ構こうだ。幸さいひ雪ゆき雲ぐもの空そら、圓まるいお月つきさまも見みえず、ボンヤリと其そ處こらが暗くらいので、此この藝げ當いたうがうてるのだ。グツグツして居をると發はつ覺かくするぞ。モウ良いい加か減げん沈ちん默もくせい』

コロンボ』ア、さぶしい事ことだ。なんだ白しろい手てを出だして招まねいて居あるぞ。いやらしい事ことだなア………オい何なんだか厭いやらしい奴やつが、細ほそい白しろい手てを出だして、俺おれを招まねいて居をるワイ。俺おれも何なんとかして兄あに貴きの側そばへ登のぼつて行ゆかうかなア』

テルヂー』エー臆おく病びやう者ものの、氣きの利きかぬ奴やつつたら仕しか方たがない。俺おれの側そばに居をれば隨ず分ぶん強つよさうな事ことを言いひ、立りつ派ぱな智ち慧ゑも出だしやがる癖くせに、一ひと人りになると直すぐ怖おぢけやがつて……グツグツ言いうてると歸かへつて來くるぞ。白しろい手てを出だして招まねく様やうに見みえたのは、

それは枯かれ尾を花ばなだ。昔むかしから……幽い靈れいの正しやう體たい見みたり枯かれ尾を花ばな……と云いふ事ことがある。チツと臍さい下か丹たん田でんに魂たましひを据すゑて……千せん騎き一いつ騎きの場ばあ合ひだ。奮ふん闘とうして呉くれないと困こまるぢやな

いか」

コロンボ「エー仕方がない。木の茂みへ隠れて居らうかなア」

とコワゴワ枯尾花の中に身を隠し慄うて居る。斯かる所へ鬼丸、谷丸の兩人は、

たまてるひこ うやうや
玉照彦を恭しく抱き乍ら進み来り、

鬼丸「オイ谷丸、何だか妙な聲がして居たぢやないか。三五教の奴が吾々の行動

を探知し、玉照彦様を横領に来たのぢやありませんまいか」

谷丸「そうだ、人間の聲らしかつた。一人や二人来たつて構はぬが、大勢だと一

寸面倒だ、此方は玉照彦様をお守りせにやならず、さうすれば、敵に向つて奮闘

する者は唯の一人だ。そつと……失禮だが……玉照彦様に此叢に御休息を願つて、

ふたり
二人で様子を考へる事にしようではないか」

鬼丸「それでも、玉照彦様がホギヤア ホギヤアとでも仰有らうものなら大變だ

ぞ」

谷丸「玉照彦様、誠に申譯が御座いませぬが、一寸暫くの間此處にお休み下さい

ませ。必ず必ず御聲をお發てにならない様にお願ひ致します」

と恭しく蓑を敷き、其上に笠を蔽ひ、木の枝を折つて載せ、

谷丸「サアもう是れで大丈夫だ。事急なれば、一時逃げる事にせなくてはならぬが、兩人が此山中で散り散りバラバラになつて了つては困るから、落ち着く所を定めて置かう。………堺峠の天狗岩の前だぞ。良いか………」

鬼丸「ハイハイ承知致しました」

兩人は四邊を窺ひ乍ら、ノソ……ノソと握り拳を固めて、大木の下に進んで來た。コロンボは草の中から樹上を眺め、妙な聲を出し、

コロンボ「イ……マ……ジャ……」

谷丸「ヤア何だか妙な聲がするぞ。鹿でもなし、蟲でもなし、鳥の聲でもなし、怪體な亡國的悲調を帯びた、奇聲怪音だないか」

鬼丸「イ……ヤ……ラ……シイ……」

谷丸「オイ鬼丸、貴様までが、イ……なんて、何を言ふのだ。シツカリせんかい。俺が附いて居る以上は、百萬人力ぢや。シツカリ胴を据ゑるのだぞ」

忽ち樹上より、

「ザア　ザア　ザア、ウーツ、其方は大江山の悪神の残黨であらうがな。不都合千萬な、高熊山の神山に立ち入り玉照彦様を奪つて歸る横道者、今高熊山の大天狗が汝の素ツ首引抜き、股から裂いて松の木の枝に懸けてやらう。それが叶はぬとあれば今其方が懐に抱いて居る玉照彦様を、此木の下にソツとおろし一時も早く此場を立去れツ」

谷丸「何だ、怪體な天狗も有れば有るものぢやないか。天狗と云ふ奴は、千里向うの事でも知つとる筈だ。玉照彦様を懐からソツと出せと吐しやがる。此奴ア木葉天狗か野天狗だらう。……ヤイ樹上の野天狗、木葉天狗、馬鹿な眞似を致すと、此方が反對に股から引裂いてやらうか」

鬼丸「モシモシ谷丸さま、そんな途方もない事を言ふものぢや有りませぬ。こんな大木に棲まつて御座る天狗に、相手になつて堪りますか……モシモシ樹上の天狗様、私の大將は一寸酒に酔うて居りますから、どうぞ御見のがし下さいませ。これは酒が言つたので御座います」

谷丸「エー何をゴテゴテ言ふのだ。……オイ樹上の天狗、シツカリ聞け、吾れこ

そはバラモン教の大棟梁鬼雲彦が懐刀と綽名を取った谷丸ぢやぞツ。野天狗の千足萬足は此方に取つては河童のこいた屁程にも感じないのだ。サア早く木から下りて来て此方の前に謝罪を致さぬか

樹上又もや、

「ザワザワザワ、ウ……………ツ」

鬼丸「モシモシ天狗様、どうぞ赦して下さいませ」

草の中よりコロンボは、

コロンボ「モシモシ谷丸さま、どうぞ生命ばかりはお助け下さいませ。序に天狗

も助けてやつて下さい、アンアン」

谷丸「ヤア何だ。鬼丸、貴様餘程怖いと見えるな。副守の奴、貴様の體から飛び

出しやがったと見えて、萱の中に隠れて、見つともない、泣いて居るぢやないか

鬼丸「こんな恐ろしい、魂飛び魄消えると云ふ様な目に會うたのだもの、副守護

神も飛び出させうかい。モウモウどうぞ我を出さぬ様にお鎮まり下さいませ。

あなたの副守護神も随分亂暴です。どうぞ副守護神さま、お静まりを願ひます。

……コレ此通り手を合して拜みます。アンアンアン

コロンボ「オンオンオン」

とソロソロ勢が付いたと見えて、狼泣きを始めた。

鬼丸「アア上には天狗、下には狼、コラまあ、どうしたら宜からうかなア」

この時テルチーは、どうした機みか、足踏み外し、風を切つて「ズーズドン」

と眞逆様に落ち来りぬ。鬼丸は「キヤツ」と云つて腰を抜かす。谷丸は一生懸命、

此光景に面喰つたか、もと来し道に引返し、玉照彦を引抱へ、天狗岩指して茨茂

れる密林を、遮二無二掻き分けて行く。コロンボは、

「生命あつての物種、豫ての約束天狗岩だ。兄貴、後から續けッ」

と言葉を残し、一生懸命に驅出す。

鬼丸「アア何だ、天狗の奴、木から落ちて目を暈して居やがるな。ヤアこれで

ヤツと安心した。……ヨウ腰が抜けたと思へば、まだ腰抜けの未成品だ。天狗

岩さして一散走りだ」

と又も驅出す。

テルヂー「アア、あまり下の活劇が面白いので、枝の端へ行つて、一生懸命に覗いて居つたら、何時の間にか、斯んな所へ墜落して居る。一寸……コラ目を暈して居たと見えるワイ。……オイ、コロンボ、俺だ俺だ……ヤア、コロンボの奴天狗岩へ行きよつたと見える。……ドレ彼奴を搜索旁行つてやらうかなア。それにしてもバラモン教の奴等、俺達の目をまはしとる間に、巧く關所を通過しよつたと見える……エー残念だが仕方がない」

と地團駄を踏みつつ、叢の中を峠の上の天狗岩さして、又もや登り行く。コロンボは漸くにして、朧月夜を便りに、目的の天狗岩の傍に登り着いた。樹木繁茂して暗く、岩のみ白く闇に浮き出て居る。

コロンボ「ア、これが目的の天狗岩だ、名高い割には見映えのせぬ巨岩だなア。併し乍ら俄天狗のテルヂーは、どうしとるだらうか。本當に、偉い奴が來やがつて、反對に荒膽を取つて了ひよつた。スツテの事で鞆丸の洋行する所だつた。……アア早く來て呉れれば好いのに……寂しい事だ。……そうして玉照彦様はウマく手に入つたか知らぬテ」

と一人呟ひとりつぶやいて居ある。其處そこへノソノソと白しろい物ものを抱かかへてやつて來きた一人ひとりの男をとこ、
コロンボ「ヤアうまく玉照彦たまてるひこさま様が手てに入いつて結構けつこうでした。私わたしは大變たいへんに心配しんぱい致いたしま
した」

谷丸たにまる「なんだ、お前まへは聲こゑまで噎からして居をるぢやないか。胴どうの据すわらぬ奴やつぢやなア。
……玉照彦たまてるひこさま様を渡わたして堪たまるものかい。此この通りチヤンと懷ふところに奉按ほうあんして居をるのだ」

コロンボ「それはそれは結構けつこうでした。流石さすが大將たいしやうだけありますワイ」

谷丸たにまる「定きまつた事ことだよ。貴様きさまの樣やうに泣聲なきこゑを出だして慄ふるうとるのはチツと違ちがふのだから」

コロンボ「併しかし天狗てんぐの失敗しつぱいはどうでした。別状べつじやうは有ありませぬかい」

谷丸たにまる「ウン天狗てんぐの失敗しつぱいか。彼奴あいつア一寸ちよつと乙おつだった。併しかし乍ながら肝腎かんじんの玉照彦たまてるひこさまに別べつじ

状やうは無ないのだから、マア安心あんしんせい」

コロンボ「ハイ有難ありがたう御座ございます。……あなたもチツトお聲こゑがどうかなさいま

したなア」

谷丸たにまる「ウンあまり俄にはかの出來事できごとで、一寸ちよつと面喰めんくらつたものだから、どうで聲こゑも變かはらうか

い。三五教あななひけうの奴やつが鵜うの目鷹めたかの目めで考かんがへて居をるのだから、チツとも油斷ゆだんは出來できない

ぞ
」

コロンボ 「御尤もです。ヤツパリ哥兄は哥兄だ。何から何まで抜目が有りませぬ

なア
」

谷丸 「定つた事だよ
」

話かはつてテルヂーは、峠の七八合目まで登り着き、路傍の岩に腰打掛け息を休めて居る。そこへ鼻息荒く上つて来た一人の男、

男 「ヤア哥兄、イヤ參謀長、玉照彦はどうだつた。うまくいきましたかな
」

テルヂー 「貴様が卑怯な、下の方から泣き聲を出しよるものだから、到頭目的物をシテやられて了つたのだ。エー仕方のない腰抜だナア
」

鬼丸 「腰が一時抜けたと思つた丈で、ヤツパリ腰はもとの通り大丈夫ですよ。其點は必ず必ず心配して下さるな。併し折角此處まで仕組んだ玉照彦さまを取逃すとは残念な事だ。そうだから上役面をして高上りをするものぢやないと、何時も言うのですかなア
」

テルヂー 「貴様さう言つたつて、ヤツパリ上役の務めが出来やせうまいがな。マ

アマア生命いのち丈だけ拾ひろつたら結構けつこうだと思おもつて諦あきらめるのだなアア」

此時このとき雪雲ゆきぐもを分わけて十六夜じふろくやの満月まんげつは、明皎めいかう々と二人ふたりの顔かほを照てらしたまふ。

テルヂー「ヤア貴様きさまはコロンボぢやないのか」

鬼丸おにまる「ヤア貴様きさまは谷丸たにまるぢやないのか」

テルヂー「ウン進退しんたい維これ谷丸たにまるぢや。何程なにほど月はテルヂーでも、吾々われわれの心こころは眞暗まつくら闇やみだ。

暗闇くらやみ紛まぎれに頭あたまと尻しりを、何時いつの間まにか取とつ換かへて了しまつたらしい」

鬼丸おにまる「そんな事こと仰おつしや有あつても、私わたくしは頭あたまからシリませぬワイ、アハ、ハア」

テルヂー「ヤア貴様きさまはバラモン教けうの奴やつだなア。貴様きさまの大將たいしやうはどうしたのだい」

鬼丸おにまる「サツパリ婆羅門ばらもんだ。笠かさが古ふるくなれば新あたらしいのと換かへたら好いいのだ。お前まへ、

俺わしの大將たいしやうになつて呉くれないか。こんな山路やまみちで一人ひとりになつちや心寂こころなびしくつて仕方しかたが

ない」

テルヂー「ウン、なつてやらぬ事こともない。頭あたま許ばかりで歩あるく譯わけにも行ゆかず。……俺おれ

も大切たいせつな足あしをどつかの谷底たにそこへコロンボーして了しまつたので困こまつて居をるのだ。合あうた

り叶かなうたり。サアこれから仲善なかようして行ゆくのだぞ。此この俄には天狗かてんぐに従ついて来こい。貴様きさま

は小天狗にしてやらう」

鬼丸「さうすると、お前は松の木から墜落した天狗だな。……ヤアもう解約致

しませう。アタ恐ろしい、天狗と主従の縁を結ぶなんて、どんな祟りが来るか知

れたものぢやない」

テルヂー「アハ、ハ、ハ、實の處、貴様達兩人、うまい事をやりよつて、大原山麓

の木蔭で、玉照彦さまを手に入れた自慢話をやつて居つたのを、俺達兩人がソツ

と拜聴して、……此奴一つ計略を以て横奪せむものと、俺の家來のコロンボと云

ふ奴を、樹下の薄原に忍ばせ、俺は松の木の上に登つて、天狗の聲色を使ひ、貴

様等兩人を嚇かして目的を達しようと、一幕の芝居を行つて見た處、貴様の大將

谷丸が、非常に剛腹な奴で、此天狗も策の施す所が無かつたのだ。實際は俺も横

目立つ鼻の人間だ、疑ふなら俺の鼻を見い。一割低い鼻だらう」

鬼丸「アハ、それでヤツと安心しました。モウ斯うなれば、神さまの道は元は

一株、ウラル教とバラモン教の同盟軍を作り、玉照彦様の行衛を尋ね、三五教に

一泡吹かせてやりませうかい」

テルチー「それも宜からう。併し肝腎の時になつて、俺達に素ツ破拔きを喰はさぬやうにして呉れよ」

鬼丸「それは三五教ぢやないが、刹那心ですよ。何時神界の御都合で、どうなるやら豫測す可からざるが、吾々神に仕ふる宣傳使の境遇、其時はマア其時、兔も角玉照彦様の行衛を協心戮力捜査する事に致しませう。私は是れから一寸、天狗岩まで往つて來ねばなりません。約束があるのですから……併し天狗岩は本當の天狗が出よつたら困るから……どうぞテルチーさま、あなたのお伴をさして下さいな」

テルチー「ハ、ハア、巧い事言やがるなア。天狗岩には大方谷丸の大將が玉照彦様を奉按して待つて居るのだなア」

鬼丸「サア其邊は保證出來ませぬが、抜目の無い谷丸先生の事だから、屹度大切に保護して、私の行くのを待つて居られるでせう」

テルチー「谷丸に會うたが最後、俄に又噪やぎ出して、俺に三行半を渡すと云ふ計畫だなア」

鬼丸「イエイエ斯うして、あなたと此處で會うたのも神様の御引合せでせう。谷丸の大將も中々【ひらけ】て居ますよ。屹度喜んであなたと提携するに間違ひ有りませぬワ」

テルヂー「俺も實は天狗岩へ行かねばならぬのだ。コロソボが先へ往つて待つてる筈だから」

鬼丸「あなたもヤツパリ天狗岩に御用が有るのですか。……ア、そんなら別にあたま下げて頼むぢやなかつたに……エライ言靈の濫費をしたものだ」

テルヂー「アハ、ハ、ハ、現金な奴だなア。口に資本は要らぬぢやないか。何程物價騰貴の今日此頃でも、言靈丈は無料だ。親の讎敵でも討損なうた様に、そう過ぎ

ぎこし苦勞をするものぢやない……サアサア行かう」
とテルヂーは先に立つ。鬼丸はブルブル慄ひ乍ら従いて行く。漸く木下闇に白く

浮き出た天狗岩の間近になつた。
鬼丸「モシモシ谷丸は來て居ますかなア。天狗を一足連れて來ました」

テルヂー「それ見たか。直噪やぎやがる」

谷丸「誰だ。鬼丸の作り聲を仕やがつて、狐か狸か、但はウラル教の奴だらう。」

そんな手に乗る谷丸ぢやないぞ。俺の部下の鬼丸は最前から此處に来て居るのだ。二人も鬼丸が有つて堪るか」

テルヂー「オイ、バラモン教の谷丸とやら、俺はウラル教のテルヂーと云ふ宣傳使だ。玉照彦様を、御無事に奉按して来たか」

谷丸「ナニツ、貴様、玉照彦様の事を尋ねてどうする積りだ。假令天地が覆つても、貴様等に渡すものかい。天狗の化損ひ奴が……」

コロンボ「ア、テルヂー、今来たのかい。私は今迄お前だと思つて、一生懸命に話して居つた。ア馬鹿らしい」

テルヂー「アハ、エライ混線したものだなア。是れだけ需要者が殖えて來ると、電話交換局も大抵ぢやないワイ」

再び月は皎々と輝き始めた。四人の顔は、菊石まで見える様になつて來た。谷丸「ウラル教の御大將、是れも何かの神様の御引合せだらう。どうぞ打解けて

仲ようして下さいや。併し乍ら松の木から墜落する事は廢めて下さい。一つ違へ

ば、一つより無い生命を棒に振らねばなりませんぞ」

テルヂー「それは有難う。そんなら此處で平和條約を締結させう。併し玉照彦

さまは何方の手に預つたら良いのだ、先決問題として、それが定めたものだ」

谷丸「是ればつまりは、御免蒙りたい。折角骨折つて奉迎して来たのだから……

……ヤア玉照彦さまは冷たくなつて居らつしやる。コリヤ大變だ……ハ、ア、あま

り慌て石と間違へてきたなア。道理でエロウ重たくなつしやつたと思つて居た。

エーエ何の事だい」

テルヂー「アハ、ハ、ハ、態を見なさい。それだからあまり欲張るものぢやありま

せぬぞ」

谷丸「ヤアこりや大變だ。マ一遍元の所へ引返して探して來うかな」

テルヂー「今度は一イニウ三ツで、先へ往つた者が頂く事にしようかい。お前が

放かして置いたものだから、棄かしたものを拾ふのは拾ひ勝だ。サア走つた走つ

た」

谷丸「テルヂー、お前から先へ走りなさい。わしや、ゆつくりと後から探しに行

きます」

テルヂー「それだと言つて、お前から先へ往つて呉れな、何處に落してあるか方角が分らぬぢやないか。谷丸、御遠慮は要らぬ。サアお前からお先へお出でなさいませ、最後の一秒間が勝負ぢや」

谷丸「アハ、ハ、ハ、うまい事仰有るワイ。お前が動かねば、私は二日でも三日でも動かせぬのだい。人を先頭に立てて所在を探さうと思つて……本當にウラル教の宣傳使は、狡猾いなア」

鬼丸「オイオイ谷丸、グツグツして居ると、三五教の奴が通つて、拾つて歸んで了ひますで。サア早う往きませう」

谷丸「エ、氣の利かぬ奴ぢやなア。俺が斯う言つて暇費れてる間に、貴様は場所を知つてるのだから、何んでソツと何々せぬのぢやい。頓馬な野郎だ」

テルヂー「オイ、コロンボ、鬼丸君の側をチツトも離れちやならぬぞ。キユツと袖を掴まへて何處へ行つても構はぬ、往く所へ従いて往くのだ。そして何々を何々して來るのだ。良いか」

コロンボ「承知致しました。併し鬼丸の足が速かつたら、どう致しませう」

テルジ「帯なつと、足なつと、喰らひついて行くのだ。氣の利かぬ奴だなア」

谷丸「ア、もうこうなつちや、到底獨占する譯にはゆかなくなつて來た。そんな

らモウ仕方がない、共有物として、ユツクリと行きませう」

とソロソロ歩き始めた。テルジは谷丸の袖をグツト握り乍ら、

テルジ「オイ、コロンボ、鬼丸を放しちや可けないよ」

谷丸「エー工鳥籬桶に足を突つこんだ様なものだ。エライ所でダニが喰ひ付きや

がつて……ア、是れも何かの罪業だらう」

と面膨らし乍ら、四本足の二組は、堺峠の麓を指して急ぎ下り行く。

(大正一一・五・九 舊四・一三 松村眞澄録)

第一四章 聲の在所(六五九)

谷丸、鬼丸、テルヂー、コロンボの四人は堺峠の天狗岩を後にし乍ら、山麓の老松の根元を越え、玉照彦の幼児の隠し場所に走り着いた。谷丸は、目を丸くして、此處彼處と探し廻し、三人は吾一の功名せむと、血眼になつて、谷丸の行く後に従ひ、搜索を始めた。忽ち聞ゆる赤兒の泣き聲、谷丸は立止まり、腕を組み、泣き聲の何れより来るかを考へて居る。

谷丸「慥に此處に、お寝かせ申して置いた筈だ、それに形跡だに残つてゐないのみならず、御聲は聞えて居るがトント方角が分らない。東に聞える様でもあるし、西の様でもあるし、西かと思へば南に聞えるし、南かと思へば、北に聞える様だし、ハテナ、こいつは、狐の奴、玉照彦様を啣へて、其處中を迂路ついて居やがるのだな、オイ俺は東を探すから、鬼丸、貴様は西の方を探して呉れ。そして、テルヂー、コロンボ二人は、南、北に手分けして搜索して下さい。其代り誰が見付けても共有だから其お積もりで願ひますよ」

テルヂー「其約束は間違ひありません。イヤ面白い。さあコロンボ、貴様は南に行け、俺は北の方を探して見る」

不思議にも、幼児の泣聲は、谷丸の耳には東に最も高く聞えて来る。鬼丸には西の方に聞える。コロンボの耳には南に聞える。テルヂーの耳には慥に北の方から聞えて来る。

四人は東西南北に、慌しく、聲を尋ねて駆け出した。四人の耳に聞ゆる猛烈な泣き聲、各自前後左右より響いて来る。四人は其聲に、耳を引張られる様に、體をキリキリ舞ひさせ、目を廻して四人共、バタリと倒れた。一時許り四人の呼ぶ聲も、風の音も鎮まり閑寂の幕が下ろされた。夜はそろそろと明け放れ、東の空の雲押し分けて昇り給ふ天津日の御影に照され、各一度に目を醒せば、豈計らむや、四人は天狗岩の根元にツブ濡れになつて眠りゐたりき。

谷丸「ア、何だ、夢見て居たのか、矢張天狗岩の傍だから鼻高の奴、俺達を一寸チヨロマカしやがつたのだな。それにしても、肝腎の、玉照彦様は何處にお出になつたのだらう。ア、此處に御座つた、有難い有難い、玉照彦様どうぞ許して下さいませ。貴方お一人をこんな岩の上に、御寝かし申し、吾々は前後も知らず寝込んで了ひました」

と云ひつつ傍に寄り、抱き上げむとしたるに、玉照彦の全身は冷切つて氷の如くに冷たくなつて居る。

谷丸「オイ鬼丸、玉照彦様は冷たくなつて居らつしやる、こりやマア何うしたら宜からうかなア」

鬼丸「そりや夢の中に見た通り石ぢやありませんか」
谷丸「ヤア如何にも、此奴は夢の通り矢張石だつた」

テルヂー、コロンボ一度に、

テ、コ「アハ、ハ、ハ、誠に誠に、御挨拶の仕様も御座いませぬ、もう斯うなつた以上は何程泣いても悔んでも石が物云ふ例は御座いませぬ、どうぞ鄭重に弔うて上げて下さい。さあコロンボ、夢の處へ行くのだ」

と驅出す。谷丸、鬼丸も續いて驅出したり。

坂の中程迄下り来る折しも、水の滴る如き一人の美人、玉照彦を抱いて上り来るに出會つた。

テルヂー「モシモシ、貴方は言照姫様では御座いませぬか」

美人「ハイ左様で御座います。今玉照彦の神様を保護して此處迄参りました」
テルヂー「變な事を申しますが、何卒ウラル教の神様として大切に致しますから、
吾々に下さいませまいか」
言照姫「ハイ何誰かに貰つて貰はねばならないのですから、お望みとあれば、何
うとも致しますせう」

斯かる處へ、谷丸、鬼丸は追かけ來り、

谷、鬼「ヤア玉照彦様で御座いましたか、大變にお慕ひ申し探して居りました。

サアサア何卒谷丸へお越し下さいませ。私が抱いて上げませう」

言照姫「お前は、谷丸さまぢやないか。私の不在中に、岩窟の中から盗み出し、

大切にする事か、あのやうな茨室へ蓑を敷いて、捨子同様にして置きなされたぢ

やないか。どうして貴方に、此尊い玉照彦様を安心してお預け申す事が出来ませ

うか」

谷丸「イヤ誠に済みませぬ。何を云つても、ウラル教のテルヂーが狙つて居るの

ですから、取られちや大變と、茨の中とは知らず、朧月夜の事とて間違ひ、お寢

かせ申まをしたのです。どうぞ私わたくしに下くださいませ」

言照姫ことてるひめ「斯かう兩方りやうほうから懇望こんもうされては、一方いっぽうを立てれば一方いっぽうに濟すまず、處置しよちに困こまります。そんなら斯かう致いたしませう。玉照彦たまてるひこ様は御生おうまれ遊あそばしてからまだ百日ひゃくにちにもなりませぬが、ちよいちよい物ものも仰有おつしやる、立歩たちあゆみもなさいますから、ウラル教けうのテルヂーとバラモン教けうの谷丸たにまるとお二人ふたりで兩方りやうほうの手てを握にぎつて、玉照彦たまてるひこ様を引張ひっぱ合あひして下ください。引張ひっぱつて勝かつ方ほうに上あげませう」

四人よにんいちど一度いちどに、

「さう願ねがへば公平こうへいで結構けつこうです」

言照姫ことてるひめは玉照彦たまてるひこを坂道さかみちの眞中まんなかに下おろした。玉照彦たまてるひこは左右さいうの手てを兩方りやうほうに差さし延のばし、

玉照彦たまてるひこ「サア坊ぼんの手てを引張ひっぱつて下ください。勝かつたお方かたの方ほうへ參まゐります。然しかしソツと引ひいて下くださいや」

「承知しようち致いたしました」

と谷丸たにまる、テルヂーの二人ふたりは、左右さいうに立たち現あらはれ、腰こしを跣かがめて、背せの低ひくい玉照彦たまてるひこの

手をグツト握り力を極めて、

「サア玉照彦様、私の方へ来て下さい」

と、一生懸命、腕が抜ける程引張る。

玉照彦「ア、痛い痛い、痛いわいなア」

と顔を顰め泣き出す。テルチーは此聲に驚いて、思はず手を離した。

谷丸「サア愈こちらの物ぢや。玉照彦様、御苦勞乍ら、今日から、バラモン教の

神様になつて下さい」

玉照彦、首を振り、

玉照彦「イヤイヤ テルチーの方に御世話になります」

谷丸「そりやあ約束が違ふぢやありませんか」

玉照彦「貴方は、私が悲鳴を上げて痛がつて居るのに、構はずに引張つたぢやあ

りませぬか、あの時にテルチーが放して下さらなかつたら、私の體は二つに千切

れて居るのです。愛情の深いテルチーに御世話になります」

谷丸「小難かしい事を仰しやいますなア、チト位辛抱して下さいさつても宜いぢやあ

りませぬか。モシモシ言照姫様、どうぞ生みの御母様の貴方からよく云つて下さいな」

と振り向き見れば、こは如何に、言照姫の姿は最早影も形もない。

玉照彦「私は最う斯うなる以上は、どちらへも参る事は止めませう。今ウラナイ教の松姫さまが、お迎へに来て下さるから、そちらへ行きます」

此時トボトボと坂を登つて来る一人の女がありしが、玉照彦は嬉しさうに、

「ヤア、其方は松姫か、よう迎へに来て呉れた。サアサア連れて行つておくれ」

松姫「これはこれは玉照彦様、焦れ慕うて参りました。サア私が御負して進ませませう」

と背中を突き出す。四人は目と目を見合せ乍ら、松姫を前後左右より取り巻き、鐵拳を以て擲きつけ、悲鳴を上げて倒れるのを見済まし、玉照彦を引攬へ、四人

は林の茂みに姿を隠したり。

松姫は暴漢に亂打され忽ち氣絶して坂道に倒れ居たりしが、其日の夕暮頃フト息を吹き返し、四邊を見れば、麗しき二柱の女神、儼然として其前に立ち給ふ。

女神一 「汝は高城山の松姫であらう。サア、妾に従つて是より、高熊山の岩窟に参りませう」

松姫 「何れの神様が存じませぬが、ようマア助けて下さいました。私は悪者に虐げられ氣絶をして、遠い遠い彼の世の旅行をやつて居ました。處が二人の女神様が現はれて、コレ松姫、此處は何と心得て居る、幽界の入口であるぞや。汝はまだまだ幽界に出て來る時でない、サアサア妾が送つてやるから、と仰有つたと思へば氣が付きました。見れば幽界で見た女神様と、寸分も間違ひのない御二方様、お蔭で命を助けて戴きました」

と手を合せ感謝の涙にくれて居る。

女神二 「サア松姫どの、高熊山の玉照彦様をお迎へに行きませう」

松姫 「あの玉照彦様はたつた今、悪者に攫はれて行かれました。最早、高熊山には居らつしやいますまい」

女神一 「オホ、今朝ウラル教とバラモン教の宣傳使が來たでせう。彼等は貪欲心に絡まれ、眼暗み、石くれを玉照彦様と思ひ違へ、喜んで逃げ歸つたので

す。サアこれから、貴女は氣を取り直し、單身岩窟に進み、言照姫にお逢ひなされて、玉照彦様をお連れ申してお歸りなさい。妾は來勿止迄送つて上げませう。それから奥は貴女一人のお働きです。妾達二柱、お手傳ひ申すは易き事乍ら、それでは貴女の御手柄にはなりませんから、心丈夫に以てお出でなさいませ」
松姫「何から何迄、有難う御座います。お言葉に甘へて來勿止迄送つて頂きませうか。さうして、貴女様の御神名は何と申します」

二人の女神はニコリと笑ひ、

「何れ分る時節が参りませう。此處では一寸申し上げ兼ねます」
と先き立ち、足早に、山奥指して進み給ふ。松姫は、二女神の後に従ひ、心いそいそ歩み出したたり。

二女神「もう二三丁先が、來勿止の關所で御座います。吾々は此處でお別れ致します。何れ改めてお目にかかる事が御座いませう。左様なら」

と云ふかと思へば二女神の姿は忽ちかき消す如く見えなくなりぬ。松姫は盲人が杖を失つた如く、暗夜に提燈取られた如き心地して、重き足を、希望の車に乗せ

られ、引摺つて行く。日は既に黄昏れ、十七夜の月はまだ昇り給はざる一の暗み時、來勿止の神の關所に着いた。此處は嚴格な關門が築かれてある。

松姫「もしもし私は靈山へ詣る者で御座います。何卒、此門お通し下さいませ」

門番の一人甲は、横門を押し開け出で來り、

甲「何誰か知りませぬが、此一の暗に、此門あけいと云ふ者は碌な者ぢやありませぬ。何時も何時も狐や狸に誑られて、馬鹿を見通しだから、今日は何と云つて

も開けませぬ、否通過させませぬ。出直して明日の朝お出なさい」

松姫「左様では御座いませうが、決して怪しい者では御座いませぬ。どうぞ通し

て下さいませ。玉照彦様の御誕生地へ至急詣らねばなりませんから」

乙「此聲を聞いて、

乙「オイ勝公、此暗がりに、アタ厭らしい、そんな白い装束を着た女を相手に何を擲揃つて居るのか、早く這入らぬか、又例の奴に定つて居るぞ」

勝公「そうだと云つて此の方が是非玉照彦様に參拜したいから、通過させて呉れと、懇願なさるのだもの、無情に斷る譯にもゆかぬぢやないか」

乙「何だ、又貴様、日の暮れ紛れに、女を掴まへて、愚圖々々云つて居やがるのだな、餘程、勝手な奴だ。男が尋ねて来ると、何時も、慳もほろるに、木で鼻こすつた様な應待をするクセに、今日は言葉付迄、優しく出やがって、貴様の面つたら、大方崩壊して居るのだらう。暗夜でマア仕合せだ。晝であつて見よ、好い化者だぞ」

勝公「俺の顔が化者なら、貴様の顔は何だい。鯰が沸茶を浴ぶせられた様な面をしゃがつて、人さんの御面相迄、批評すると云ふ資格がどこに有るかい」

乙「何と云つても貴様は女にかけては五月蠅い奴だ、俺が来んだら、優しい聲を出しやがって何々を、何々する、何々だつたらう。エライ邪魔物が飛び出して濟みませぬなア、アハ、ハ、ハ」

松姫「モシモシお二人様、今日は特別の御憐愍を以てお通し下さいませ。どうしても今晚の中に参拜致さねばなりませんから」

乙「大膽至極な、女の分際として此山奥に只一人踏み込み来り、此怖ろしい岩窟へ参詣し様なんで、そんな大野心を起しても駄目ですよ。屹度途中で、狼にバリ

バリとやられて了ふのは請合だ。此門潜るや否や、地獄の八丁目だから、悪い事は云はぬ。お前の身の爲ぢや。いつ迄も絶対通さないとは申さぬから、明日来て下さい」

松姫「御注意は有難う御座いますが、私は神様に何事もお任せ申した身の上、命なんかどうなつても宜しいから、何卒心よう通して下さいませ」

乙「イヤイヤ、命が惜しくない様な、ド轉婆を通す事は愈以てなりませぬ哩、來勿止の神様に又どんなお小言を頂戴するか知れやしない。此頃は此門番も失策だらけで、薩張り鼻「べちや」で威勢が上らない。それと云ふのも、勝公が心の締りが無いものだから、いつでも俺達が巻添へを食ふのだ。オイ勝公、サアこんな命知らずの強者を相手にせずと、トツトと奥へ這入つてそれから門を閉めて、警戒を嚴重にせなくちやならぬぞ。サア這入らう這入らう」

勝公「それだと云つてこれ程熱心に、お頼みなさるのに、どうして匆ね付ける譯にゆくものか。貴様這入りたければ、勝手に這入つて勝手に閉めたが宜からう。俺は仕方がないから、日頃覺えた、ぬけ道を傳うて此御方を背中背負つて上げ

るのだ」

乙「とうとう尻尾を現はしやがったな、アハ、、、、随分女にかけては腰抜けな

ものだ」

勝公「エ、竹公の唐變木奴、貴様に女が分つて堪るか。女で苦勞して来た者でない」と女心理は解らないぞ。さう毒々しく無情な事を云ふものぢやないワ。人間は堅い許りが能ぢやない。碎ける時は碎けて、世の中の人々の爲に便利を計るのが人間の務めだ。況して此館に泊めて呉れと仰有るのでもなし、通してさへ上げれば宜いのぢやないか」

竹公「貴様が何と云つても、一旦男の口から、通さぬと云つたら通さぬのだ」

勝公「モシモシお女中、今お聞きの通り同僚役があこの通りの頑固者ですから、無理にお通し申しても、後でどんな難題を吾々兩人にふきかけるやら分りませぬ。

さうすればお互の迷惑ですから、どうぞ貴方も折角此處迄お出でになつたのですから、お氣の毒で堪りませぬが、今晚は一旦、引返して下さいませぬか」

松姫「どうぞ、方角だけなつと教へて下さいませ。送つて貰つては大變な、貴方

の御迷惑になつては濟みませぬから」

勝公「實の處は、これだけ厳しく門番も今迄は云はなかつたのですが、二三日前に、バラモン教の、谷とか鬼とか云ふ奴がやつて来て、來勿止神様を始め、吾々をチヨロまかし、トウトウ大切な、玉照彦様を盗んで歸つたものですから、其後と云ふものは大變に警戒が厳しくなつて、暮六つ下れば、老若男女にかかはらず、一切通してはならぬと云ふ、來勿止神様の厳しき御命令で御座います。それ故、今の男があんな無情な事を云うたのですが、然しあゝ見えても彼奴は極めて平常から親切な男ですよ。言葉つきこそ、穢ふ御座いますが、それはそれは心の美しい男ですよ。屹度腹の中では涙をこぼして居たに違ひありません。どうぞ、竹公は無情な奴だと恨んでやつては下さいますな」

松姫「イエエ決して決して何の恨みませう。お役目大切にお守りなさる處を、私が御無理を申しますのですから、何と仰有られても是非はあります。併し今貴方のお言葉によれば、玉照彦様はバラモン教の方が盗んで歸つたと仰有いました。それが、それは事實ですか」

勝公かつこう「盗ぬすんで歸かへつたのは事實じじつですが、併しかし乍ながら御神徳ごしんとく高たかき高熊たかくまの靈山れいざん、不思議ふしぎな事ことには盗ぬすまれたと思おもつた玉照彦たまてるひこ様さまは、依然いぜんとして御機嫌ごきげん麗うるはしく、言照ことてる姫ひめ様さまに抱だかれて居をられます。本當ほんたうに妙めうな事ことがあつたものです」

松姫まつひめ「それ聞きいて安心あんしん致いたしました。私わたくしにも成程なるほどと諾うなづかれる點てんが御座ございます」

斯かく話はなす折をりしも石いしの本門ほんもんはガラリと開あいた。燈火ともしびをとぼし、現あらはれ來きたる、白髮はくはつ異樣いやうの老人らうじんの姿すがたが、松明たいまつに照てらされて、明瞭はつきりと松姫まつひめの目めに映うつつた。

松姫まつひめは思おもはず、ハツと地ちに平伏へいふくした。

勝公かつこう「これはこれは來勿止神くなどめのかみ様さま、何處どこへお出でましになります」

來勿止神くなどめのかみ「ヤアお前まへは勝かつぢやなア。此處ここへ一人ひとりの女をんなが來くる筈はずぢや。未まだ出でて來こないかな」

勝公かつこう「ハイ、それは何なんと云いふ方かたですか。松姫まつひめぢや御座ございますか」

來勿止神くなどめのかみ「ア、さうぢや、其その松姫まつひめが來くる筈はずだ。二時ふたときばかり以前いぜんに、玉照彦たまてるひこ様さまよりお使つかいが見みえて、此處ここへ松姫まつひめと云いふ女をんなが一人ひとり來くる筈はずだから、夜分やぶんでも構かまはぬ故ゆゑ、通とほしてやつて呉くれとの御命令ごめいれいであつた」

勝公かつこう「その方かたなら、今いま此處ここに居をられます。サア松姫様まつひめさま、御心配ごしんぱいなさいますな。今いまお聞ききの通りとほですから」

松姫頭まつひめかしらを上げ、

松姫まつひめ「勝かつさまとやら、御親切ごしんせつ有難ありがたう御座ございました。して貴方あなたが來勿止神様くなどめのかみさまで御座ございましたか。罪深つみふかき妾わらはなれど、どうぞ此御門このごもんを通して下くださいませ」

來勿止神くなどめのかみ「サアサア遠慮えんりよは要いりませぬ、ズツとお通りとほ下くださいませ。貴女あなたのお登りのぼを、岩窟いはやの大神様おほかみさまが大變たいへんに御待おまち遊あそばして居をられます。サアサアこちらへ」と松姫まつひめの手てを把とり門内もんないに導みちびき入いれたり。

(大正一一・五・九 舊四・一三 藤津久子録)

第一五章 山神やまがみの瀧たき〔六六〇〕

松姫まつひめは來勿止神くなどめのかみに導みちびかれ、門もんの傍かたはらの細ささやけき二間造ふたまづくりの室へやに案内あんないされた。

來勿止神くなどめのかみ。此この暗夜あんやに女をんなの身みとして此この神山しんざんへ御參拜ごさんばいなされますに就つては、何なにか深い理由ふかわけがございませう。私わたしは此この關所せきしよを守る役目やくめとして一應御尋ねして置くおひく必要ひつ要えつがございますから、どうぞ包つつまず隠かくさず事情じじやうを述のべて下ください。』

松姫まつひめ「御恥おはづかしいことことで御座ございますが、私わたしは今いままで大變たいへんな取違とりちがひを致いたして居をりましたものでございませう。ウライナイ教けうの分社でやしろ高城山たかしろやまの麓ふもとの館やかたに於おいて、三五教あななひけうに對抗たいかうし、素盞鳴大神すさのをのおほかみさま様の御邪魔おじやまばかり致いたして來きました罪つみの深い女をんなでございませう。私わたしの師匠ししやうの高姫たかひめ、黒姫くろひめと云いふ方かたが大變たいへんに素盞鳴尊すさのをのみことさま様に反對はんたいの教をしへをなさつたので、私わたしはそれを眞まに受うけ、何處どこまでも天下てんか國家こくかのためにウライナイ教けうを擴張くわくちやうし、素盞鳴尊すさのをのみことの一派いっば言依別ことよりわけ、八島主神やしまぬしのかみさま様の主管しゅくわんせらるる三五教あななひけうを根底こんていから打ち壊こわす決心けつしんを以もつて、晝夜ちうやの活動くわつどうを續つづけて來きたものでございませうが、素盞鳴尊すさのをのみことさま様は吾々凡人われわれただびとの考かんがへて居をるやうな方かたではなく、大慈大悲だいじだいひの世界せかいの贖主あがなひぬしであるといふ事ことを、第一だいいちに高姫たかひめ様が合點遊がってんあそばし、立たつても坐あても居ありません、黒姫くろひめ様と御相談ごそうだんの上私うわたくしの方ほうへも詳細さいな手紙てがみが参まりました。就つては高姫たかひめ、黒姫くろひめ御二方おふたかたの今迄いままでの罪つみを許ゆるして頂いたかねばならませぬので、弟子でしとしての私わたしも立たつても坐あても居ありませぬ、何か一ひとつの荒修あひしうしゆ

行を致しまして、功名手柄を顯はし、それを御土産に三五教へ参り、師匠や自分の罪を赦して頂き度いばかりに、高城山の館を振り捨てて一人とぼとぼと此の靈山に修行がてら、玉照彦様を如何かして御迎へ申し、これを土産に三五教へ歸るつもりで参つたのでございます

來勿止神「ア、さうでせう。私もうすうす言照姫様より承はつて居りました。併し乍ら貴女は餘程御改心が出來て居るやうだが、未だお腹の中に副守護神が澤山に潛伏して居りますから、此儘御出でになつても玉照彦様が御承知下さいますまい。此先に山の神の瀧がございますから、其處で七日七夜荒行をなさつて副守護神を追ひ出し、至粹至純の本心に復歸り水晶玉に磨き上げた上、御出でにならなくては駄目ですよ」

松姫「如何にも左様でございませう。どうか如何なる荒行でも厭ひませぬ、どうぞ御命じ下さいませ」

來勿止神「此處の修行は大變に辛いですが、貴女それが忍り切れますか」
松姫「何程辛くても構ひませぬ。假令生命が亡くなつても、御師匠様の罪が消え

さへすれば、それで満足致します」

來勿止神「ア、それは感心な御心がけた。それなら是から時を移さず、山の神の

瀧に於いて修行をなされ、神の道に斷飲斷食は無けれども、貴女は自分の罪及び、

御師匠様の罪、其他部下一般の罪の贖ひのために、七日七夜斷飲斷食をなし、そ

の上つへに荒行あひぎやうをせなくては本當ほんたうに罪つみは消えませぬぞ」

松姫まつひめ「何分なにぶんよろしく御願おねがひ致します」

來勿止神くなどめのかみ「勝かつ、竹たけの兩人りやうにん、一寸ちよつと此處ここへ出でておいで」

言下げんかに二人ふたりは此場このばに現あらはれ、

勝公かつこう「何用なにようでございます」

來勿止神くなどめのかみ「別べつに外ほかの事ことではないが、この松姫様まつひめさまが山やまの神かみの瀧たきで、七日七夜なぬかななやの荒行あらぎやう

をなさるのだから、お前は十分じふぶん世話せわを代かはる代がはるして上あげて呉くれ。荒行あらぎやうの間あひだは決けつし

て此この方かたに同情どうじやうしたり、憫あはれみをかけてはいけません。能あたう限かぎりの虐待ぎやくたいをするの

だ。さうでなければ神様かみさまへ對たいし重かさね重かさね御無禮ごぶれい御氣障おきざはり、到底たうてい何時いつまでかかつて

も罪つみは消滅せつめつするものではないから、松姫様まつひめさまを助たすけたいと思おもふなら、十分じふぶん嚴きびしき行ぎやう

をさしてあげて呉れなくてはなりません

勝公「ハイ畏まりました。何分門番も勤めねばなりませんから、竹さんと私とが

代る代る世話をします」

來勿止神「ア、そうだ。若いものをよく監督して、落度の無い様に十分の荒行を

させ、立派な人間に研いて上げて呉れ」

二人は一禮し、

「サア松姫様、早速ながら是から瀧壺へ参りませう。何れ大きな灸を据えられる

と随分熱うて辛いものだが、そのために大病が全快した時の愉快といふものは、

口で言ふやうなことではないと同様に、お前さまも是から私が大きな灸を据えます。

併し乍ら決して憎んではいけないから、悪く思うて下さらぬ様に頼みますぜ」

松姫「罪重き妾、どんな辛い行でも甘んじて致します。何卒よろしう御願ひ申し

ます」

勝公「よしよし、サア斯う来るんだぞ、松姫の女つちよ。愚圖々々してみやがる

と頭を「かち」割らうか」

と俄にはかに言葉ことばや行おこなひに大變動だいへんどうを現あらはした。

松姫まつひめ「ハイ」

と答こたへて隨ついて行ゆく。

勝かつは先さきに立たち、竹たけは松姫まつひめの後うしろより棒千切ぼうちぎれを以もつて背せを打うち、臀しりを突つき、

竹公たけこう「ヤイ松姫まつひめ、何なにを愚圖ぐづぐづ々々してゐやがるのだ。早はやく歩あるかぬか、あた面倒臭めんだうくさい。

日ひが暮くれてからやつて來きやがつて、俺達おれたちが樂らくに寢ねようと思おもつて居ゐるのに、瀧たきまで送おく

つてやつて貴様きさまを大切たいせつに虐待ぎやくたいせねばならぬ。今いままで慢神まんしんをして大神様おほかみさまに敵對てきとうた

其その「みせしめ」だ」

と言いひつつ棒千切ぼうちぎれを以もつて、松姫まつひめの後頭部こうとうぶをカツンを撲なくつた。松姫まつひめは痛いたさを堪こらへ

乍ながら、

松姫まつひめ「どうも有難ありがたうございます。これで【ちつと】は妾わたしの罪つみも輕かるくなりませうか」

竹公たけこう「ナ二百ひやくや二百にひやく撲なくつたつて、頭あたまをかち割わつたつて、貴様きさまの罪つみは容易よういに淨きよまる

ものか」

勝公かつこう「オイ竹公たけこう、あまりぢやぞ」

竹公たけこう「何があまりぢや。貴様きさまは來く勿な止どめ神様のかみさまの御言葉のおことばをなんと聞きいたか。松姫まつひめに親しん切せつがあるのなら、十分じふぶんに虐待ぎやくたいをしてやれと仰おつしや有あつたぢやないか」

勝公かつこう「ウーそれはさうだが、あまり役やくたいもないことをするものぢやないぞ。虐待ぎやく待たいも十分じふぶんにするが好えいが、其處そこは又また、それ其處そこぢや、人情にんじやうを吞のみ込こまずにな。好いいか」

竹公たけこう「貴様きさまは偉えらさうに先頭せんとうに立たちやがつて、來く勿な止どめ神様のかみさまの御言葉のおことばを無視むしし、且かつ又また松姫まつひめの修行しうぎやうを妨さまたげ、重おもい罪つみを更さらに重おもうしようとするのか」

松姫まつひめ「モシモシ御二方おふたかた、妾わかしのことに就ついて、どうぞ口論いさかひはないやうにして下くださいませ。神様かみさまに濟すみませぬから」

竹公たけこう「エー松姫まつひめの奴やつ、何をゴテゴテと干渉かんせうするのだ。【ふざけた】事ことを吐ぬかすとモ一ひとつ御見舞おみまひだぞ。イヤ此この棍棒こんぼうで力ちからパイ首くびが飛とぶ程ほど、可愛かはいがつてやらうか」

松姫まつひめ「重々ぢつぢつの御親切ごしんせつ有あり難がたう存ぞんじます。併しかし乍ながら御苦勞ごくらくをかけて濟すみませぬ。どうぞ貴方あなたもお疲つかれでせうから、今日けふはこれ位くらいでお休やすみ下くださいませ」

竹公たけこう「なにうまい事を言いふな。矢張り頭あたまを撲なぐられるのが苦くるいと思みえるな。俺おれは此この

あひだ 閒から何とはなしに、むかついてむかついて其處の岩でも木でも、見つけ次第撲り度うて撲り度うて、腕が唸つて居つたのだ。今日は幸ひ來勿止神様の御命令を遵奉して心地よい程、貴様の頭を可愛がつてやるのだ。有難く思へ。荒行と云ふものは辛いものだらう。ウラナイ教で朝から晩まで、蛙かなんぞのやうにザブザブと水をかぶつとるのはちつと段が違ふぞ。何程辛くても生命の瀬戸際になつても、僅か七日七夜の辛抱だ。此處で修行をやり損ねたならば、今まで大神様の御道を邪魔した、自らの罪で萬劫末代根底の國に落され、無限の苦しみを受けねばならぬぞ。此の位なことはホンの宵の口だ。九牛の一毛にも如かざる苦みだから、勇んで修行をするのだぞ」

松姫 「ハイ」

と答へた儘、頭部より流るる血潮の眼に滲み込むを、袖にそつと拭ひつつ、しよぼしよぼと瀧の方へ向つて隨いて行く。

勝公 「サア、これが名題の山神の瀧だ。ちつと寒うても眞裸體になつて、頭から水をかぶるのだ。此處は猿が澤山居る處だから、顔を引つ搔かれぬやうに用心な

さい。晝は大丈夫だが、夜分になると千足猿がやつて来て悪戯をするから」

松姫「ハイ、有難うございます」

竹公「勝公、御苦勞だつた。お前は門の方を守つて呉れ。俺はこれから一つ此の行者を十分に可愛がつてやらにやならぬからな。それから六と初とに棍棒を持つて、至急やつて来るやうに言うて呉れ」

勝公「さう澤山棍棒を持つて来て如何するのだい」

竹公「きまつたことだ。一本位の棍棒では徹底的に可愛がつてやる譯にはいかぬ。助太刀のためだ」

勝公「併しなア、竹公、わが身を抓つて他の痛さを知れと言ふことがあるなア。

世界に鬼は無いといふことも、誰やらに聞いたことがあるやうに思ふ」

と、それとは無しに餘り虐待をせぬようと、口には言はねど、其意をほのめかしてゐる。

竹公「なに謎のやうなことを言ひやがつて、貴様は松姫を大切にせいと言ふのぢやらう、否結局憎めといふのだらう。何事も竹の胸中に有るのだ、心配せずには

く歸れ。さうして來勿止神さまに俺が力一パイ虐待して可愛がつて居る實状を、より以上に報告するのだぞ」

勝公「竹の奴が松姫の頭を七八分割り、腕を折り、胴腹に風穴をあけよつたと言つて置かうか」

竹公「そうだ、其處は貴様の都合にして呉れ。マア可成く神様は小さいことはお嫌ひだから、言ふのなら十分大きく言ふのだな。オイ勝、一寸待つて呉れ。二人の奴に棍棒を持つて來るように言つて呉れと云うたが、こんな女一人を虐待するのに應援を頼んだと思はれては残念だ。俺が徹底的にやつて置くから、來勿止神に詳細に報告するのだぞ」

勝公「そんなら松姫さま、暫くの辛抱だ。どうぞ立派な身魂になつて下さいや」
松姫「ハイ有難うございます」

竹公「エー又女にベシヤベシヤと正月言葉を使ひやがつて、早く歸れ」
勝公「歸れと云はなくても誰が斯んな怖ろしい處に居る奴があるか」

とトントンと歸つてゆく。

肌を裂く如き寒風は木々の梢に唸りを立てて見舞うて来る。月は皎々として東の山の頂きから瀧壺をのぞいた。

竹公「松姫さま、御氣の毒ですが、どうぞ暫らく辛抱して下さい。來勿止神は中々厳格な神で寸分も假借をさせぬから、私も實は滿腔の涙を隠して、失禮なことを致しました。併し乍ら到底貴女の身體では、此の荒行は續きますまい。世は呪と言うて神様は、大難を小難に祭り替へて下さるのだから、私もこれからスツパリと素裸體になつて、貴女の行を助けて上げよう。さうすれば七日のものは三日半で済むといふ道理だ。お前さま、頭を割られて血が出たと思つてゐるだらうが、ありや血ぢやありませんか。私が紅殻の汁を棒の先の革袋に括りつけて撲つたのですよ。血と見えたのは袋の紅殻だ。撲られた割には痛くはありません。すまいがな」

松姫「ハイ、さうでございました。別に何處も痛んで居りませぬ。斯んなことで神様の御意に召すやうな荒行が出来ませうかな」

竹公「出來ますとも。神様は形だけをすれば赦して下さいます。可愛い世界の氏

子に何を好んで辛い目をさせなさいませう。貴女が生命がけの荒行をして、御詫をしようとは決心なされた其の心が、既に貴方の罪を赦して居ります。唯今の貴女は最早ちつとも罪は無いのですよ。本當の生れ赤兒の心ですワ。併し乍ら餘り氣分のよい瀧ですから、清めた上に淨めてお出でになつたら宜敷からう。併し來勿止神は、あゝ見えても實際は閻魔さまの化身ですから、中々賞罰を嚴重になさるのです。今歸つた勝公だつて本當に優しい、慈悲深い人間です。併し乍ら彼奴は馬鹿正直ですから私が本當に貴女を虐待したのだと思つて心配をして居るのです。松姫「ア、さうでございませうか。なんとも御禮の申しやうは御座いませぬ。何分よろしう御指導を願ひます」

斯くして二三日経つて、四日目の朝になつた。

松姫「なんと莊嚴な景色ですな。日輪様が此の瀧に輝き遊ばして七色の虹を御描き遊ばし、得も言はれぬ微妙な鳥の聲、常磐木の色、まるで天國の様ぢやありませんか」

竹公「さうですとも、貴女の心が清まつたので宇宙一切が莊嚴雄大に見え、環境

すべて樂園と化したのですよ」

松姫「高城山も随分景色に富んだ處ですが、到底比べものにはなりません」

竹公「それは貴女のお心が曇つてゐたからですよ。今度見直して御覽、此の景色よりも層一層立派です」

斯く話す時しも勝公は莞爾々々として馳せ來り、

勝公「ア、松姫さん、竹さん、御苦労だつた。來勿止神様から今日は行の中途だ

けれど、モウ修行が濟んだから直様御山へ參詣つて宜しいとの御命令が下りまし

た。お悦びなさいませ」

松姫「それは何より有り難うございます」

と瀧壺に向ひ、感謝の祝詞を奏上し終つて三人打ち連れ立つて、來勿止神の庵に

向つて歸りゆく。

竹公「神様、おかげで無事に松姫様の御修行が終りました」

松姫「來勿止神様、いろいろと厚き廣き思召に依りまして、汚い身魂を洗つて頂
きました」

來勿止神くなどめのかみ「ア、そうだったか、結構々々、モウそれで何處へ出しても立派なものだ。お前さんの修行のおかげで玉照彦様のお迎へも出来ませう。お師匠様の罪もすっかりゆる全然赦されませう、よう辛い行をなさいました。ア、竹公、お前も大變な心配り、氣遣ひであつたな。私の心を知つて居るのはお前ばかりだ」
と嬉し涙を袖にそつと拭ふ。暫くは沈黙の幕が下りた。此時門前に慌しく驅來る

四人の男、

男「モシモシ此の門開けて下さいませ」

勝は立上り大石門をギーと左右に開けた。四人の姿を見て勝は驚き、

勝公「ヤアお前は此の間やつて來た不屆者、バラモン教の谷丸、鬼丸の兩人、又二人も味方を殖やして來居つたのだな。玉照彦様だと思つて大きな岩石を大事さうに抱へて歸り、途中で氣がついて又もや二度目のお迎ひに來居つたのだらう。

モウモウ餘人は知らず貴様に限つて、此門を通過さすことは出來ないと來勿止神様の嚴命だ」

谷丸、鬼丸は大地にペタツと坐り、涙を流し乍ら、

谷、鬼「モーシ門番様、今日の谷丸、鬼丸は先日の兩人とは違ひます。どうぞ御安心下さいませ」

勝公「違つと云つたつてお前の容貌と云ひ、姿と云ひ、何處に一つ變つたところが

ないぢやないか」

谷、鬼「ハイ形の上はちつとも變つて居りませぬが、私の心は天地の相違に變り

ました」

勝公「いよいよ以て怪しからぬ奴だ。皮は何時でも變るぞよ。靈魂は中々變らぬ

ぞよと神様が教へてござる。それに何ぞや、心が變りましたとは益々合點のゆか

ぬ奴だ」

谷、鬼「そのお疑ひは御尤もでございますが、今までの取違ひ、慢神の雲霧が晴

れまして、すつぱりと青天白日の様な魂に生れ變りました。何程人間が利巧や智

慧をだして焦慮つて見た所で駄目だ。神様のお許しない事は九分九厘で掌が覆る

と云ふことをつくづく悟らして頂きました。アア心程怖ろしいものは御座い

ませぬ。今迄私は三五教や、ウラル教、ウラナイ教が敵ぢやと思つて、一生懸命

に其の敵を征服したいと憂身を糞し、大活動を續けて居ました。然るに豈圖らむや、その大悪魔の敵は私等の心の中にみんな潜んで居りました。斯うおかげを頂いた以上は、天ヶ下に敵も無ければ、他人も無い、鬼も大蛇も何もありません。吾々は松姫と云ふウライナイ教の宣傳使に對し、非常な暴虐を加へ、大方半死になると迄打擲を致しましたことを、今更乍ら悔いまして、立つても坐ても居堪まらず、四人のものが、どうぞして松姫様の所在を尋ね御詫をせなくてはならないと思つて、「そこら」を探す内、道で會つた杣人に聞いて見れば、三四日以前の暮れ方に靈山の方に向つて、一人の女が上つたと云ふことを聞き、之は正しく松姫様に間違ひあるまいと、飛び立つ許り悦んで四人が打揃ひ御目にかかつて御詫をししようと出て來たのです。どうぞ此處を通して下さいませ。又先達は貴方等に御無禮を致しました其罪も御詫せなくてはなりません。何事も過去のことには水に流して、吾々の過ちをお赦し下さいませやうに」

勝公「さてもさても妙なことが出來たものだ哩。變り易いは秋冬の空と聞いてゐるが、こりや又大變の地異天變が起つたものだ。一寸皆さま待つて下さい。松姫

様もまだ此處にゐられますから、伺つた上で會はせませう
と門内に影を隠しける。

(大正一一・五・九 舊四・一三 外山豊二録)

第一六章 玉照彦(六六一)

來勿止神は、松姫、竹其他四人の男と共に機嫌よく湯を啜つて居る。

此處へ門番頭の勝は入り來り、

「モシモシ神様、此間の奴が二人も新顔を連れ、都合四人やつて參りました」

來勿止神「ア、さうだらう、改心して謝罪つて居るだらうなア、大方谷丸、鬼丸、

テルヂー、コロンボと云ふ人間だらう、早く此方へ案内をするが宜敷い」

勝公「承知致しました、併し松姫様にお詫がしたいと云うて居ます」

來勿止神「ア、さうかさうか、それなら尚更結構だ」

間もなく勝の案内に連れ、四人の男此場に現はれ怖さうに鬨を跨たげて土間に
平太り込み、頭を地につけて謝罪つて居る。

来勿止神「オ、お前は谷丸以下三人の男だなア、何うだ、神様の御神力には屈服
したかな」

谷丸漸く首を上げ、

谷丸「イヤもう、重々御無禮を致しまして申譯も御座いませぬ、そちらに御座る
は松姫様、何うで御座います、お體は痛みませぬか、つい心の中の悪魔に操られ、
御無禮計り致しました。今日は四人連れ打ち揃ひ貴女のお跡を尋ね、お詫に参り
ました。重々の罪お赦し下さいませ」

と四人は一度に首を下げる。

松姫「イ、エ、何の何の、私こそ貴方等にお詫をせなくてはならないのです。貴
方等のお蔭で結構な御神徳を頂きました」

来勿止神「皆様、其處は土間ぢや、冷えますから破屋なれど座敷へ上つて下さい」

谷丸「イエイエ何う致しまして畏多い、斯様な罪人が貴方様と同席が何うして出

來ませうき」

來勿止神くなどめのかみ「貴方はもはや罪つみより救すくはれたのだ、尊たふとい神様の珍うづの御子みこだから、さう遠慮えんりよなさるに及およばぬ。遠慮えんりよは却かへつて神様かみさまに御無禮ごぶれいの基もとだから、私わたくしの云いふ通り素直すなほにお上あがり下ください」

テルヂー「サア皆みなさま、折角せつかくのお志こころざし、上あがらせて頂いたきませう」
と一足ひとあし跨またげて先さきに上あがる。三人さんにんは、

「御免ごめん下さいませ」

と怖おそる怖おそる、座敷ざしきに上あがつた。竹たけは湯ゆを汲くんで四人よにんに勸すすめる。

谷丸たにまる「松姫様まつひめさま、貴女あなたは是これから玉照彦様たまてるひこさまをお迎むかひにお出いでなさるのでせう」

松姫まつひめ「エ、」

谷丸たにまる「お隠かくしなさいますな、もはや吾々われわれども共ともは改心かいしんを致いたしました以上いじやうは、玉照彦様たまてるひこさまを奉迎ほうげいしたいなどと、左様さやうな不都合ふつがふな考かんがへは持もちませぬ、ナア、一同いちどうさま」

テルヂー「左様さやうで御座ございます、吾々われわれも神様かみさまのお蔭かげに依よつて左様さやうな執着心しふちやくしんは念頭ねんとうから「さらり」と去さりました。併しかし松姫様まつひめさまにお詫わびのため、高熊山たかくまやまの巖窟がんくつ迄までお伴致ともいたし、

いろいろと能う限りの御用をさして頂き度う御座います」

來勿止神「皆々の赤心は良く分りましたが、此事は御助力を受けたとあつては松姫様のお手柄になりませぬ、松姫さまだけ御一人お出なさるが宜しからう、皆の人は此處に待つて居てお上げなさい、其間に種々と神様の結構なお話を交換致しませう」

一同は言葉を返す勇氣もなく、承知の旨を答へ、松姫の無事の歸途を待つ事とした。松姫は心いそいそ勇み立ち、脚も何となく輕げに枯草蔽へる谷道を上り往く。前方より二人の男女、にこにこしながら出で來り、丁寧に會釋し、

「私は當山を守護致す、神國守、妾は國依姫で御座います。貴女は松姫さまぢや御座いませぬか」

松姫「仰せの通り、不束者で御座います、何分宜敷うお願い致します。玉照彦の神様は御機嫌麗しう在らせられますか、言照姫様は何うしておいでなさいませう」
神國守「ハイハイお二方共、御機嫌殊の外麗しく、今朝よりは特別の御機嫌で貴女のお出を大變に待つて居られるやうです。サア、私夫婦が御案内致しませう、

随分茂つた嶮い山道で御座いますから、私がお手を把つて上げませう」

松姫「イエイエ何卒構うて下さいませ、神様に對して畏れ多い事で御座います。

人様のお出遊ばす所へ私が往けない筈は御座いませぬ」

國依姫「左様なれば妾が先導を致しませう」

と夫婦は松姫を中にして静々と岩窟さして登り行く。

神國守「サア、此處が岩窟の入口で御座います、四十八の寶座の御前で御座いま

す、一度禮拜致しまして、奥へ御案内する事にしませう」

松姫は嬉しさうに「ニタリ」と笑ひ、四十八の寶座を一夕禮拜し、神國守夫婦

に案内されて岩窟の奥深く忍び入る。

國依姫「此岩窟は上り下りが、所々に御座いますから、御用心なさいませ、十七

八丁奥へ進みますと立派な岩窟のお館が築かれて御座います、此處が玉照彦様の

お館」

松姫「有難う」

と簡単に禮を返し窟内の隧道を右に折れ左に曲り、上りつ下りつ漸く館の前に辿

り着いた。館の前に一人の男が立ち現はれ松姫の到着を待つて居た。

松姫「ヤア、お前は熊公ぢやないか、何うして斯んな處へ來たのだい」

熊彦「ハイ、私は貴方が過日の夕間暮、お館を捨てて、御出奔なされたので、お

跡を尋ね、お願ひ申して再び高城山の館へお歸りを願ひ度いと、取るものも取敢

ず走り出でむとすれば、お節さまや龍若に無理に引き留られ、残念ながら肉體は

館に残し、靈魂のみ貴方の行衛を尋ね、此處迄御案内を申して來たのです、堺峠

に於て四人の奴に貴方がエライ目に遭はされなさつた時、私はどれだけ苦しんだ

か知れませぬ。貴女のお體に付纏ひ、私が代つて撲られました、御覽なさいませ、

此通りまだ創傷が十分に癒つて居りませぬ」

松姫「ア、さうするとお前は肉の宮を館に残して置いて來たのだなア、跡は何う

しなさつた」

熊彦「ハイ、肉の宮は千代彦と云ふ本守護神が守つて居ます」

松姫「ア、さうかな、それは御苦勞だつた、早く歸つて下さい、もう大丈夫だ

から」

熊彦「もう暫くお伴さして下さい」

神國守「ヤア、さう聞くと貴方が或人の幽霊だな」

松姫「これは私の家に居ります熊公と云ふ大變師匠思ひの男で、門番や受付をして居るので御座います、一心の誠が通つて靈魂が幽體を現じ、此處迄私を守つて來て呉れたのです」

國依姫「何と誠の強い、師匠思ひの方ですなア」

松姫は早くも何故か涙ぐんで居る。熊公の姿は煙の如く消えて仕舞つた。

忽然として館の戸は開かれ、中より言照姫の威嚴に満ちた姿が現はれた。

言照姫「ヤア其方は松姫であつたか、妾は言照姫の命、様子あつて本名は今暫く名乗りませぬ、奥に寝ませらるる玉照彦様は遠き未來に於てミロク神政成就の神業に参加遊ばす尊き伊都能賣之御靈、其方は大切に奉侍し、世繼王山の麓に在す國武彦の命にお届けあれ、然らば其方は云ふに及ばず高姫、黒姫一派の、今迄瑞の御靈の大神に射向かひまつりし重大の罪を赦され、神界の御用に參加し、偉勳を建つる事を得む。神國守、國依姫は松姫と共に玉照彦の命を保護し奉り、綾の

聖地に送らるべし』

と言葉終るや否や、言照姫の姿は忽然として消えて仕舞つた。松姫は畏み慎み、

天の數歌を謠ひあげ、終つて言葉靜かに、

松姫「妾は松姫と申すもの、唯今言照姫様の御命令を拜し、尊様をお迎へ申して

綾の聖地向ひます。何卒妾にこの尊き御用をお許し下さいませ』

と一心に祈願し終るや、玉照彦の命は立ち上り、小さき身體を揺りながら、松姫

の膝に嬉しげに上らせられた。松姫は恭しく懷中に抱き奉り、神國守夫婦に守ら

れ、漸く岩窟を立ち出て、再び寶座を伏し拜み、來勿止神の庵に漸く歸りついた。

來勿止神を始め、勝、竹、六、初、其他の門番及び谷丸、鬼丸、テルヂー、コ

ロンボは門の内面に整列して奉迎しつた。松姫は神國守夫婦を伴ひ、靜々

と目禮しながら門を出れば豈圖らむや、數多の白衣を着せる神人幾百人ともな

く、道の左右に整列し、英子姫、悦子姫、龜彦、常彦、若彦、紫姫、其他三五教、

ウラナイ教の宣傳使の肉體及び幽體相交はり、恭しく奉迎して居る。何處ともな

く微妙の音樂四方に起り松姫は思はず足も進み出で、何時の間にか、世繼王山麓

の悦子姫の庵に着き居たり。茲に玉照彦、玉照姫の神人は二柱相並び給ひ、日に夜に神徳現はれ、晝夜の區別なく瑞雲棚引き渡り、ウラナイ教の高姫、黒姫其他も嬉々として集まり來たり、ミロク神政の基礎を固むる事となりける。

(大正一一・五・九 舊四・一三 加藤明子録)

(昭和一〇・六・四 於透明殿 王仁校正)

第一七章 言靈車(六六二)

仰げば遠し其昔

廣大無邊の大宇宙

天地未だ定まらず

陰陽未分の其時に

葦芽の如萌えあがり

黄芽を含む一物は

忽ち化して神となる

これぞ天地の太元の

おほくにとちたちみこと
 大國常立尊なり
 そのみたま
 其御靈より別れたる
 てんち
 天地の祖と現れませる
 くにはるたち
 國治立の大神は
 とよくにぬし
 豊國主の姫神と
 ちから
 力を協せ御心を
 ひと
 一つになして美はしき
 せかい
 世界を造り玉ひつつ
 しちじふごせい
 七十五聲の言靈を
 うみ出でまして千萬の
 みたま
 身魂を造り國を生み
 あをひとぐさ
 青人草や山河を
 うまら
 うまに委曲に生み終へて
 かむいざなぎ
 神伊邪諾の大神や
 かむいざなみ
 神伊邪冊の大神に
 あま
 天の瓊矛を賜ひつつ
 しうりこせい
 修理固成の大神業
 よ
 依さし給へる折柄に
 あら
 現はれませる素盞鳴の
 かみ
 神の尊は畏くも
 おほつなばら
 大海原を治しめし
 くにはるたち
 國治立の大神や
 とよくにぬし
 豊國主の姫神の
 おほみこころ
 大御心を心とし
 ちぢ
 千々に御胸を碎かせつ
 ちくら
 千座の置戸を負ひ給ひ
 やしま
 八洲の國を治めむと
 こころ
 心を配らせ給へども

あたる 天足の彦や胞場姫の
醜しこの身魂みたまに成なり出いでし

あや 怪しき靈伊凝り居て
やまたをろち 八岐大蛇や醜狐しこぎつね

しこめ さぐめ 醜女探女や曲鬼の
あら 荒ぶる御代と成り果てて

たいしゆれいじう 體主靈従の雲蔽ひ
よ 世は常暗となり果てぬ

ひ 日の神國を治食しめす
あまてら 天照します大神は

このありさま 此状態を畏みて
いはやど 岩屋戸深く差しこもり

をの 戦き隠れ玉ひしゆ
もも 百の神たち驚きて

やす 安の河原に神集ひ
はか 議り玉ひし其結果

かむすさのを 神素盞鳴の大神を
あめつち 天地四方の神人の

ももちよろづ 百千萬の罪科の
あがなひぬし 贖罪主と定めまし

たかあまはら 高天原を神追ひ
やら 追ひ玉へば素盞鳴の

かみ 神は是非なく久方の
たふと 尊き位を振り棄てて

おほうなばら 大海原に漂へる
しま 島の八十島百國の

やま 山の尾の上の曲神を
ことむ 言向け和し麗しき

五六七の神代を始めむと
百の悩みを忍びつつ
八洲の國を遠近と
漂浪ひ給ふぞ尊けれ

朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも

假令大地は轉倒るとも
天津神達國津神

百の神々百人を
誠一つの言靈の

稜威の劍を抜き持ちて
天地にさやる曲津神

八岐大蛇を言向けて
此世の災禍拂はむと

大和心の雄心を
振起しつつ進み行く

神素盞鳴の大神は
すべての罪を差し赦す

三五教を守りつつ
心も廣き神直日

大直日にと見直しつ
肉の宮より現れませる

八の柱の姫御子に 苦しき神命を下しつつ

齋苑の館に身を忍び 日の出神や木の花の

姫の命と諸共に 恵の露を天が下

四方の國々隈もなく 注がせ玉ふ有難さ

埴安彦や埴安姫の 神の命と現はれし

國治立や豊國の 姫の命の分靈

黄金山下に現はれて 暗き此世を照さむと

八千八聲の時鳥 血を吐く思ひの苦みを

永の年月重ねつつ 五六七神政の礎を

常磐堅磐に固めまし 豊葦原の瑞穂國

秋津の洲や筑紫島 常世の國や高砂の

島にそれぞれ神司 國魂神を定めつつ

天の岩戸もやうやうに 開き初めて英子姫

教の花も悦子姫 空に棚引く紫の

姫の命の現はれて

自轉倒島の中心地

錦の御機織りなせる

四尾の峰の山麓に

幽玄微妙の神界の

經と緯との經綸を

【うまら】に委曲に固めつつ 薰りゆかしき梅が香の

一度に開く御經綸

松は千歳の色深く

心の色も丹波の

綾の聖地に玉照彦の

神の命や玉照姫の

神の命の二柱

時節を待ちて嚴御靈

瑞の御靈のいと清く

濁り果てたる天地の

汚れを流す和知の川

竝木の松の立竝ぶ

川邊に建てる松雲閣

奥の一間に横臥して

五六七神政の神界の

尊き經緯を物語る

ア、惟神々々

御靈幸はひましませよ。

見渡す限り紺青の
みわた かり こんじやう
み空に清く玉照彦の
みそら きよ たまてるひこ

神の命や玉照姫の
かみ みこと たまてるひめ
神の命の現はれて
かみ みこと あら

彌勒の御代に伊都能賣の
みろく みよ いづのめ
神の御靈の神業を
かみ みたま しんげふ

開始し玉ふ物語
かいし たま ものがたり
三五教を守ります
あななひけう まも

神素盞鳴の大神の
かむすさのを おほかみ
仁慈無限の眞心に
じんじむげん まごころ

流石の曲靈も感銘し
さすが まがひ かんめい
心の底より悔悟して
こころ そこ くわいご

ウライナイ教の神司
けう かむつかさ
本つ教に歸順せし
もと をしへ きじゆん

聞くも芽出度き高姫や
きき めでた たかひめ
高山彦や黒姫の
たかやまひこ くろひめ

罪や穢れを贖ひし
つみ けが あがな
松の心の松姫が
まつ こころ まつひめ

高熊山の山麓に
たかくまやま さんろく
心の岩戸を開きつつ
こころ いはと ひら

最早惡魔も來勿止の
もはやあくま くなどめ
神に魂をば鍛へられ
かみ たま きた

御稜威も高き高熊の
みいづ たか たかくま
岩窟の中に驅入りて
いはや なか かけい

貴うづの御み子こをば奉ほう迎げいし 天あめが下したをば平たひらけく

いと安やすらけく治をさめ行ゆく 神かみの仕しく組みに参さん加かせし

誠まこと心こころは三千歳みちとせの 花はな咲さいでて今いま茲こゝに

五み六ろく七しちの神かみ代よの開ひらけ口ぐち 松まつ竹たけ梅うめの宣せん傳でん使し

月つき雪ゆき花はなを始はじめとし 教をしへをひら開く八や島しま主ぬし

言こと依より別わけの言こと靈たまに 敵てきと味み方かたの差け別じめなく

誠まこと一ひとつの大おほ本もとを 世せ界かいに照てらす絲いと口ぐちを

手た繰ぐりて述のぶる物もの語がたり 筆ふで執とる人ひとは「松まつ村むら」氏し 松まつ村むら

無む盡じん意い菩ぼ薩さつの「山やま上がみ」氏し 頭あたまも照てらす身みも照てらす 山やま上がみ

月つき照てる彦ひこの肉にくの宮みや 言こと靈たま開ひらく觀くわん自じ在ざい

三さん十じふ三さん相さうまた四し相さう 妙めう音おん菩ぼ薩さつの神しん力りきを

愈い現よはす十じふ九くの卷まき 永なが春はる日ひに照てらされて

物もの語がたるこたそ樂たのしけれ。

四方よもに塞ふさがる雲霧くもぎりを
神かみの御水みい火きに吹ふき拂はらひ

心こころも清きよく身みも清きよく
青あをき御空みそらを五み六ろく七しち殿でん

本宮山ほんぐうやまの新緑しんりよくは
大本教おほもとけうの隆盛りうせいを

衣ころもの色いろに現あらはして
行手ゆくてを祝ことほぐ如ごとくなり

眼がんか下に漂ただよふ金銀きんぎんの
波なみに浮うかべる大八洲おほやししま

天あまの岩戸いはとの其上そのうへに
大宮柱おほみやばしら太ふとしりて

千木ちぎ勝かつ男をぎ木ぎも彌高いやたかく
朝日あさひに輝かがやく金光きんくわうは

神かみの御稜威いづの十曜とえうの紋もん
冠島おしまめしま沓島くわにひるや六合大くわにひるの

常磐木ときはぎしげ茂しげる浮島うきしまは
擬まがふ方かたなき五大洲ごだいしう

言靈閣ことたまかくは雲表うんべうに
黄金こがねの冠戴かんむりきつ

聳そびえて下界げかいを打うちまもる
教御祖をしへみおやを齋まつりたる

薨輝いらかがやく教祖殿けうそでん
金龍殿きんりうでんや教主殿けうしゆでん

木々の梢も青々と
 春風そよぐ神の苑
 水に浮べる錦水亭
 地水に輝く瑞月が
 盡くる事なく物語る
 瑞の御霊の開け口
 神の力も嚴御霊
 五十鈴の瀧の礫々と
 際涯も知らぬ神の代の
 奇しき尊き物語
 高天原と鳴り亘る
 言靈閣のいや高に
 聲も涼しき神の風
 常磐堅磐に吹き送り
 醜の草木を靡かせて
 世人の胸に塞がれる
 雲を晴らして永久の
 花咲く春の神國に
 導き救ふぞ雄々しけれ
 ア、惟神々々
 御靈幸はひましませよ。

月日並びて治まれる

聖の御代の二十餘り

五つの年の睦の月

寒風荒ぶ眞夜中に

本宮新宮坪の内

遠き神代の昔より

貴の聖地と聞えたる

龍門館の神屋敷に

現はれ給ひし良の

皇大神は三千歳の

こらへ忍びの松の花

手折る人なき賤の家に

住まはせ玉ふ未亡人

出口直子の肉宮に

電の如懸りまし

宣らせ給へる言靈は

三千世界の梅の花

一度に開く時來り

須彌仙山に腰をかけ

曲津の猛ぶ世の中を

神の御水火に言向けて

ミロクの御代を開かむと

嚴の雄健び踏みたけび

嚴のころびを起しつつ

神の出口の口開き

大本教の礎を

固め給ひし雄々しさよ

賤が伏家の賤の女は

神の御聲に目をさまし
黑白も分ぬ暗の夜を

光眩き旭子の日の出の神代に還さむと

朝な夕なに命毛の御筆を執りて神言を

心一つに記しつと二十七年が其間

唯一日の如くにて仕へ玉ひし言の葉は

國常立の大神の貴の御聲と尊みて

集まり來る諸人は遠き近きの隔てなく

貴賤老幼おしなべて聖地をさして寄り來る

神の御稜威の赫灼に日々に榮えて大本は

朝日の豊榮昇るごと四方の國々照らし行く

變性男子と現れて錦の機の經絲を

仕組みて茲に七年の月日を重ねて待ち給ふ

時しもあれや三十餘り一つの年の秋の頃

變性女子の生御魂神の教を蒙りて

穴太の郷を後にして

變性男子の住所をば

訪ねし事の縁となり

愈茲に緯絲の

機織姫と現はれて

釋十字に掛卷も

畏き神の御教を

稜威の仕組の新聞紙に

寫して開く神靈界

金言玉詞の神勅を

心も狭き智慧淺き

パリサイ人が誤解して

あらぬ言擧げなしければ

清けき神の御教も

漸く雲に包まれて

高天原の空暗く

黑白も分かぬ人心

瑞の御靈は悲しみて

此雲霧を拂はむと

心痛むる折柄に

忽ち轟く雷の

雲の上より落ち來り

身動きならぬ籠の鳥

忠と轉る群雀

漸く聲をひそめける

瑞の御靈の神言もて

パリサイ人や世の人を

尊き神の御教に

眼を覺まさせ助けむと
心を定めて病勞の

身もたなしらに述べ立つる
尊き神の御心

筆に寫して松の世の
榮えの本の物語

臥龍如來と現はれて
松雲閣に横たはり

落葉を探す【佐賀伊佐男】
（佐賀伊佐男）
垢を清むる温泉の

【湯淺清高】兩人を
（湯淺清高）
金剛童子や勢多迦の

二人の役になぞらへて
倒れかかりし神柱

立直さむと眞心の
限りを盡し身を盡し

世人の覺醒を【松村】や
【外山豊二】氏【加藤明子】
（外山豊二）

【藤津久子】の筆の補助
神代の巻の前【宇城】
（加藤明子）

口に任せて【信五郎】
なみなみならぬ竝松の
（藤津久子）

流れも深き物語
空吹く風の颯々と
（宇城信五郎）

心いそいそ言靈の
車に乗りて勇み行く

あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ

靈たまの礎いしず (五)

一、高天原たかあまはらに復活ふくくわつしたる人間にんげんの靈身れいしんは、地上ちじやう現實界げんじつかいに生存せいぞんせし時のとき如ごとく、思想感しさうかんじ情意識等やういしきとうを有いうして樂たのしく神かみの懷ふところに抱いだかれ、種々しゆじゆの積極せつきよく的てき神業しんげふを營いとなむことを得えるは前まへに述のべた通りとほりである。

扱さて人間にんげんは何どうして現界げんかいに人ひとの肉體にくたいを保たもちて生うまれ來くるかと云いふ問題もんだいに至いたつては、如何いかなる賢哲けんてつも的てき確かくな解決かいけつを與あたへて居ゐない。併しかし是これは實じつに止やむを得えない所ところである。物質ぶつしつ的てき要素えうそを以もつて捏こね固かためられたる人間にんげんとして無限むげん絶對ぜつたいなる精靈界せいれいかいの消息せうそくを解釋かいしゃくせむとするのは恰あたかも木きに倚よりて魚うをを求もとめ、海底かいていに潛ひそみて焚火たきびの暖だんを得えむとするやうなものである。故ゆゑに現界げんかい人は死後しごの生涯しやうがいや靈界れいかいの真相しんさうを探さぐらむとして、何程なにほど奮ふる勉努力べんどりよくした所ところで到底たうてい不ふ可か不ふ成せい功こうに終をはるのは寧むしろ當然たうぜんである。一度いちど神界しんかいの特とく別べつの

許可を得たるものが、無数の靈界を探り來たり、之を現界へその一部分を傳へたものでなくては到底今日の學者の所説は臆測に過ぎないことになつて了ふ。

一、抑も高天原の天國に住む天人即ち人間の昇天せし靈身人は地上と同様に夫婦の情交を行ひ、終に靈の子を産んで是を地上にある肉體人の息に交へて人間を産ましめるものである。故に人は神の子、神の宮といふのである。地上は凡て天國の移寫であるから天國に於て天人夫婦が情交を行ひ靈子を地上に蒔き落す時はその因縁の深き地上の男女は忽ち靈に感じ情交を爲し胎兒を宿すことになる。その胎兒は即ち天人の蒔いた靈の子の宿つたものである。その兒の善に發達したり惡に落つるのも亦その蒔かれた田畑の良否に依つて幾分かの影響をその兒が受けるのは止むを得ない。智愚正邪の區別の付くのも止むを得ない。石の上に蒔かれた種子は決して生えない。又瘠土に蒔かれた種子は肥沃の地に蒔かれた種子に比すれば大變な相違があるものだ。之を思へば人間は造次にも顛沛にも正しき清き温かき優しき美はしき心を持ち、最善の行ひを勵まねばならぬ。折角の天よりの種子を發育不良に陥らしめ或は不發生に終らしむるやうなことに成つては、人生み

の神業を完全に遂行することは出来なくなつて宇宙の大損害を招くに至るものである。人間が現界へ生れて來る目的は、天國を無限に開く可く天よりその靈體の養成所として降されたものである。決して數十年の短き肉的生活を營むためでは無い。要するに人の肉體と共にその靈子が發達して天國の神業を奉仕するためである。天國に住む天人は是非とも一度人間の肉體内に入りてその靈子を完全に發育せしめ現人同様の靈體を造り上げ、地上の世界に於て善徳を積ませ、完全なる靈體として天上に還らしめむがためである。故に現界人の肉體は天人養成の苗代であり學校であることを悟るべきである。

一、胎兒は母體の暗黒な胞衣の中で平和な生活を續け十ヶ月の後には母體を離れて現界へ生れ喜怒哀樂の爲に生存するものだと言ふことは知らないが、併し生るべき時が充つれば矢張り生れなくてはならぬ如く、人間も亦天國へ復活すべき時が充つれば如何なる方法にても死といふ一つの關門を越えて靈界に復活せなくてはならぬのである。胎兒は月充ちて胞衣といふ一つの死骸を遺して生る如く人間も亦肉體といふ死骸を遺して靈界へ復活即ち生るのである。故に神の方から

見れば生通しであつて死といふ事は皆無である。只々形骸を自己の靈魂が分離した時の状態を死と稱するのみで要するに天人と生れし時の胞衣と見れば可いのである。胎兒の生るる時の苦みある如く自己の本體が肉體から分離する時にも矢張相當の苦しみはあるものである。併しその間は極めて短いものである。以上は天國へ復活する人の死の状態である。根底の國へ落ちて行く人間の靈魂は非常な苦しみを受けるもので、恰度人間の難産のやうなもので産兒の苦痛以上である。中には死産と謂つて死んで生れる胎兒のやうに最早浮かぶ瀬が無い無限苦の地獄へ落されて了ふのである。故に人間は未來の世界のある事が判らねば眞の道義を行ふことが出来ぬものである。神幽現三界を通じて善惡正邪勤怠の應報が儼然としてあるものと云ふことを覺らねば人生の本分は何うしても盡されないものである。一、天國に住める天人は地上を去つて天國へ昇り來るべき人間を非常に歡迎し種々の音樂などを奏して待つて居るものである。故に天國を吾人は稱して靈魂の故郷と曰ふのである。

眞神即ち主なる神は人間の地上に於て善く發達し完全なる天人となつて天國へ

昇り來り天國の住民となつて靈的神業に参加する事を非常に歡び玉ふのである。
天國の天人も亦人間が完全な靈體となつて天國へ昇り來り天人の仲間になることを大變に歡迎するものである。

譬へば爰に養魚家があつて大池に鯉の兒を一萬尾放養し其鯉兒が一尾も残らず生育して呉れるのを待つて歡び樂んで居る様なものである。折角一萬尾も放養しておいた鯉が一定の年月を経て調べて見ると其鯉の發育悪く満足に發育を遂げたものが百分一に減じ其他は残らず死滅したり、惡人に捕獲されて養主の手に返らないとしたら其養主の失望落膽は思ひやらるであらう。併し鯉の養主は只物質的の収益を計るためであるが、神様の愛の欲望は到底物質的の欲望に比ぶることは出来ない。故に人間は何處までも神を信じ神を愛し善の行爲を勵み、その靈魂なる本體をして完全なる發達を遂げしめ、天津神の御許へ神の大御寶として還り得るやうに努力せなくては、人生の自分を全うすることが出来ない而已ならず、神の最も忌みたまふ根底の國へ自ら落行かねばならぬやうになつて了ふのである。

ア、惟神靈幸倍坐世。

大正十一年十二月

(昭和一〇・六・四 王仁校正)

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

靈界物語 第一九卷 如意寶珠 午の巻

終り